## 2022年3月NHK中部地方放送番組審議会

3月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の審議会での答申を受け、「2022年度中部地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「2022年度中部地方向け地域放送番組編成計画」について報告があった。

続いて、ナビゲーション「ふうどトレード」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

#### (主な発言)

<ナビゲーション「水の中で羽ばたきたい 浜松・ぺんぎん村の30年」 (総合 1月21日(金)放送) について>

○ 冒頭で東海地方で暮らす外国ルーツの人が40万人と紹介していたが、美濃加茂市を取り上げる際には約1割が外国ルーツの人だと割合で紹介しており、指標が一致しておらず気になった。実数と割合の両方を示すのが望ましいと思う。中部地方向けの番組だったが、北陸地方にはあまり触れられていないと感じた。北陸地方で暮らす外国ルーツの人の現状も伝えることで、北陸の視聴者も実感を持って見ることができたのではないか。「外国ルーツの人」という表現はあいまいで、どういった人を指すのか

分かりにくかった。日本ではあまりなじみのない料理がたくさん紹介されていたのはおもしろく、実際に料理を作りたい人はQRコードから詳しいレシピにアクセスできるようになっていて、ネットとテレビがうまく融合していると思った。ナレーションの男性2人は、どのように担当を分けているのか分からず、なぜ分けたのか意図が知りたいと思った。イスラム教徒の男性とレシピを交換した日本人の親子が、その後、モスクやハラルショップに行ったことを紹介していたが、食べ物のトレードを機に交流が始まったことはよかった。同じ学校に通う日本人とフィリピン人の高校生2人は、全日制と定時制という同じ空間を共有しながら、ふだんは顔を合わせない組み合わせでおもしろい人選だと思った。ただ、同じ部屋で調理しているにもかかわらず、やりとりはオンラインで行う演出には疑問を感じた。コロナ対策かもしれないが、当人たちも困惑していたと思う。最後にツーショットで写真を撮る時も間にアクリル板を挟んでいて、やりすぎだと思った。食べ物をきっかけにお互いの距離を縮めようという、よいテーマだったのに、それが画面を通じて表現し切れておらず、最後まで距離が残っているように感じられたのは残念だった。

- ドキュメンタリーというよりは、制作する側が考えた企画から生まれた番組だと思うが、仕掛けが目についてしまい、過度な演出だと感じる部分があって気になった。食は誰にでも取り組みやすいテーマなので、食事を通じて仲良くなるという企画自体はよかった。今回は、第一歩として一対一の組み合わせで、それぞれの組がうまくいっていたが、今後は、うまくいかなかった組み合わせや、複数どうしの組み合わせがあってもよいと思った。食事を通じて文化交流の入り口を開いていくようすは見ていておもしろかったが、一対一の交流では、広がりに限界があるのではないかと感じた。リラックスした雰囲気の番組で、NHKがこうした企画をきっかけに、社会的交流や文化交流を進め、国や宗教の違いを乗り越えていこうという姿勢が見えた。ただ、日本人と外国人の接点は複数あると思う。食以外の何かを交換しないのか、この企画は1回で終わりなのか、それともシリーズにしていくのかなど、今後どうしていくのか気になった。
- 留学した際など、お互いの国の食事をふるまうといったことはよくあると思うが、 それを番組にするという考えはおもしろいと感じた。コロナ禍で知らない人との接点 を持つことを避ける傾向がある今、このような番組を放送する意味はとても大きいと 思う。1組だけでは、食事を交換する際の考え方ややり方が偏る可能性があるので、 異なる背景を持つ2組を紹介した構成もバランスが取れていたと思う。サブタイトル の「ふうどトレード」はフードと風土を掛けたものだと思う。フードをトレードして いたのは伝わってきたが、風土のトレードとは一体何だったのか分からなかった。料 理をするという体験を通じてお互いの国の土地柄や文化を共有していくことだとすれ

ば、それが番組内でなされていたかは疑問が残る。シリア人男性の「日本人がシリア人に対して持つネガティブな印象をなくしたい」という思いは、今回の取り組みによっていくらか実現したとは思うが、トレードの相手である日本人女性が料理以外に、日本のどのような風土を共有したのか分からなかった。日本人がマジョリティーで外国人がマイノリティーという位置づけで、マイノリティーに対する偏見が存在し、それを解消することこそが多文化共生なのだという偏った価値観を前提として、番組が制作されているように感じた。NHKが番組として放送するならば、どのような状態になれば「ふうどトレード」が成功したといえるのか事前にしっかり決めておく必要があると思う。温かい気持ちになれる番組だったので、ぜひ改善していってほしい。また、放送から時間がたってから見返した際、番組で紹介されていた二次元コードの遷移先がNHK岐阜放送局のツイッターになっており、番組放送時にはどのような情報が掲載されていたのか分からなかった。放送とインターネットを組み合わせたサービスを提供する際には、放送終了後も利用できるよう、情報が継続的に提供される仕組みを作っておいてほしい。

# (NHK側)

「外国ルーツ」という表現を「外国籍の」とすればより明確 になったかもしれないが、国籍だけでなくもっと幅広い人が外 国人的な存在として捉えられているのが現状だ。父母の国籍が 違なる人や、日系ブラジル人の3世や4世の人など国籍だけで は捉えられない人たちがこぼれ落ちてしまうと考え、外国ルー ツとした。ナレーションについては、基本的に日本人側のパー トは山田アナウンサー、外国ルーツの人側のパートはカメ ルーンにルーツを持つぶらっくさむらいさん、という使い分け だった。ただ、厳密に使い分けることで、ぶらっくさんが「外 国側の代表だ」と枠にはめるようになってはいけないと考えな がら編集したこともあり、少し分かりにくくなってしまったか もしれない。交流に向けた小さな一歩を促したいという番組の ねらいを踏まえ、複数どうしの組み合わせよりも、長い時間会 話ができ、お互いの背景や人柄をよく知ることができる、一対 一の組み合わせを採用した。一方、複数対複数の場合は予定調 和ではない化学反応のようなものが生まれやすいと思うので、 そうした見せ方も考えていきたい。制作していく過程で「ふう どトレード」の「風土」は文化的背景だけでなく、境遇やルー ツ、その人らしさを形づくったものへと解釈を広げたため、定 義があいまいなまま伝わってしまったかもしれない。。これか らも、どうすればよりわかりやすくなるのか、構成や伝え方を 工夫しながら番組を制作していきたい。

- 食生活を通じて多くの国の人と楽しく理解し合える番組だと期待していたので、2 0年日本に住んでいるシリア人男性とその近所の日本人女性、同じ高校の定時制に通 うフィリピン人と全日制に通う日本人という組み合わせに戸惑いを感じた。岐阜県に 立派なモスクやイスラム教徒用の食材を扱う店があることを知ることができてよかっ た。シリア人男性と日本人女性は、同じスーパーで材料を購入しているように見えた が、わざわざ材料を送り合って、それぞれの家庭をオンラインでつないで調理してい た。お互いを理解するという目的からすると、もっとふさわしいやり方があるように 思えた。高校生の2人も同じ部屋で、実際に顔が見える距離で料理をしているのに、 オンラインで会話をしていた。本人たちも違和感があると言っていたが、コロナ禍で の社会情勢を過剰に気にしていると感じた。お互いの作った料理を並べてもう少し近 くで会話ができるようにすれば、もっとフランクな若者らしいつながりが生まれたの ではないか。ただ、後日、日本人女性の子どもがイスラム教徒用の食材を扱う店で買 い物をしていたり、日本人女性がモスクで祈りの作法を習っていたりと交流が深まっ ていくようすには、うれしい気持ちになった。
- $\bigcirc$ 「ふうどトレード」はNPOなどの団体が行っている取り組みで、それをNHKが 取材したのか、それともNHKが番組のために企画したものか分からなかった。NH Kのディレクターが考えたのであれば、それを最初に伝えてほしかった。シリア人男 性は日本に20年住んでいて、天ぷらなど日本食のことは知っているはずだ。シリア の食べ物を日本人が食べるのは初めてかもしれないが、日本の食べ物を20年も住ん でいる人に食べてもらう意味はあまりないと思う。日本の高校に通うフィリピン人の 生徒にも、から揚げを食べたことがあるか聞いていたが、当然あるはずで「トレード」 ということばが先走ってしまったように感じた。シリア人男性と料理をトレードした 日本人女性が、料理にとどまらず、ハラルショップやモスクに行くなど、相手の文化 や風土を知ろうとしていく部分をもっと伝えてもよかったのではないか。フィリピン 人の高校生のトレード相手である日本人の高校生に、料理や個人的なことだけでなく、 フィリピンのことをもっと知ってもらえるような話が展開されてもよかったと思う。 「定時制と全日制が一緒に文化祭をやれたらいい」と話す場面があったが、ぜひNH Kも関わって実現させてほしい。自分たちとは異なる背景を持つ人とも、身近なこと をきっかけに交流していこうという、日本人に欠けている部分を取り上げたディレク ターの発想は評価したい。
- 出演していた日本人親子や高校生たちは、素朴で味わい深い人柄ですてきな番組

だった。この企画は、これから育てていくとよりおもしろい番組になるのではないか と感じた。イスラム教徒のシリア人男性と日本人家族との触れ合いでは、日本人の母 親が異文化に触れて価値観を広げ、新たな一歩を踏み出す様子が描かれていてよかっ た。好きな料理の作り方を教え合い、一緒に食べることで、国境を越えて分かり合え ることは本当にすてきだと思った。同じ高校の日本人とフィリピン人の少年の触れ合 いもよかった。2人が進路を語る場面で、日本人の少年が「とりあえず大学行って」 と言った後に、フィリピン人の少年の「専門学校に行きたかったけど、お金がないか ら弟のために働く」との発言を聞き「お父さんみたいじゃん。大人だな」と言ってい たが、彼自身、かなりの衝撃を受けたのではないかと思った。から揚げを作ってもらっ たりチョコレートドリンクを飲むというやり取りを通じて、お互いの境遇や価値観に 触れることが、彼らの人生を大きく変えるきっかけとなるのではないかと感じた。小 さな交流が、異文化を理解し、多様性を認め、平和な世界を実現していくと改めて感 じた。天ぷらとから揚げというメニューは当たり前すぎて驚いたが、自宅で作る機会 が少なくなっているとも思うので、それぞれの家庭の味がリアルに分かるよい選択だ と思った。こういった取り組みは、誰にでもできることだと思うので、自分自身も挑 戦してみたいと思った。

- 見始めたときは「ナビゲーション」だとは思わず、新番組が始まったかのような印 象を受けた。「ナビゲーション」では、これまでもさまざまな演出に取り組んできたと 思うが、番組として作りたい世界観はどんどん薄れていったのではないか。冒頭や終 わり方はフォーマット化されている場合が多いと思うが、番組自体を印象づける部分 としてとても重要だと思った。東海地方には外国ルーツの人が40万人暮らしている と紹介されたが、北陸地方の情報がなかったため、北陸に住む人にとってはネイバー ズ、身近な隣人という感じがしなかったのではないか。中部地方全体で何か共通する ものを伝える番組なのか、あくまで東海は東海、北陸は北陸として伝える番組なのか、 よく分からなくなった。前者であれば、中部というイメージが伝わってくるものが、 何かひとつでもあるとよいと思う。番組自体は、とても親近感の湧くものだったが、 私たちは外国人を外国人としてしか見ていないのだと改めて感じた。多文化共生や多 様性というテーマは、年代によって考え方や捉え方が大きく異なると感じている。出 演していた日本人の子どもにとっては、外国人の同級生たちと日常的に触れ合ってい る環境のなかでの認識で、親とは異なることを感じている部分があるだろうと改めて 思った。外国人はマイノリティーで、日本人はマジョリティーという話になると「ネ イバーズ」ということばの意味とは異なってくると思うので、ことばの使い方にも気 をつけてほしい。
- 外国人との交流がテーマだったが、多くの人にとって、ことばの壁がネックになっ

ているのではないかと思う。出演していた2人の外国人は日本語がうまく、文化交流 に踏み出そうという場面としてはリアリティーに欠けるように思い、日本人側の視点 で話が進んでいったようにも感じた。シリア人男性が、日本でのイスラム教徒のイメー ジは、恐い、汚い、ひげと言っていたが、同じイスラム圏でも国によってかなり違う こともあるので疑問に感じた。世界中のいろいろな所で世界中の料理が食べられる時 代だが、紹介されていたような家庭料理は、現地の味わいや香りをもっとも感じさせ てくれるものかもしれないと思った。モスクとハラールの紹介をしていたが、イスラ ム文化をもう少し掘り下げて、カルチャーショックを引き出してもよかったのではな いか。小学生の息子が知らないうちにハラルの店に行っていたと聞き、驚いている母 親の様子が最も印象に残った。高校生の例では、2人が将来を語り合う場面で日本人 の生徒が「とりあえず大学行って」と言った後に、フィリピン人の生徒が「専門学校 に行きたかったけど、お金がないから弟のために働く」と言っているのを見て、彼ら の距離は少し遠いのではないかと感じた。番組のテーマからすると、なぜこの部分を そのまま使ったのか疑問に思った。日本人の生徒が、「外国ルーツの人たちがいること に違和感はないけれど、関わりはしない」と言っていたが、多くの日本人にとっての 近所づきあいも似たようなものかもしれないとも思い、結局、番組として何を伝えた かったのかよく分からなかった。

- お互いの好きな料理を交換することで交流のきっかけにしようという企画は、とても意味のあるものだと思ったので、その意図や継続するのかどうか、今後、どう展開していくのかも知りたくなった。多文化共生が、理念的で大きなものだけではなく、もっと身近なものでもあることを伝えるために、複数どうしの組み合わせではなく、一対一の2組を紹介していたことに好感を持った。高校生の2人は、同じ空間にいながらオンラインで会話をしているという状況に違和感があったものの、心の距離が縮まっていくのに合わせて、2人の間の距離も変化しているようで、その変遷がおもしろかった。日本人は、交換する料理として天ぷらとから揚げを選んでいたが、何を提供すれば、食だけでなく文化的なものも含めたトレードができるのか考えさせられた。食べ物はお互いを知る一歩であり、外国の食べ物を知ることは、その人を知ることであるというのは、本当にそうだと思った。
- 番組名からは、山間部と海側でのフードトレードかのような印象を受けたが、実際に見てみると、おもしろいアイディアかつ、なかなか思いつかない企画で、制作者の自由な考え方はすばらしいと思った。ぶらっくさんのナレーションは、とてもフランクで雰囲気にマッチしていたと思う。食材を準備する前に、相手がどういった人なのか事前にプロフィールを交換したと思うが、相手を思い浮かべながら、どんな食材を用意しようかと、制作者との間で交わされたやり取りも聞いてみたいと思った。かつ

ては、葬儀や法事の際に近所どうしで集まり、一緒に料理を作っていく中で、お互いの人となりを知るということは当たり前にあったが、いまや、日本人の近所どうしでもそういったことはなくなったと思う。環境という意味では、家庭は一番ミニマムな風土だと思うが、家族で新しい土地に根付くまでには相当な試行錯誤が必要だろう。外国人という立場であればなおさらで、彼らの心情に向き合っていくには、大変興味深い取り組みだと思った。食べるという、生きるための根本的な営みをテーマにしたことはとても魅力的で、食をテーマにした番組が、今後もさまざま制作されるとおもしろいと思った。

○ 画面左上に「ナビゲーション」と表示はあったが、これまで見てきたものとは大きく異なる内容で、新しい番組を始めるかのような印象を受けた。「ふうどトレード」は、語呂もよく発展していく可能性を感じたが、番組で描かれていたものは、そのことばから想像したり期待していたものとは異なり、少し物足りなかった。天ぷらとから揚げは、日本に長く住んでいる外国人に振る舞う食べ物としてはいかがなものかと思った。外国人が紹介していた料理には、耳にしたことがない単語が多かった。最低限の解説やなぜこの食材を使うのか、どのような調味料を使い、どういったときに食べるのかなど、丁寧な紹介があると、相互理解が深まり、見る人もより興味を持てたと思う。高校生の2人が、同じ部屋にいながらリモートで会話をしていたり、記念撮影の際にも、間にアクリル板が置かれていたのには、番組のコンセプトを考えると違和感があった。また、進行役であるはずの山田アナウンサーが、2人いるナレーターのうちの1人になってしまっていたことや、放送後、時間がたってから見ると、番組で紹介されていたQRコードからNHK岐阜放送局のツイッターに遷移してしまったことも残念だった。

# (NHK側)

日本人が、外国人のことを違いがあって興味深い存在としてとらえ、知らない世界を知って楽しむような番組にはならないように気をつけて制作した。日本人と外国人を対等に扱い、それぞれの視点や意見を大切にしようと意識した。ただ、どうしても日本で暮らす外国人の方が悩みを抱えているケースが多く、その悩みの解消に少しでも役立ちたいという思いから企画が始まったため、外国人側の悩みやその背景を中心に話題が進み、外国人パートの分量が多くなった。日本人側のメニュー選択の趣旨は二つあり、一つは日本の文化が分かるような料理であること、もう一つは、自分の大好物で、外国人に元気になってもらえるような料理であることだった。放送時間の都合上、

二つめの趣旨の説明が足りず、日本の文化が分かるような料理が期待される場面で、なぜ天ぷらとから揚げなのかという疑問を生んでしまった。単なる天ぷらやから揚げとしてではなく、その家ならではの味やこだわりを感じさせる料理として紹介できるとよかった。

# <放送番組一般について>

- 2月26日(土)の「ワタシたちはガイジンじゃない!」(総合 前 10:05~10:55 中部ブロック)を見た。今から30年前、労働力として日系ブラジル人の来日が始まって以来、彼らが経験してきた職場や住まいなどをめぐるエピソードを、イッセー尾形さんが一人芝居で演じていた。現実にあった出来事を題材に、風刺とユーモアを交えながら演じ、その出来事に実際に関わった人も観客として加わることで、非常に共感度の高い番組となっていた。外国人に対する偏見や差別が、職場や暮らしの中にあるということがよく伝わってきた。東日本大震災やロシアによるウクライナ侵攻など、住み慣れた土地を離れて生きざるをえない現実がある中で、毎日家族とともに温かい食事がとれることの大切さを痛感させられた。一人芝居の会話を通じて、文化や考え方の違いをうまくユーモアに変換することで、見ている人の緊張の糸をほぐすような番組だった。戦争や災害といった厳しい現実を直視することは必要だが、人間は緊張した状態を永遠に続けることはできないので、こうした番組の必要性を強く感じた。身近なところから、さまざまな難しい問題を解決する糸口が見え、行動を起こせるというメッセージを発していて、大変おもしろくためになった。
- 2月28日(月)の逆転人生「逆転の人事改革!会社を変えた新リーダー」を見た。人事改革によって不祥事から立ち直った富山県の製薬会社を紹介しており、今、注目されているテーマでもあり興味深かった。強い年功序列や縦割りの組織により硬直化し、風通しが悪くなっていた会社を、最初は実力主義とジョブローテーション、数字による評価の導入で変えていこうとしたものの、社内の人間関係に摩擦が生じうまくいかなかった。そこで、人と人をつなげる力、人を育てる力のある1人の女性を管理職に登用したところ、社内の雰囲気がよくなり、それぞれの社員が活躍できる会社に生まれ変わった。人と人の関わりを評価する、情意評価という新たな制度を導入したことで、組織が生まれ変わっていく様子はとてもおもしろく、日本全体が縮小していく中で、古い組織を変え、成長につなげるにはチームとしての力を高めていくしかないと感じた。

- 3月4日(金)のザウルス!今夜も掘らナイト「福井は餅パラダイス!もっとお餅が好きになっちゃうSP」を見た。サブタイトルにスペシャルと付いていたが、あまりスペシャル感は感じられなかった。NHKプラスでも見られるので、福井県外の人が見ればおもしろかったと思うが、県内に向けた番組としては、さほど新しい情報もなく、もの足りなさを感じた。餅の食べ放題がある店や、厄よけのために餅をまく伝統行事の紹介もよいとは思うが、そもそもなぜ福井県は餅の消費量や購入金額が全国有数なのか、その理由や背景といったところまで掘り下げていれば、スペシャルだと感じられたのではないか。
- 3月8日(火)のクローズアップ現代+「"戦火の下"でいま何が▽最新報告・緊迫のウクライナ」を見た。今、ウクライナで起きていることをドキュメンタリーとして淡々と伝えており、とても鮮烈で衝撃的だった。同じ地球でも、平和な日本と戦争の中に置かれているウクライナの現実との差を考えさせられるよい番組だった。市民の行動をカメラで追っていたが、彼らの姿からは、銃を取らないまでも戦争に"参加"していることが見て取れた。ハリコフの小児病院で看護師として働くナターリャさんが、子どもたちを見捨てず避難の手伝いなど最後まで面倒を見ており、自分が同じ状況に置かれたとき、同じような行動が取れるだろうかと思った。また、目の前の人が爆撃で亡くなってしまったり、遺体を袋に入れて堀に埋めていた場面もとても衝撃的で、人が人として扱われないような事態がウクライナで起きていることに衝撃を受けた。市民やジャーナリストが撮影した動画がSNSで配信され、それがテレビのニュースで取り上げられる時代となり、世界のかなたで起きていることが我々の世界にどう関わるのかなど、さまざまな出来事が関連しながら同時に変わっていくようすが見られて興味深かった。
- 3月11日(金)のナビゲーション「命を守る 南海トラフ地震臨時情報」を見た。 南海トラフ地震が発生する可能性が高まったときに出される臨時情報が発表されると、 津波からの避難が間に合わない地域で、事前に1週間の避難が求められると伝えてい た。出演していた名古屋大学・福和伸夫教授の「地震は確実に1週間以内に起こるわ けではないが、空振りであっても、素振り、いい練習と思って備えてほしい」というこ とばは、今までのどんなことばより身にしみて納得できた。これまでの「ナビゲー ション」は、大上段に構えたりする印象が強かったが、今回は、大きな題材を落ち着 いて紹介していたと思う。
- 3月11日(金)のナビゲーション「命を守る 南海トラフ地震臨時情報」を見た。 メディアの最大の役割は災害による被害を防ぐことだと思うので、3月11日という タイミングでこのテーマを取り上げたのは適切だったと思う。東日本大震災で祖父を

亡くした女性が、家族で事前に避難場所などの情報を共有する重要さを語っていたが、そのことばはとても重く、多くの人の心に響いたのではないか。南海トラフ地震では、西側のプレートがずれた場合、東側のプレートもずれる可能性があるため、最初のずれが発生した際に、臨時情報を出し1週間の事前避難を求めると説明していたが、その具体例として1944年の昭和東南海地震と1946年の昭和南海地震を挙げていた。2年も時間が空いた例を紹介されても、1週間の事前避難をしようという気持ちにはならないのではないかと感じた。研究者や行政は科学的根拠に基づいて説明しているとは思うが、メディアは、それを一般の人にも分かりやすくかみ砕いて伝えるべきではないか。番組の最後に、福和教授が「突発で地震が起きても大丈夫なように常に備えておいてほしい」と言っていたが、もっと強調して伝えるべきメッセージだったと思う。

- 3月11日(金)のナビゲーション「命を守る 南海トラフ地震臨時情報」を見た。 津波の高さを実感できるように、津波を表した模型の中に人の身長と比較できるミニ チュアを入れたり、南海トラフ地震の震源域の位置やプレートの動きを手作り感のあ る模型を使って説明したりしていた。臨時情報という非常に分かりにくく、ほとんど 周知されていない制度を分かりやすく紹介するために、さまざまな工夫をしているこ とがよく伝わってきた。最初の大地震の後、それに連動して短期間のうちに次の大地 震が発生すると予想されるため、事前避難を促し、助かる命を救う仕組みであること をうまく説明していた。個人として避難生活や日常生活をどうしていくのか、企業の 事業継続をどう判断するのか、自治体の関わりはどうなるのかなど、問題点や今後の 課題も分かりやすく整理されていた。膝に問題を抱えているため避難所での生活が心 配だという高齢者夫妻の事例も、同じ状況の人が実感を持って受け止められるのでよ かったと思う。東日本大震災で祖父を亡くした語り部の女性の「事前に家族で避難場 所などについて話し合うことが大事であり、臨時情報が生活の一部としてなじみある ものにならないといけない」ということばは、まさに防災や減災の本質を突いている と思う。一方、3月11日という日の問題提起としてはよくできていたものの「ナビ ゲーション」の最終回としては、ややもの足りなさを感じた。
- 3月13日(日)に石川県知事選と金沢市長選、輪島市長選の開票速報を見た。石川県知事選は28年ぶりの交代で、保守分裂という構図もあり、県内での関心が非常に高く、放送局に求められる役割はとても大きかったと思う。NHKは信頼性が高いメディアであり、そのポジションをしっかりと維持していると改めて感じた。選挙においては情報の信頼性が求められるが、NHKは役割をしっかりと果たしていることが分かった。動画配信サイトで、選挙をめぐる偏った意見や発言をライブ配信している放送局もある中で、NHKの開票速報は裏付けされたことのみを伝えており、確実

で信頼できる情報だからこそ有権者が誤った判断や理解をせずに済むという意味でとてもよかった。一方、NHK選挙WEBでは多数の動画や丁寧な解説を提供しているものの、番組とはリンクしていないように感じたので、情報の信頼性を維持しつつ、視聴者が情報にアクセスしやすい工夫をしていけばよりよくなると思う。

- 3月14日(月)の「まるっと!」を見た。名古屋フィルハーモニー交響楽団が、ロシアの作曲家ショスタコーヴィチの交響曲第8番を、曲目を変更せずに演奏したと伝えていた。ロシアによるウクライナ侵攻を受け、戦争をテーマにしたロシアの曲を予定通り演奏するかどうか、楽団としては悩んだが、特定の国に対する差別や敵意を持つのは人間として当たり前であることを認めながらも、それを越えていくために芸術はあるという信念のもと、今この時にこの曲を聞いてもらうことが必要だと判断したとのことだった。また、名古屋外国語大学の亀山郁夫学長が、音楽や文学はその国の文化に根ざしたものではあるが、個人としての芸術であることや、個人と全体を分けて考えることの必要性を解説していた。ウクライナ侵攻については、さまざまな国や地域の立場から報道されており、何が正しいのか分かりづらい状況だが、善悪を越えた人間一人ひとりの価値を見失わないことの大切さが感じられる内容だと思った。このような小さな活動を放送で取り上げること自体、価値のあることだと感じた。
- 「ナビゲーション」は番組審議会の視聴番組として頻繁に指定されており、これまで何回も意見を述べてきた。意見がどのように番組制作に反映されていくのか関心を持ちながら審議会に臨んできたので、「ナビゲーション」が3月11日の放送で最終回になることを知って衝撃を受けた。

# (NHK側)

「ナビゲーション」へのさまざまな意見は、非常に参考にしながら制作してきた。平日午後6時台は地域のニュースという認識はそれなりに強いと思うが、金曜午後7時30分に地域向けの放送をしていることは、あまり認知されていないと考えている。「ナビゲーション」は中部地方に向けた番組のため、東海と北陸どちらの視聴者も意識して伝える必要があり、どうしても目線が広がって全国向けの番組に近くなってしまう。地域向けの放送枠は限られているため、金曜午後7時30分の放送枠は、すべて各県に向けた内容にするのが理想だが、各地域局の制作パワーの問題もあり現実的には難しい面がある。その中で、各県に向けた放送を基本にしながら、少しでも地域に密着した形にするため、新年度は、中部地方向けの番組を原則廃止し、

東海と北陸地方それぞれに向けた新番組を始めることにした。

- 「ナビゲーション」が勇気ある撤退ならばよかった。4月からの番組に期待している。
- 3月11日(金)のねほりんぱほりん「復興活動から離れた人」と、星野源のおんがくこうろん(4)「中村八大」(E元)後10:30~11:00)を見た。どちらの番組にも人形が出ていたが、実際の人物に代わって人形が使われている意図もよく分かりとてもよかった。最近は、テレビを見ると戦争や地震などの映像が強烈で衝撃を受けてしまう。内容も教訓的だったり、震災復興に取り組む人がヒーロー的に扱われたりすることが多い中で、人形を使うことでリアルな人の姿を見せずに、その声を聞かせるという「ねほりんぱほりん」の演出はよかった。「星野源のおんがくこうろん」はテレビで放送しているのにラジオ番組のようになっていて、人形が発する声に耳を傾けるのと同じような姿勢で、音楽をじっくり楽しむことができた。通常のバラエティ番組や音楽番組とは異なり、画面を"絵"で埋めようとしない点にとても好感が持てた。NHK以外で人形を使った番組はあまり見かけないのでNHKらしさを感じるとともに、人形を使うのはどういうことなのか考えさせられた。
- 多様な文化を持った人たちが共生できる社会を目指す、福井放送局のキャンペーン「ハロー!ネイバーズ」関連のパネル展示を見た。福井県で暮らす外国人の声を一人ひとりの写真とともに紹介しており、よいPRになっていた。地域放送局による、地域に寄り添った取り組みを、地域の中で発信していくには、番組だけでは限りがあるので、こうした展示やイベントも重要だと思う。
- 同じ番組であっても、その地域の視聴者と、その地域以外の視聴者では、番組を見る目線や受け止め方が異なることがある。どれだけ地域密着型のNHKになれるかは、そういった違いにどれだけ気づくことができるかにかかっていると思う。NHKは異動が多く、職員が地域の実情に詳しくなる前に担当者が代わってしまうイメージがある。その地域に社員が住み続けている民放と比べるとハンディキャップがあると思う。また、民放は話題のお店やおいしい大盛り料理など、分かりやすく柔らかい情報の収集が得意で、地域の視聴者が求めているものに応えているとも思う。そうした面でも、NHKの異動の多さが課題になっていると考えている。

## (NHK側)

今までNHKは全国転勤型の採用が大多数であり、地域密着 という点では、弱点になっている面もあるかもしれない。そこ で、NHKでは地域職員という採用形態を増やそうとしている。 同じ地域に住み続けるジャーナリストなどの人材を募集し、地域に密着した取材をしてもらうことを考えている。一方で、転勤してきた人間ならではの視点が、よい方向に作用する場合もある。例えば、富山県で冬場に用水路に落ちて亡くなる人が多いのは、地元の人にとっては当たり前のことだったが、転勤してきた記者が疑問に思い、着目したことが用水路事故防止キャンペーンにつながった。

> NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

# 2022年2月NHK中部地方放送番組審議会

2月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、12月26日(日)に放送したBS1スペシャル「河瀨直美が見つめた 東京五輪」の調査結果について報告があった。

会議ではまず、「2022年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「2022年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、ナビゲーション「水の中で羽ばたきたい 浜松・ぺんぎん村の30年」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長松田 裕子(三重大学学長補佐)副委員長坂田 守史((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)委員稲垣 貴彦(若鶴酒造(株)取締役)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師·玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

## (主な発言)

<「2022年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について>

○ ウェブサイトやアプリなど、放送だけでなくさまざまな形で番組が見られるよう、 どんどん進んでいる印象を受けたが、すべての情報が一か所に集約されているわけで はない。NHK for Schoolや各放送局など、さまざまなサイトがあり、 アプリもあるという状況で、視聴者はどこにどのような情報があるのかきちんと把握 できているのか気になっている。

# (NHK側)

NHKには多くのウェブサイトやアプリがあり、どこにどのような情報があるのか、さまざまな形で伝えてはいるが、伝えきれていない部分もあるかもしれない。今後、何らかの形で整理するなど、より分かりやすい形で提供していきたいと思っている。

# <「2022年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」について>

○ もっとも大きな変更として金曜午後7時台の番組を東海向けと北陸向けに分けるとのことだが、2つのエリアにきっちり分けると考えてよいか。また、北陸は北陸3県を指すと思うが、東海はそれ以外のエリアという認識でよいか。北陸新幹線が敦賀まで延伸することで北陸3県がつながるが、さらに次を見据えると関西圏とのつながりが重要になると思う。北陸と関西の間で相互に情報を発信していってほしい。共生という面では、主に外国人を意識していると思うが、外国人に限らず、コロナ禍で人と人とが分断され、経済的な格差などさまざま分断が生まれているので、そうした部分もくみ取り、お互いを結び付けることも意識してほしい。

## (NHK側)

東海と北陸で完全に線引きするわけではない。文化圏や生活圏が異なるため、金曜午後7時台は各県の放送局がそれぞれの県に向けた放送をすることが基本になる。一方、各県向けの番組だけで年間を通じて放送するのは難しい面もあり、北陸の3局や東海の4局が一緒に、各地方に向けた番組を制作するなど、効率的に進めていく必要もある。ただ、いずれにしろ、地域の視聴者が求める情報を把握し、それを伝えるのが今回の一番のポイントである。これまで、名古屋局が制作した番組を、中部地方向けに放送することが多く、例えば、愛知県の話題を北陸の視聴者が見るなど、求められている情報とは違うのではないかと感じる部分があり、東海と北陸に分けてみようと考えた。また、北陸は関西や首都圏との結び付きが強いと考えており、視聴者ニーズを第一義に考え、従来の放送範囲を越えた連携が重要だと考えている。多文化共生に関しては外国人だけでなく、さまざまな意味での共生社会を目指すが、いきなり幅広く構え

すぎてしまうと焦点がはっきりしなくなってしまうため、まず は在留外国人をターゲットにした。コロナ禍の影響もあり、い ろいろな事情を持った人がいると思うので広い視野で伝えてい きたい

- 地域の安全・安心を守ることは一番大切なことであり、NHKにとって、その役割をしっかり果たしていくことが本当に重要だと思う。地域に寄り添うことは重要な視点だと思うが、リニア中央新幹線や一票の格差など、同じテーマであっても、それぞれの地域によって受け止め方や意見が異なることも多い。何が正解かは難しいとは思うが、こういったテーマにも挑戦していってほしい。
- 各地域放送局からの番組が増えることはとてもよいと思う。発達障害児への理解が進んでおらず、偏見やいじめなどが二次障害につながってしまう場合がある。そういう意味で、発達障害児の理解につながる新番組「でこぼこポン!」が始まるのはとてもよいことだと思う。多文化共生の取り組みでは、外国人を中心的なテーマにすることは分かったが、発達障害児など、世の中の意識や理解が進んでいない分野も取り上げていってほしい。
- 一級河川を多く抱える中部地方では甚大な水害のおそれがあるといった、地域ごとの特性に応じた、住民に優しい取り組みを続けてほしい。また、SDG s が一時的なものではなく、長期的に続く取り組みとなるよう積極的に伝えていってほしい。偏った放送とならないよう、さまざまな情報を集約し、丁寧な番組制作を今後も続けてほしい。
- 交通の便などにより文化圏が異なり、その違いに応じて番組の作り方を変えていくという説明は大変興味深かった。 10年後の都市の姿を想像しながら、在留外国人の問題を取り上げるというのはよい視点だと思った。災害報道については、自然災害だけでなく、コロナ禍なども広い意味での災害と捉えて、番組制作に取り組んでほしい。
- 参議院議員通常選挙が地域に与える影響や争点をインターネットも活用して丁寧に伝えていくとの説明があったが、公共放送として選挙報道で果たすべき役割は大きいので、分かりやすく情報を提供する具体的な方法を検討してほしい。幅広い層にアプローチできるNHKだからこそ、単にインターネットに情報を掲載するのではなく、投票率が低い層にも届くような工夫を期待している。

- 放送番組全体における全国放送の割合の高さを知り、限られた地域放送時間の中で、 さまざまな内容を伝えていくのは大変だろうと思った。他の地域の取り組みが参考に なったり、東海と北陸に共通するテーマもあったりすると思うので、地域の枠にとら われず新しいテーマに挑戦してほしい。
- 歴史や文化、スポーツ、芸能などは、コロナ禍で"不要不急"と言われてきたが、不急であったとしても、決して不要なものではないと思う。だからこそ、そういった分野を掘り下げて伝えるのはとてもよいことだと思う。これらの分野では、リアルで接することが大事ではあるが、番組において深掘りすることでリアルな体験との相乗効果を生み出し、活力が出るような放送をお願いしたい。
- 中部地方のイメージをどう作っていくのかは、考えていくべき点の一つだと思う。 コロナ禍によって、産業や観光でつながる遠方の地域より、近隣の地域を強く意識するようになったと感じている。北陸としての連携はもちろん大事だが、東海と北陸に 共通する課題にスポットを当てたり、逆に違う部分を取り上げたりすることで、中部 という地域を理解でき、イメージができてくるのではないかと思う。
- SNSやホームページで視聴者の疑問や意見を収集し、それに応えていくことで、 身近な公共メディアを目指すとのことだが、取り組み自体に気づいていない視聴者が 多いと思う。どうすれば知ってもらえるのか、できるだけ具体的に検討していくこと で、よりよい形になっていくのではないかと思う。
- 諮問された「2022年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、 各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をし たい。
- 異議なし。

# (NHK側)

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、3月の審議会で編成計画についてご説明したい。

<ナビゲーション「水の中で羽ばたきたい 浜松・ぺんぎん村の30年」 (総合 1月21日(金)放送) について>

- 冒頭は暗い雰囲気で少し心配になったが、番組が進むにつれ未来が開けるようなとても明るい内容になり安心した。これまで自分の思いを口に出せなかった中学生が、水泳大会をきっかけに周囲に働きかけ、自身の可能性を切り開いていく様子を表情から読み取ることができた。映像ならではの表現ですばらしかった。冒頭で、教室が輩出したパラリンピックの選手を紹介していたが、トップアスリートではなく、あくまで普通の生徒たちの成長にスポットを当てることで、とても共感できる番組となっていた。30年以上前から生徒たちの成長を見守ってきたぺんぎん村教室代表の伊藤裕子さんの視点やインタビューなどは、物語として一貫しており、とてもまとまっていたと思う。一方、ナレーションは主に女性で、一部で男性になっていたが、声の使い分けの意図が分からなかった。障害を理由に水泳教室への入会を断られた男性の「見栄えが悪い」というコメントを、インタビュアーも繰り返して言っているように聞こえた。制作者側が誘導したようにも受け止められかねないと感じ、気になった。
- 東京パラリンピックの競泳で金メダルを獲得した鈴木考幸選手を輩出した水泳教室ということが制作のきっかけだろうと感じたが、ぺんぎん村を取材した制作者の感度はすばらしいと思った。障害のある方に深く寄り添ってきた代表の伊藤さんは、何よりもすごい人だと思った。耳の不自由な女性が以前通っていた水泳教室では、声による指導に限界を感じ、周囲の反応を気にして「もっと詳しく教えてほしい」という気持ちすら伝えらえなかったというもどかしさや本心をしっかり伝えており、改めて障害のある方の気持ちがよく分かった。短い放送時間だったが、伊藤さんは「何かにぶつかっても、それは壁ではなく、開くことができる扉だ」という自身のことばを、まさに水泳を通じて実現しており、教え子たちの人生における大きな一歩になっていることもよく分かった。伊藤さんが新たにさまざまな大きさのプールを備えた施設をオープンしたと紹介していたが、どういう施設なのか、設立の経緯など基本的な情報が分からず気になった。
- 「人生を切り開く」というテーマで一貫していたので最後まで安心して見ることができた。目の前にある困難を、お互いにサポートしあいながら工夫と努力で乗り越えていっていることが生徒の様子からよく伝わってきた。聴覚に障害がある井出依芭さんが水泳を通じて成長していく姿はすばらしく、これからの活躍が楽しみになった。へんぎん村ができるきっかけとなった、脳性まひで体に多くの障害がある小林健三さんの水泳に対する思いや、実際に水泳によって人生が開かれていったことも感じ取

ることができた。ぺんぎん村を立ち上げた伊藤さんのことばは心に響き、すばらしい人を取材した価値ある番組だと感じた。この番組をきっかけに、伊藤さんの後継者や仲間が増え、活動が全国に広がるとよいと思った。「障害を抱える子を持つ親が涙を流さなければいけない社会を変えたい」というメッセージは、多様性を認めることや共生社会の実現において非常に重要なことだと思うので、こうした話題をこれからもどんどん発信してほしい。ただ、最初にパラリンピックメダリストの鈴木さんが紹介されたが、それ以降、出てこなかったのは少し気になった。

- 30年かけてペンギン村の活動に取り組んできた伊藤さんが、集大成として完成させた施設について、どういった施設で、指導するうえで具体的にどのように役立つのかといった、すばらしさを十分に伝えられておらず残念だった。一方、ペんぎん村が輩出したパラリンピックメダリストという著名な人の紹介は最小限にとどめ、指導者と通っている人を主役としたことですばらしい番組になったと思う。
- オリンピック・パラリンピックのレガシーが日常に落とし込まれていると感じられる、すばらしい番組だった。登場する伊藤さん、井出さん、小林さんの3人のことばに、ナレーションを重ねたりせず、それぞれが語った声がしっかりと放送に使われていたことに、とても好感を持った。25分という放送時間を感じさせない、よい構成だったと思う。この番組を含め、最後に制作者等の名前が表示されて終わるものを最近見かけるが、これだけ多くの人が、それぞれ責任を持って番組に関わっていることが目に見えて分かり、よい表示のしかただと思う。
- 従来の「ナビゲーション」とは少し異なる構成だったが、気付かされたことや考え させられたことが多く、とてもすばらしい番組だった。ふだん障害者と接する機会の 少ない人たちに、実際に接する機会があった場合に、どう接すればよいのか、一緒の 時間をどう過ごせばよいかを伝えていたように感じた。今後、多様性がより重視され ていく中、NHKは異なる立場の人たちを結び付けていく媒体として、その役割を改 めて認識し、果たしていく必要があると強く思った。今後もこのようなすばらしい番 組を制作していってほしい。
- 伊藤さんのインタビューでの受け答えはとてもはっきりしており、生徒との日常的なコミュニケーションの姿勢が表れていると思った。三者三様な生徒たちにスポットを当てており、それぞれがメッセージとなってよく伝わってきた。全国に向けて放送すれば、同じ課題を持っている人たちの参考になるのではないかと思った。

- 伊藤さんの熱意や30年にわたる努力、自分にできることをしたいという思い、寄り添い続ける姿勢はすばらしいと思った。生徒が困難にぶつかった時に「それは扉だと思ってね 絶対開けられるから」と伊藤さんが言っていたが、とてもよいことばだと思った。障害の種類や程度、目指す目標が異なる3人の生徒たちが、自分のことばで思いを語ることで説得力が生まれていた。テロップの入れ方も適切だったと思う。障害者にとって水泳はリスクが大きいのではないかと思ったが、しっかりと安全面で配慮されており、リハビリとしての効果もあることがよく分かった。視聴者が、障害者に対して何ができるのかを考えるきっかけとなるような構成になっていたことも、とてもよかった。
- 障害者にスポットを強く当てすぎるということもなく、とてもよい取り上げ方だったと思う。水泳を通じて障害者が生きる希望を見つけていくという、ぺんぎん村の取り組みが素直に表現されていて、過剰な演出もなく、とてもよいトーンだった。ただ、山田アナウンサーの出演やナレーションは、必ずしも必要ではなかったのではないかと感じた。これまで「ナビゲーション」では、ある社会問題について中部地方での事例を織り交ぜながら考えたり、特定の地域にスポットを当てて深く紹介するなどしているが、取り上げる地域に偏りがあるように感じている。もう少しバランスをとってもよいのではないか。
- 伊藤さんが自分のことばと声で語っていて、映像とセットになって自然と気持ちに入ってきてよかった。教室に参加している人たちの目が輝いており、そこで過ごす時間をどう楽しんでいるかやコーチに対する信頼が映像からよく伝わってきて、とても共感できた。障害をテーマにすると制作側の意図が過剰に反映され、暗くなったり苦しくなったりしてしまうことが多い印象があるが、伊藤さんを中心に描いたことで明るい雰囲気になっていた。壁にぶつかっても、それは扉であって、いつか開くという考え方がとてもうまく伝わる構成だった。冒頭では女性が暗いトーンでナレーションをしていたのが、途中で山田アナウンサーにかわっていたが、使い分けの意図が分からなかった。あえて暗いナレーションを入れる必要はなく、山田アナウンサーの語りだけでよかったのではないか。伊藤さんの「ぺんぎん村にたくさんの子どもがいるようではだめで、身近なスイミングスクールが受け入れてくれるようにならなければいけない」ということばをきちんと取り上げ、この取り組みをNHKが発信したことには大きな社会的意義があると感じた。「ナビゲーション」では、番組の最後にスタジオのアナウンサーがまとめのコメントをして終わることが多いが、今回は伊藤さん自身のことばで終わることで、メッセージがよく伝わり、好印象だった。

○ どのスイミング教室も障害者を受け入れてくれない中、伊藤さんが浜松で自ら立ち上げたぺんぎん村水泳教室は、パラリンピックの原点とも言えると感じた。一人一人に寄り添いながら適切な指導方法を探っていて、教室には努力と笑顔があることが伝わってきた。障害者にとって、水の中には自由があるというのは名言だと思う。障害者向けのグループホームが増加し、作業所に通う人も多いが、ただ集まったり働いたりするだけでなく、こうした取り組みを通じて、スポーツをしたり生活の場を広げたりしてほしいと感じた。ドキュメンタリーとして伊藤さんの活動を十分に紹介していたが、日本に同様の教室があるのかや海外ではどうなのかなど、さらに興味がわいた。また、教室に通う人の数や料金などについても知りたかった。

# (NHK側)

「見栄えが悪い」という発言は、インタビュアーではなく小林さんの母親の発言だったが、それがうまく伝わっていなかったかもしれない。また、ナレーションの読み手を変えたのは、情報を伝える部分とドキュメントの部分を分ける意図があった。これからも、どうすればよりわかりやすくなるのか、構成や伝え方を工夫しながら番組を制作していきたい。

○ ジャグジーがあった施設はどういったものなのか。

#### (NHK側)

伊藤さんの作ったスポーツジムで、障害者専用ではなく、誰でも利用でき、オーダーメイドのレッスンも受けられる施設。 限られた放送時間の中、何をどう伝えるかを取捨選択した結果 ではあるが、施設に関する説明が不足していたかもしれない。

## <放送番組一般について>

○ 1月28日(金)のド真ん中ジャーナル!「北京オリンピック直前!東海フィギュア選手を大特集」(総合後7:33~8:16)を見た。東海にゆかりのある、北京オリンピック出場予定の4人のフィギュアスケート選手について、なかなか知ることのできない一面などを紹介しており、楽しく見た。ただ、選手によって紹介する時間に差があり、短く感じる選手もいてもっと紹介してほしいと思った。最後に取り上げた納豆の話題もおもしろかったが、次回

に取っておいて、選手の紹介に時間を割いてもよかったのではないか。スケート靴のブレードには愛知県の技術が生かされていて、鋼の塊から細く削り出していることも知ることができ、よかった。

- ド真ん中ジャーナル!「北京オリンピック直前!東海フィギュア選手を大特集」を 見た。宇野昌磨選手は試合前に必ず顔そりをしていて、この数年、自身がどう見られ ているかという美意識が演技構成にも反映され、大きく変化してきたことを紹介して いた。また、大好物の肉を週4回食べるのがメンタル維持のためのルーティンである ことや、技術向上のためには少しでも長く氷の上にいて氷を知ることが大切であるこ となど、さまざまなことを知ることができた。木原龍一選手は最近までリンクでアル バイトをしていて、トップ選手であっても苦労していることを知り、改めて敬意を表 したいと思った。東海地方から強い選手が生まれる理由として、たくさんのリンクが あって練習しやすい環境にあることのほか、優秀なコーチや子どもをフォローする親 の存在を挙げており、ほかの地域との違いを分かりやすく伝えていたと思う。そのほ か、おいしい納豆の食べ方を紹介していて、試してみようと思った。
- 1月28日(金)の越中とやまスペシャル「おもてなし北陸 in 富山県高岡市〜 五感で楽しむ 金属の町〜」(総合 後 7:33~7:58)を見た。高岡銅器を長い歴史のある伝統工芸としてではなく、エクステリアや時計の文字盤といった新しい使い方にスポットを当てて紹介しており、古くさいイメージを変える、非常によい番組となっていた。冒頭、金屋町の歴史的な街並みから始めることで、銅器が持つ歴史の流れがスムーズに感じられてよかった。五感で感じることをテーマに、音や色などの観点から工芸を捉えていて斬新だった。寺などで使われるおりんの音は、たたいてから時間がたつとともに3種類に変化していくことを実際に鳴らして紹介していたが、音を聞くだけでは分かりにくかった。音の波形を表示するなど、目で見て分かるように伝えてほしかった。五感がテーマであれば、味覚は外せないと思うが、錫の酒器は味をまるやかにするといった紹介にとどまり、五感というよりは、伝統工芸の新しい姿へとテーマが変わってしまったのはもったいなく感じた。
- 2月3日(木)のクローズアップ現代+「"二刀流"いばらの道の先に~スノーボード 平野歩夢~」を見た。平野選手が、恐怖や重圧、怒りといったネガティブな感情をうまく利用し、エネルギーに変換して成果を出していることを紹介していた。ポジティブで明るく前向きがよいと言われがちな世の中で、ネガティブな感情を上手に使うという描かれ方は、よかったと思う。平野選手はインタビューに対して、いつも自分の心と真摯(しんし)に向き合ってことばを選びながら答えているが、この番組では丁寧に編集されていたので、より引き込まれた。一方、2月12日(土)の「おは

よう日本」に金メダリストとして出演した際には、平野選手が話そうとしているのに インタビュアーの声が重なってしまう場面があり、もったいなかった。視聴者は選手 の話を聞きたいはずなのに、時間や番組の進行を優先しているように感じ、気になっ た。長期間にわたる取材の積み重ねを、このような番組として放送することで、オリン ピック前から選手の魅力がより伝わってきたのでよかった。

- 2月13日(日)のイッピン・選「デジタルな日常に木の優しさを〜福井 木工製品 〜」(総合 前 4:30〜4:59)を見た。企業秘密に近いと思える技術的な要素を詳しく紹介していて驚いた。伝統的な技術を生かし、現代ならではのデジタル製品を木で作っていた。ち密な手作業という伝統技術そのままに作るスマートフォン用スピーカーと、それとは逆にパソコンなどの機器を駆使して作るUSBメモリーを紹介していた。この2つのコントラストによって、伝統的なものづくりと伝統的な技術をデジタル技術に落とし込んで、さらなるち密さを追求することの両方が見られておもしろかった。ただ、伝統的な技術そのものの紹介は少なく、予備知識のない視聴者にとっては分かりづらい部分があったと思う。番組を見ていて、初回の放送ではないのではないかと疑問を感じて調べたら、昨年11月にBSプレミアムで放送されていた。しかし、総合テレビでの放送は再放送となっておらず、番組ホームページにも初回放送日は2月13日と書かれていたため、かなりややこしく感じた。番組をコンテンツとして捉え、放送やインターネットなどさまざまな形で提供していくのであれば、制作した時期や放送日が分かるような形に、うまく整理した方がよいと思う。
- 「ナビゲーション」の構成には、テンプレートのようなものがあると思っているが、 導入部分で見る人が共通の課題認識を作れるようにすることが重要だと最近は感じて いる。問題提起や関連映像の紹介にはしっかり取り組んでいると思うが、導入部分で 課題認識を共通で持てるようにはまだなっていないと思うので、そこを改善すること でよりよい番組になるのではないか。
- NHK金沢放送局と金沢工業大学が共同で開催した就活イベントにおいて、「未来 スイッチ」と「SDGsミニドラマ」を学生たちに視聴してもらった。学生からは、 「NHKの番組のクオリティーは高いと再認識した」、「メッセージ性を考えて見ると おもしろいと思った」などの声が聞かれた。イベントに参加した学生たちは、ふだん NHKを見ていない人がほとんどだったが、こういった機会を設けることで、NHK のすごさや番組のよさが伝わることがよく分かった。若者とNHKとの良好な関係を 構築していくためには、彼らが興味を持っている分野とNHKの強みをいかに掛け合 わせていくのかを模索していく必要があると思った。

- 2月12日(土)のETV特集「ぼくは しんだ じぶんで しんだ 谷川俊太郎と 死の絵本」を見た。詩人の谷川俊太郎さんとイラストレーターの合田里美さんがやり とりを重ねる中で、子どもの自死をテーマにした絵本ができあがっていく過程を紹介していた。制作期間のすべてを取材してはいないようだが、何枚もの絵が描かれては 消えていく過程をアニメーションとして見せることで、制作に費やされた時間の流れを感じられた。番組の最後で「今は意味偏重の時代だが、意味より大事なものは、何 かが存在すること」と谷川さんが言っていたが、とても印象的なことばだった。絵本では、なぜ死んでしまったのかは分からないままにして意味を与えずに終わらせており、よい作り方だと思った。
- 12月31日(金)の「ローマの休日」(BSプレミアム後0:01~2:00)を見た。映像がとてもきれいで感動した。「刑事コロンボ」や「ウルトラセブン」をデジタルリマスター版で見たが、こういった番組が品質を維持したまま次世代に継承されていくのはよいことだと思う。ただ、懐かしい番組を見たいという視聴者の欲求はさまざまで、どうニーズをつかんで絞り込むかは難しい問題だと思った。よい原作や脚本は文化の移り変わりに合わせて次世代に引き継がれ、リメイクされ続けていくと思う。時代とともに、新しい考え方や価値観が生み出されていくが、そういったものも取り込みながら、変わらないものと変化する様子をしっかり伝えていくこともNHKの役割として重要だと感じた。
- 1月23日(日)のよみがえる新日本紀行「新都心万華鏡〜西新宿〜」(BSプレミアム前 6:07〜6:45)を見た。42年前に制作された「新日本紀行」に新たに撮影した現在の様子を組み合わせており、時の流れをうまく感じさせる構成だった。懐かしいテーマ曲やナレーションの語り口なども相まって、当時の記憶に思いを巡らせながら見ることができた。

前回の審議会で出た「番組なので意図は当然ある」ということばについて考えた。 番組で取り上げる事柄の背景や何を伝えたいのか、知ってもらいたいのかを整理する 必要はあるので、それを意図と解釈することもできる。ただ、「意図」ということばに は、恣意的といったネガティブなイメージがあり、「テーマ」や「骨格」と言いかえる こともできたのではないか。事柄の背景や起きていることを正確に伝え、視聴者がそ れぞれの価値観に基づいて結論を出せるようにすることが番組制作の基本だと思う。

# 番組審議会事務局

## 2022年1月NHK中部地方放送番組審議会

1月のNHK中部地方放送番組審議会は、20日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、12月26日(日)に放送したBS1スペシャル「河瀨直美が見つめた東京五輪」の内容について報告があった。

続いて、ショートストーリーズ「#31 図書館から生まれるモノガタリ」について 説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

# (主な発言)

<ショートストーリーズ「#31 図書館から生まれるモノガタリ」

(総合 12月25日(土)放送) について>

○ ほのぼのとしており心が温かくなる番組だった。月 2,000 円で本棚のオーナーとして好きな本を置くことができ、寄贈された本などと同じように借りられるという図書館が舞台だった。誰にでも、よい本と出会ったらほかの人に勧めたくなることがあると思うが、本好きな人が自分の好きな本を並べられるという発想がおもしろいと感じた。本棚のオーナーになっているイラストレーターや人見知りの中学生、運営スタッフの大学生など、図書館に関わるさまざまな人物を一つ一つの小さな物語として淡々と紹介していて、うまくまとめていると感じた。番組の終わりに「みかん」という図書館の名前の由来は、未完成の「未完」であることを紹介していたが、よいタイミン

グだったと思う。ただ、図書館として利用されている建物がもともと何の施設だったのかが気になった。収益的にどうなのか、ビジネスとして成り立っているのか、この事業を始めた経営者の気持ちも聞きたかった。日本各地にある活気を失った商店街や空き倉庫などでも、こうした取り組みができればおもしろいと思うので、少しだけでも収益面について触れるとよかったのではないか。

- 起承転結を明確にして、視聴者に何らかの主張を投げかけるというよりは、視聴者がそれぞれの場面で十人十色に思いを巡らせることができる、短編ドキュメンタリーのアラカルトのような番組で、見ていて心地よかった。また、BGMやナレーション、登場人物の語りは、視聴者が思いを巡らせるのを邪魔しないような仕立てになっていて好感が持てた。図書館に集まる人たち同様、自分も気に入ったレコードを仲間と共有したいという気持ちで持ち寄った経験に思いを巡らせながら、リラックスした気分で視聴できた。ただ、コロナ禍で店内での読書を中止している書店がある中、この図書館ではどのように感染対策をしているのかが気になった。
- それぞれのストーリーに派手さはなかったが、この図書館が、訪れる人どうしが好 きなことを通じて心を通い合わせるすてきな場所になっていることが伝わってきた。 ナレーションや音楽は自然で温かく、しみじみとした雰囲気で内容と合っていた。図 書館ではあまり人と話すことがないという70代の女性が、本棚のオーナーの大学生 と話すことで表情が明るくなっていて、他人と関わることにちゅうちょする人であっ ても、好きなことを通じて心を開いていく様子がとてもよかった。価値観が多様化す る時代、コロナ禍でストレスを抱えやすくなった時代に、好きなことを通じて人とつ ながることはとても大切だと思った。大学生が夏目漱石の「夢十夜」について熱く語っ ているのを見て、自分も思わず読んだが、文章の美しさに驚いた。自分の抱いてきた 夏目漱石のイメージが大きく変わったので、同じ情報でも誰がどのように伝えるかが 重要だと感じた。また、本棚のオーナーの中学生がスタッフ体験に挑戦している様子 もすばらしかった。好きなことを通じて話のきっかけをつかもうとする姿は、学校生 活で空気を読むことを強要され、コミュニケーションに悩み、息苦しさを感じている 子どもたちの希望になると感じた。図書館は水曜日から日曜日に開館と紹介していた が、番組の最後で取り上げた運営スタッフの女性は「来られるのは仕事が休みの月曜 日だけ」と言っており、どういうことかと疑問に感じた。この図書館を誰がどのよう な思いで設立し、収益面を含めた運営はどうなっているのかも紹介されるのではない かと期待していたが、紹介されず残念だった。とてもよい取り組みだからこそ、その 部分も知りたかった。
- 本棚のオーナーや図書館の利用者の思いや心が、本を介してつながっていることを

感じられるとてもよい番組だった。また、音楽や映像のトーンも心地よかった。「ショートストーリーズ」は特定の人物や職業に焦点を合わせたドキュメンタリーが多いと思うが、今回は図書館という場所にフォーカスしていた。運営者の思いなどが取り上げられていないことにもの足りなさも感じたが、利用者それぞれのストーリーを描いていておもしろかった。こういった私設図書館が全国的に増えていると思うが、山代温泉にもあることを初めて知った。また、フランス人や中学生などさまざまな人が本棚のオーナーとして図書館に関わっている様子からは、この町の豊かさのようなものも感じた。25分しかない番組だったが、インタビューの積み重ねを通じて、さまざまな人の思いを感じることができた。

- 出版物の売り上げ減少が続き"本離れ"と言われる中、本を通じて非常に興味深い出会いの場がつくられていると思った。人間関係を築くのが難しくなっているコロナ禍において、30センチ四方の本棚を舞台に交流が生まれていて、斬新でよい発想だと思った。図書館に集まる人たちそれぞれのショートストーリーが積み重ねられていて、とてもよい構成だった。手軽な利用料で本を読みたい人や、出会いを求めている人、スタッフになり接客を通じて自分のコミュニケーション能力を上げるための場として使う人など、さまざまな人を受け入れる包容力のある、とてもよい場所だと思った。このような取り組みは、本だけでなく、他の分野にも発展しながら、全国的に広がるのではないかと思った。ただ、この図書館は誰が考えてどう実現させたのかや、ボランティアで運営されているのかなど運営費や収益性はどうなのかも紹介してほしかった。
- 山代温泉にこれほどユニークな図書館があることを知ることができてよかった。「みかん」という図書館の名前の由来が未完成の「未完」だと聞き、そのネーミングセンスに感銘を受けた。本棚のオーナーは近所に住む人が中心ということだったが、中学生や年配の方、フランス人などを紹介しており、多様な人たちが集っていることが伝わってきた。付箋を通じたやり取りによって、本棚のオーナーと本を借りる人がお互いの考え方を知ったり、考え方の幅が広がっていることも分かった。音楽やナレーションに加え、随所で聞こえてくる加賀地方のことばのニュアンスが、番組をより心温まるものにしていた。「ショートストーリーズ」の着眼点に敬意を表したい。
- 本棚のオーナーやその利用者など、さまざまな視点からの物語となっており、すぐに引き込まれた。本棚において自分の仕事や趣味を表現することで、利用者とのコミュニケーションが生まれていて、コロナ禍で人と人とのつながりが失われる中、図書館が本を通じてつながる温かい空間となっていると感じた。繁華街でも空き家が出てきている中、このように人が集まる場所が必要であり、今後もっと増えていけばよいと

思ったので、運営がどうなっているのか気になった。その部分だけに焦点を合わせる必要はないが、運営しているのは自治体なのか企業なのか、誰がどんな思いで始めて、地域の人たちにどう受け入れられていったのかなどについても伝えてほしかった。中学生がコミュニケーションへの苦手意識を克服するために運営スタッフとなったり、主婦が珍しい絵はがきの展示会を開催したりしていたが、いつもとは違う環境で新たな人と出会える場は貴重だと思う。デジタル化により人と人とが容易につながれるようになったが、あまり実感をともなわず、自分と似た意見の人ばかりを求めてしまう傾向や、格差や分断もある中、実際に人とつながることができる場所は、共感や思いやりを育む大切な存在になっていくのではないかと思った。

- 同じように地域の人たちが参画して運営している図書館を知っているが、経営状態は聞いたことがなかったので、どういった思いでどう運営しているのかといった情報が少しでもあるとよかった。図書館が行政主体ではなく、地域の小さなコミュニティーの中で運営され、人と人との交流が生まれていく様子は興味深かった。「ショートストーリーズ」のタイトルにふさわしく、一つ一つの出会いから生まれる物語が描かれており、特に、メッセージを書いた付箋を本棚に貼ることで交流が始まる場面がよかった。大学生が運営スタッフをしていたが、コロナ禍だからこそ、キャンパスという場にとらわれず、町なかに入り込んで実践的に学んでいるのは、とてもよいことだと思った。
- 温かい気持ちになれるとてもよい番組だった。番組で取り上げた山代温泉の図書館は、周辺の地域でも活性化の参考事例として評判がよい施設で、その魅力を多くの人に伝えることができておりよかった。本棚のオーナーが希望すれば運営スタッフとなることができ、多くの人が実際に参加していることを知ることができてよかった。また、学校ではなかなか友達ができないという中学生が、公共的な色合いの強い空間に人とのつながりを求めていくストーリーもとてもおもしろく感じた。通常の接客では、人とのつながりを作ろうという挑戦は難しかったかもしれないが、本を通じてつながるからこそ、ハードルが下がったのだろうと思い、新しい流れができていると感じた。とてもよい内容の番組だったからこそ、運営者の思いなど、さらに詳しい情報を知りたいという人が多いのではないか。放送だけで完結させるのではなく、興味を持った人向けに、ウェブサイトなどで特徴的な取り組みなど、追加の情報を紹介する必要もあったのではないか。
- ほのぼのとして心温まる内容で、いくつかの短いストーリーがちりばめられ、全体 として優しい気持ちになるといった印象で、制作者のねらいどおりの番組になってい たと思う。最初、あえて集中せずに見てみたところ、あまり情報が頭に入ってこなかっ

たので、どうしてか気になった。改めて見てみると、開館日や時間といった情報が、 ナレーションなしのテロップだけで紹介されており、それが一因ではないかと思った。 運営主体や費用負担の仕組みなどが、とても気になったので、どこかで触れたほうが よかったのではないか。図書館が単に本を借りるだけでなく、地域の人どうしがつな がる場となるというコンセプトや意義はとてもすばらしいと思った。「誰とも話さず 借りていくだけ」と言っていた利用者に対し、運営スタッフが本棚のオーナーとの対 話を促していたが、これは本当に必要だったのかと疑問に感じた。

○ ストーリーの"中見出し"を4つ置くことで、起承転結のように「個性あふれる本棚」「世代をこえた出会い」などを、番組全体のテーマに沿って分かりやすく伝えていた。さまざまな年代や職業の本棚オーナーや来館者、スタッフの間で、本への興味や感想を通じて、出会いが生まれるおもしろさがよく表現されていたと思う。付箋にメッセージを書いて本棚に貼っていたが、本を汚すことなくオーナーに感想を伝えられ、とてもよい方法だと思った。今後も、本棚に並ぶ本の内容が変化しながら、新しい人間関係が作られていくことを期待したい。図書館の創設者は紹介されなかったが、設立の考え方は十分伝わった。短い時間ではストーリーの語り手を絞ることはやむをえないと思うが、「ショートストーリーズ」では、短い時間の中で複数の語りを組み立てる工夫がなされていると思った。

## (NHK側)

温かい気持ちになってもらいたいと思いながら制作したので、それが伝わっていてよかった。質問のあった図書館のシステムについて、運営は地域の活性化を目的とする団体が行っており、将来的には、運営母体をNPOに移して地域で維持、管理していくことを目指している。ただ、運営に苦労している実情もあり、そういった情報もある程度伝えたほうがよかったと感じている。

## <放送番組一般について>

○ 11月20日(土)のNHKスペシャル「この素晴(すば)らしき世界 分断と闘ったジャズの聖地」(総合後9:00~9:49)を見た。出演していたトランペット奏者を「グラミー賞トランペッターでマイルス・デイヴィスの後継者」、「音の魔術師」などと紹介していた。参加した映画サントラでグラミー賞最優秀映画音楽賞を受賞した人ではあるが、評価することばが過度に並んでいるように感じた。音楽と社会的主張の結び

付きを表現しようとしたのか、展開ができすぎていると感じる場面もあり、結論とストーリーありきの取って付けた感が拭えなかった。ジャズクラブやミュージシャンの復活を、もっとシンプルに伝えたほうがよかったと思う。コロナと差別や分断の相互関係も取り上げていたが、個別の事象を伝えるにとどまり、納得感が薄かった。社会的状況やニューヨークのトレンドなど、全体観がしっかりしてないからではないかと感じた。

○ 12月30日(木)の「映像全記録 TOKYO2020 私たちの夏」(総合 後7:30~8:43,後9:00~9:59)を見た。東京オリンピック・パラリンピックの開催について賛成と反対の両面から伝える番組で、とても考えさせられ、ある意味でのNHKらしさを感じた。500時間を超える映像の記録から132分の番組にするのは、なかなかできることではないと思う。番組タイトルはとてもフラットで、社会的な内容を含んでいるものの、賛否両論が出ることを想定したうえで、視聴者に考えてほしいという制作者の意図が感じられた。コロナ禍や東日本大震災からの復興など、さまざまな問題を引きずりながら開催されたと思ってはいたものの、改めてその裏側をありありと見せられ、非常に考えさせられた。また、何かを社会に問いかける際のメディアの姿勢についても考えさせられた。いわゆるジャーナリズム的な姿勢で強く訴えかけると、拒絶反応が起こりかねない時代において、この番組のようにフラットに視聴者と制作者の言いたいことが中間に置かれた番組作りは、NHKらしいものだと思った。

## (NHK側)

制作する側が、いろいろな価値観を付け加えて、一つのメッセージとして出すのではなく、記録したありのままの事実を伝え、見た人自身に考えてもらうという姿勢も大切にしたほうがよい時代ではある。ただ、500時間を超える映像を放送の時間内に収めるには、編集が必要になる。最低限の編集、構成によりファクトを絶対に曲げないことは、これからのドキュメンタリー、NHKらしさという意味では重要だと思っている。

○ 1月3日(月)の所さん!大変ですよ 年始SP「冷凍が大変ですよ!」(総合 前7:20~8:00)を見た。以前は魚がたくさん獲れてもすぐに加工しなければならなかったが、冷凍技術の発達によって鮮度を保ったまま保存できることを紹介していた。漁獲量や農産物の収穫量の変動に左右されることなく、仕事を平準化でき、社会のあり方すらも変えられる技術になっていくのではないかと思った。また、冷蔵では時間的な制約から空輸しなければならなかった食品も、冷凍技術の発達によって海上輸送できるようになり、日本の冷凍技術が世界を変えていくのではないかと思える、今後が

とても楽しみになる番組だった。

- 1月8日(土)の「NHKナゴヤニューイヤーコンサート 2022」(総合 後 4:45~5:57 中部プロック)を見た。会場で見た時には、演奏前に演奏者が曲などに関する話をするのはよいが、司会のアナウンサーの個人的な体験談などはあまり必要ないと思った。しかし、番組ではアナウンサーの話も自然な形で入ってきたので、会場で見るのと番組として見るのとでは違うのだと感じた。番組のゆっくりしたテンポは、落ち着いていてよい部分もあるが、ふだんはなじみのない昔ながらの歌番組のようだったので、工夫があるとよいのではないかと思った。演台の装花や背景の装飾はとても美しく、正月らしい雰囲気が出ていた。
- 「NHKナゴヤニューイヤーコンサート 2022」を見た。会場で見た印象と放送での 印象が大きく違っていた。会場では、通常のクラシックコンサートと異なり司会者や 演奏者がよく話していたのに驚き、やはり番組として収録することを前提に進行して いるのだと感じた。放送では、うまくまとめられていて感心した。また、当日観覧者 に配布されたアンケートでは、NHKに対してふだん何を思っているのかや参加して 印象に変化があったかなどが聞かれていて、視聴者にどのように受け止められている かを気にかけていることがよく分かった。
- 1月11日(火)の「バタフライエフェクト あの日があるから今がある」(総合 後7:57~8:42)を見た。MCの佐藤健さんと神木隆之介さんが、クイズを交えながら上手にトークをしていてよかった。バタフライエフェクトというキーワードでストーリーが展開され、しっかりとした構成力もあり、エンターテインメント番組としてはおもしろかった。それぞれの登場人物に、DNAのような生物学的なつながりはなくとも、バタフライエフェクトとしてバトンがつながり、世界が作られていくというストーリー展開は壮大だった。ただ、それぞれのストーリー間の関連づけが、やや飛躍しすぎているように感じた。
- 1月14日(金)のナビゲーション「病院ラジオが聞こえる」を見た。薬剤師や看護師といった医療スタッフが制作する院内向けのラジオは、患者にとって日頃見かける人たちが自分自身について語っており、興味を引く内容だと思った。また、個人的な話題も交えた会話からは、ふだん見せない顔がかいま見え患者の安らぎにもなると思った。コロナ禍で面会が難しく、誰も来ない日が続けばさみしい思いをしてしまう。そんな患者の救いにもなるので、病院ラジオはとても意義深いものだと思った。ただ、放送の頻度や1回あたりの放送時間などには触れられていなかったので紹介してほしかった。「ナビゲーション」ではさまざまな話題を紹介しているが、今回のような肩ひ

じ張らずに見られる内容もよいと思った。

- ナビゲーション「病院ラジオが聞こえる」を見た。入院生活を少しでも気持ちよく 過ごせるよう、看護師や薬剤師、事務員などの病院スタッフが放送していた。どれく らいの頻度でいつ放送しているのかには触れられておらず、2年続けているとのこと だったが、今後、いつまで放送を続けるのかも知りたかった。患者の意見を生かし、 病院から見える景色や院内の絵画などを紹介していたが、2年も続けていれば、新し く取り上げる内容を考えるのも容易ではないと思う。また、ラジオ放送は医療とは異 なる業種で高度な技術も要すると思うので、どのような苦労があるのかなども聞ける とよかった。愛知県でこのような心ある取り組みが行われていることを知ることがで きる貴重な番組だった。
- 1月19日(水)のNHK地域局発 ナビゲーション「校則は"変えられる"時代へ」 を見た。自身も校則改革の経験があるモデルの井手上漠さんとNPO法人カタリバ代 表の今村久美さんが、校則の問題を熱心に分かりやすく語っていた。子どもたちが自 ら校則を変えるという経験は、ルールとは何かという本質的な問題を考えるよいきっ かけになると思った。校則の問題を単に子どもの問題として扱うだけではなく、実は 大人の社会にも通じる部分があるといった視点も加えれば、視聴者がより自分に関わ りのあるものとして考えられたのではないか。
- 12月25日(土)のショパンに挑みし者たち「2021 ショパン国際ピアノコンクール」(BSプレジス後7:30~8:59)を見た。NHKとしての新しさが感じられる、とてもよい番組だった。以前、NHKでは主人公がショパンコンクールに挑戦するアニメ番組を放送していたが、その制作に関わったピアニストの反田恭平さんが、実際にショパン国際ピアノコンクールに挑んでいるところもとても興味深かった。また、反田さんと幼なじみの小林愛実さんとのやりとりも紹介されていてとてもおもしろかった。同じくピアニストの角野隼斗さんは、動画配信サービスでも活躍しているが、どのような思いでコンクールに挑戦しているのかを知ることもでき、とても新鮮だった。NHKが若い人たちの活躍を応援していることがよく伝わってくるとともに、「新しいNHKらしさ」という視点でオンラインでの動画配信サービスとNHKとの関係を考えるよいきっかけになったと思う。
- 「中部ネイチャーシリーズ」は中部地方ならではの番組で、地域の自然をこれほど 取り扱ったものは、他の地域ではあまりないと聞いている。このような番組は、大切 にして今後も続けてほしい。

- 「第72回NHK紅白歌合戦」には、YOASOBIや角野隼斗さんなどの動画配信サービスで有名になった人たちが出演していたが、その分野以外の今まで接点がなかった人たちとの接点を増やし、彼らの活躍のフィールドを広げることに貢献していると思う。真偽が入り混じるものの常に新たな刺激を生み出しているインターネットの世界と、営利的な目的を持たずに真偽を見極めながらさまざまな人や取り組みに信頼性や広がりを付加できるNHKは、とてもよい組み合わせだと思う。営利を目的とする放送局ではないNHKだからこそ、インターネットの世界とテレビを見る世代をうまくつなぎ合わせるよい接点として機能するのだと思う。ただ、事実を正確に伝えるというジャーナリズムの追求があってこそ効果が発揮されるので、NHKの責任もより大きくなってきているのではないか。
- 最近、大雪や津波が発生したが、冷静に報道していたと思う。被害が広域におよぶ大きな災害では、全体像を正確に知らせることが重要だが、甚大な被害が起きている地域の状況を伝えることに比重が置かれ、局所的な情報が多くなり、全体像が正しく伝わっていないのではないかと気になっている。もし、南海トラフ巨大地震が起きた場合、被害が広範囲におよび、周辺地域からの援助が期待できない可能性がある。そうなった場合、復興には時間を要し、地域ごとの助け合いが大切になると思うので、全体観を持った報道の重要性がより高まるのではないかと思う。

#### (NHK側)

災害報道にもさまざまなパターンがあり一概には言えないが、全体像をしっかりと伝えつつ、地域の安全・安心につながる情報をきめ細かく伝えることも重要であり、そのバランスが問われていると思う。その時々の状況に応じた最適な判断をするのは難しいが、今後も各地域に向けた情報と全体的な情報とのバランスを取りながら災害報道に取り組んでいきたい。

## (NHK側)

1月16日(日)に津波注意報が発令された際はすぐに記者が 出局し、被害状況の把握にあたった。注意報の解除後も取材を 継続し、養殖いかだの被害などを全国に伝えた。

○ 以前、地震の被害報道を見たときに壊れた家が連なっている様子が映し出され、広 範囲に同じような被害が広がっているかのように感じてしまった。実際には、そこま での被害があったのは限られた地域のみだったので、あまり適切な伝え方ではないと 思った。

# (NHK側)

先日、首都圏であった地震では、最初は各地から中継し、被害がないことも含め全体的に伝えていたが、一部で被害が発生しており、徐々にそういった場所からの中継を増やしていった。このような場合でも、至る所で同じような被害が起きているといった誤解を与えることのないようにしたい。

- 中高生による重大事件の報道を見ていると、親や家庭環境が原因ではないかという 無意識の偏見を感じてしまうことがある。そういった事件を報道する際には、事実関係を詳しく調べたうえで慎重に伝えたほうがよいと思う。
- 新しいNHKになる必要はなく、ジャーナリズムの基本に立ち返ることが一番求められていると思う。制作する側の、視聴率を上げたい、特定の問題意識を投げかけたいといった意思が感じられてしまうと、作り物になったり事実と変わってくる恐れもある。ニュースやドキュメンタリーの制作現場で、事実を素直に伝えようという意識が徹底されることが、信頼を得るために最も必要ではないかと思う。さまざまな題材や事実を伝える際に、何か意図を持って制作するとおかしなことになりかねない。いかにそういった意識を徹底できるかが、報道に携わる人間にとって一番大切なことではないかと思う。
- 親の世代などはテレビをよく見る人も多く、何もしなくても情報が流れてきて受け身で見られるのがよいのだろうと思う。一方、私はテレビを常にはつけておらず、事前に選んだ番組のみを見ている。日中、パソコンを長時間使っているので、テレビ画面を見るのがつらく、情報量が多いものを見るのもつらいと感じる。NHKプラスは、自由なタイミングで視聴でき、見た番組以外にも関連する番組に興味がいくようになっており、使い勝手がよく助かっている。また、1月13日(木)のクローズアップ現代+「いまだから語れる"あの日"阪神・淡路大震災 語り部"新世代"」や、1月19日(水)のクローズアップ現代+「詩人・茨木のり子 "個"として美しく▽発見された肉声」では、二次元コードを使って番組のウェブサイトに誘導しており、さらに詳しい情報を見ることができると何度かコメントしていたのは好印象だった。NHKには、長い時間をかけて蓄積してきた大量の情報を、視聴者と共有する姿勢を大切にしていってほしい。また、出演していた詩人は、メッセージを時間をかけながら発信しており、答えを視聴者に委ねるという姿勢が見えた。SNSなどを含め速いテン

ポでメッセージがやり取りされる時代によい演出だと思った。

- テレビを見るにあたって、情報を得るという目的もあるが、新しい視点を得ることも意識しながら見ている。「ねほりんぱほりん」をよく見るが、事実を正確に伝えるというジャーナリズムの追求があってこそ成り立つ番組だと思う。制作する側が変に脚色してしまうと、こういった人たちはどういう視点で物事を見ているのかが分からなくなってしまうため、NHKの持つ価値をうまく発揮しているよい番組だと思っている。
- 「新しいNHKらしさの追求」を進めるにあたっても、ジャーナリズムの本質は守らなければいけない。変わってはいけない部分がある一方で、時代の流れや技術の進歩などにあわせてNHKプラスのようなサービスが始まったのは、とてもよい変化だと思う。

## (NHK側)

制作する側に意図や目的があるのは確かだが、ジャーナリズムの追求のためには、物事の一面だけでなくさまざまな意見や事実を取り上げなくてはならないと思う。今月の視聴番組に対する「情報が足りない」という意見も同様で、制作する側の意図が優先され、図書館についての正確な情報が足りなかったという指摘だと受け止めている。視聴者に温かい気持ちになってもらおうと躍起にならなくとも、心温まる事実を正確に伝えれば十分だと思う。こういった姿勢がNHKには問われていくと思うので、しっかり意識しながら番組を制作していきたい。

○ 一方からの見方だけではなく、いろいろな角度から報道することは非常に大切なことだと思う。また、番組はNHKという組織やそこで働く人のためではなく、視聴者のために制作してほしい。これはジャーナリズムに携わる人々が最も心がけなくてはいけないことだと思う。

# (NHK側)

テレビの見方はさまざまあって、番組によっては、何かほかのことをしたり考えごとをしながらでも見られるものもあると思う。一方、見るつもりはなかったが、ついつい見入ってしまう番組もあり、ドキュメンタリーなどはどんどん引き込まれて最後まで見てしまうような番組を目指して制作していきたい。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

# 2021年12月NHK中部地方放送番組審議会

12月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋拠点放送局に おいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「化石が教えてくれたこと~密着"師崎層群"発掘調査~」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

#### (主な発言)

< ナビゲーション「化石が教えてくれたこと~密着"師崎層群"発掘調査~」 (総合 11月26日(金)放送) について>

○ 師崎方面にはよく訪れていて見覚えのある景色だと思ったが、1,800 万年前の化石がよい状態で残っていて、世界的にも認知されている場所だとは知らなかった。化石といえば恐竜やアンモナイトが思い浮かぶが、サバというのには驚いた。また、ハダカイワシも発光器が良好に残っていて、価値がありそうだと思った。物事を突き詰めていく第一歩として、おもしろい、楽しいと感じることが大事だと思う。発掘する人たちは「楽しくてしょうがない」という雰囲気で、その部分が純粋に伝わってくる、よい例だと思った。かねてから、なぜ化石はきれいな平面上にあるのか疑問だったが、余分な部分をクリーニングして削り取っていることを知り、納得できた。化石の発掘は山中の崖や河原で、自然を壊さない程度に小規模にやるものかと思っていたが、一

般の人が発起人となり研究者と共同で、しかも大型重機を使うというのは、なかなかのアイデアだと思った。ただ、発掘調査の意義は十分に感じたものの、費用とのバランスは取れているのか心配になった。また、化石のある場所は、海岸や崖であっても誰かの所有地であり、発掘のルールやマナーについても言及されていると、なおよかった。化石採集に、ここまでのめり込むほどのおもしろさがあるかは分からないが、割った岩から 1,800 万年前の化石を見つけた瞬間に感動があることは分かった。現在は陸地である師崎層群に深海生物の化石がある理由や、炭の近くでサバの化石が見つかる理由をシンプルなアニメーションで説明しており、番組全体のトーンに合っていて分かりやすかった。

- 全体的にリズム感がよく、内容も詰め込み過ぎにならず、人が何かを好きになる姿を描いた、よい番組だった。歯科医師の蜂矢喜一郎さんや高校生の清一凛さんといった幅広い年代の人が取り上げられ、それぞれのキャラクターが際立っており、古生物の魅力にはまった人たちのロマンを感じることができた。なぜ彼らが、ここまで発掘に魅力を感じるのか、全く関心のない人にも伝わる番組だったと思う。専門的な話題や、古代の深海の姿を解き明かすところまでの深掘りはされていなかったが、趣味として楽しむ人たちがいることが伝わり、ゴールデンタイムの25分の番組としてはよかったと思う。ただ、登場人物が男性ばかりだったので、発掘に関わる女性の姿も、もう少し映り込むとよかったのではないか。番組の最後でテロップが流れ、ハンマーで岩を割る音で終わっていたのは、発掘の楽しさを伝えているようでよかった。
- 終始、大人たちが少年のように楽しんでいる姿が印象的で、ほほえましい番組だった。今回の発掘調査に至るまでの、発起人である蜂矢さんの思いや背景が分かりにくかった。師崎層群で見つかる深海生物の化石が、どのように出来るのかを説明するアニメーションは、とても分かりやすかった。師崎層群で発掘された化石が世界的な発見につながり、学術的に貴重であることはもう少し伝えてもよいのではないかと思ったが、画面上の2次元コードからアクセスできる名古屋大学の大路樹生教授のインタビュー記事を読むことで理解できた。ただ、この番組では、その部分にあまり強く焦点を合わせているわけではないと感じたので、この程度の伝え方でもよいかもしれないとも思った。化石そのものというより、発掘する人のほうに焦点を合わせる内容となっていたこと自体はよいと思うが、サブタイトルから想像していた内容とは差があるように感じた。番組の最後にあった「あなたにとって"なくてはならないもの"は何ですか?」というテロップは蛇足的な感じがあり、あえて入れた意味は何だったのか、少し疑問に思った。

- 必ずしもメジャーとは言えない化石をテーマに選び、情熱を持って番組にしており、とても楽しく興味深く見た。蜂矢さんの化石愛には心が和み、歯科医師としての技術が化石のクリーニング作業にも生かされており、仕事も趣味も充実させて豊かで幸せな人生を歩んでいることが伝わってきた。高校生の清さんは、化石と出会ったことで自分に自信が持てるようになり人生が変わったと熱く語っていて、好きなことにこだわり続けることで、活動的になったり、人生が好転していったりする姿はすばらしかった。岩石を割って化石が現われる瞬間は、きっとたまらないのだろうと思った。番組冒頭でキャスターが、気持ちがわくわくしている状態を「穏やかではない」と言っていたが、前向きな意味合いでは使わないと思うので、別の表現にしたほうがよかったと思う。画面上の2次元コードからアクセスできる大路教授のインタビュー記事には「自然史は大事な学問だと思うか」といった質問があり、こういう聞き方をすることで、その大事さを引き出す意図があったのかもしれないが、なぜこんな聞き方をしたのか疑問に感じた。最後に「あなたにとって"なくてはならないもの"は何ですか?」と問いかけていたが、サブタイトルや全体の流れからすると、飛躍しているように感じ、番組の趣旨は何だったのかと疑問に思った。
- 炭の近くでサバの化石が見つかる理由の解説は、特に興味深かった。画面に表示された 2 次元コードから大路教授のインタビュー全文を見ようとしたが、放送中は間に合わず、録画からアクセスして見た。番組内でコメントとして聞くよりも内容が理解できたが、一長一短あるように感じた。インタビューからは、化石研究から得られる生物学的、地質学的成果が人類にどのようなものをもたらすのか具体的には分からなかったが、非常に遠い過去を知ることで遠い未来に貢献できるという感覚が、研究者の中にあることがうかがえた。歯科医師、大学教授、高校生の化石に対する三者三様の思いが伝わる内容だった。化石発掘への情熱の注ぎ方は、その人の感じ方や生い立ちによって違ってくる一方、化石を通じ、とても長い時間の尺度、物差しを持つことで、人類の歴史を短く感じ、それがその人の生き方に大きな影響を与えていることは共通しているように感じた。変化が激しく人間関係のストレスや不安にさらされている現代人に対し「とてつもなく長い時間の流れの中で生きていて、その中で、今生きている意味を見つけることが大切」というメッセージが込められた番組だったと思う。
- 師崎層群は化石の宝庫であり、40年前の農地造成作業中に偶然発見され、1,800万年前の深海生物の化石がとてもよい状態で残っている、世界でも有数な場所であることが分かった。全国から愛好家や研究者が集まって、足場の悪い中で中腰やしゃがみ込んで発掘しており、好きでなければできない大変な作業であることが伝わってきた。「割った瞬間、1,800万年前の魚がいる」とのことばは、まさにそのとおりで、普通の生活ではできない体験だと思った。40年前に見つけたサバの化石をもう一度見

てみたいと挑んだ歯科医師の蜂矢さんは「発掘の楽しみは冒険と発見の喜び」と言い、 高校生の清さんは「化石で人生が彩られている」と言っていて、化石の発掘は知的好 奇心を持って挑む最高のロマンだと思った。知らない世界の楽しみを知ることができ た。

- 師崎層群は学術的には有名とのことだが、初めて聞く場所で、新しい知識を得ることができてよかった。研究者だけでなく愛好家も含めた発掘調査の様子は、厳粛な雰囲気の学術調査とは異なり、和気あいあいとした雰囲気が非常に印象的で、とても楽しそうだった。一般の人が化石に触れる機会はあまりないと思うが、歯科医師の蜂矢さんの視点があることで身近に感じることができた。また、蜂矢さんのキャラクターや語り口が非常に魅力的で、興味をかき立てられた。愛好家や研究者、高校生を取り上げ、さまざまな視点から化石の魅力を伝えていたが、メインテーマが地層や化石なのか、それとも人なのかが分かりづらく、散漫な印象になってしまった。番組後半では、愛好家を中心に話が進んでいるように感じたので、番組全体のテーマとしてもよかったのではないか。大規模発掘ということだが、その規模感が分からなかったので、4日間でどんな種類の化石がどれくらい出たのかまで伝えれば、より実感できたのではないか。海岸の映像から番組が始まったが、海と化石がすぐには結び付かず、導入としての引きは弱いように感じた。また、化石ということでどうしても映像的に動きが少なくなってしまい、イラストや写真などを使ってうまく表現していたものの、地味な印象を受けた。
- 師崎で 1,800 万年前の化石を発掘できることは知らなかったので、新しい知識を得ることができた。歯科医師の蜂矢さんにスポットを当ててストーリーが展開していたが、もう少し化石の学術的な価値も紹介してほしかった。取り上げられていたサバの化石にどれだけの価値があるのか、ほかの場所では発掘できないのか、福井県の恐竜博物館にあるような化石とはどんな違いがあるのかも知りたかった。化石という古いものから、これから先のことを学ぶ温故知新という観点ではよい番組だったが、まとまりがない印象で、どこに焦点を合わせていたのかがはっきりせず、気になった。番組の最後に「あなたにとって"なくてはならないもの"は何ですか?」という問いかけがあったが、個人的な趣味として大切なものなのか、それとも学術的な価値の有無なのか、基準として何を想定しているのかが分からなかったので、整理してほしかった。
- 将来の夢が古生物学者だという高校生など、発掘に協力する人たちの楽しそうな姿から、短期的な利益を求めるだけでなく、自分たちが幸せになるために必要な取り組みの一つとして化石の発掘が存在しているのだと感じた。今の時代だからこそ、そう

いったものの必要性が改めて見直されてもよいのではないかと分かり、とてもよかった。スタジオを使ったいつもの形式よりも内容が分かりやすく、ストーリーがすっきりしていてよかった。スタジオを使う場合でも、同様にストーリーをシンプルにしたほうがよくなるのではないかと思った。ただ、番組の立ち位置として、化石の科学的な知識や価値を伝えるのか、個人の人生にフォーカスするのか、それとも関連するほかの番組に誘導するきっかけとするのかが明確になっておらず、改善の余地があると思った。本を執筆する際には、目次だけを読んで概要が分かるか、筋が通っているかを確認するが、番組制作でも同じように、サブタイトルや番組の始まりと終わりを見て、筋が通っているかを確認することが必要ではないか。そうすることで番組の立ち位置が明確になり、サブタイトルと最後の「あなたにとって"なくてはならないもの"は何ですか?」というメッセージのずれも解消されると思う。そういったチェックポイントを制作チームの中で共有してもらえると、よりよい番組になるのではないか。

○ サブタイトルから、化石について科学的な見地に基づいた学びがあるのかと思っていたが、実際には発掘に関わる人にフォーカスしていたので、イメージしていた内容とは違うと感じた。サブタイトルと番組最後の「あなたにとって"なくてはならないもの"は何ですか?」というメッセージが一貫していない点も気になった。「ナビゲーション」は、いつも型どおりの構成だと感じていたが、今回は異なり、新しいタイプの番組になっていたのでよかった。また、12月7日の「まるっと!」でも知多半島の化石調査を取り上げていたが、内容がこの番組とほとんど同じだった。時間の関係か登場人物は減っていたが、問いかけられているものや映像、説明に用いられるイラストなどは同じだった。「ナビゲーション」では散漫な印象を受けたが、こちらは短くまとまっていてよかった。ただ、別々の番組で、ほぼ同じ内容を放送する意図がよく分からず気になった。

### (NHK側)

化石発掘プロジェクトの情報を得て、取材したディレクターの印象に最も残ったのは、発掘に携わる人たちがとても生き生きとしていることだと聞いた。なぜ、彼らがそこまで化石に魅了されるのかを調べたいと思い、人に焦点を合わせて制作を始めた。化石に熱中する人は何らかのロマンを感じていると思うが、それを分かりやすく伝えるために科学的な見地を取り入れようと考えて構成した。科学的な見地からも、もっと掘り下げたかったが、発掘した化石の分析はこれからという状況だった。ただ、「もっと知りたい」という声にも応えられるような取材ができればよかったかもしれない。サブタイトルは、番組制作の

出発点である「なぜここまで生き生きと発掘をするのか」から 逆算し、化石は発掘に携わる人に何を教えてくれるのだろうか と考えて決めた。最後の「あなたにとって"なくてはならない もの"は何ですか?」という問いかけには、そこまで熱中でき るものがあるのはすばらしいという思いも込めた。番組の入口 と出口が違っているように感じたという意見は、今後の番組制 作に生かしていきたい。今回、番組内の2次元コードから、大 路教授のインタビュー全文を掲載したウェブページへ誘導す る取り組みに新しく挑戦した。自然史の研究者の間では、学問 としての重要性をあまり伝えられていないという思いがあり、 質問には、それを聞き出したいというディレクターの思いが あった。バイアスがかかっているように見えてしまったのであ れば、実際の質問をそのまま記事に掲載するのではなく、もう 少し違った掲載のしかたを考えてみてもよかったかもしれな い。異なる視聴者層にも見てもらいたいと考えて、内容はほぼ 同じだが短くリメイクしたものを「まるっと!」でも放送した。 ただ、切り口を変えてみるなど工夫できる点はあったかもしれ ない。

- 浅田さんは、アスリートならではの体力や柔軟性を発揮し、感動続きの様子や歓声も新鮮な印象で、楽しく見ることができた。熟練した専門家やガイドの案内で、地質や歴史、文化、アクティビティ、生活、食という幅広い視点から名張を紹介し、自然を多角的に捉え、全体的にうまくまとまったよい番組だった。水力発電所の遺構には、今でも明治時代の人工物が残っていることに感動し、名物のこいこくはとてもおいしそうで一度食べに行きたいと思った。希少なオオサンショウウオやホタルを短時間で見つけ、撮影できていたのには驚いた。
- 自然がテーマの番組に浅田さんが出演していることに、最初は違和感があったが、クライミングやカヤックに挑戦する姿を見て、人選の意図がよく分かった。香落渓や 屏風岩の紹介はとても興味深く、行ってみたいと思った。柱状節理は日本中に存在しているが、名張ではフィルターのように水をきれいにする役割があると知り、勉強になった。また、水中の化学物質の量を測定することで、水質のよさを説明していたのも、とても興味深かった。単に自然を紹介するだけでなく、アクティビティや明治時代の遺跡も紹介しており、興味を引く構成になっていたと思う。江戸川乱歩がこい料理を楽しんだ店に行ってみたいと思った。また、江戸川乱歩と名張の関わりについてもっと知りたかった。オオサンショウウオやホタルについては、貴重な自然が残る

場所での保護活動を行う人やシステムがあることを紹介しており、今後の保護活動に期待が持て、活動を続けていってほしいと思った。町なかには名張川から引き入れられた用水路が張り巡らされていると紹介しており、"水の町"という印象を受けた。以前は生活用水として使われ、今でも花の水やりなどに利用しているとのことだが、住民がこの自然を楽しみ、享受している様子をもう少し紹介すれば、さらに理解しやすかったのではないか。

- 市街地から車で15分程度という距離に、高低差200メートルを超える峡谷があることに驚き、そびえる絶壁からなる景色はすばらしかった。この地形は1,500万年前の火山活動による堆積物からできた柱状節理で形成され、雨水がろ過されることで澄んだ川の流れとなることが分かった。浅田さんは断崖絶壁のクライミングを見事成し遂げ、さすがはアスリートだと思った。赤岩尾神社のご神体である巨大な岩肌はめったに見られない光景で、ありがたさを感じた。明治時代に作られた発電所の遺跡からは、先人たちの近代化への努力が感じられた。ホタルが立体的に舞う様子は幻想的で感動したが、ホタルを呼び寄せたり大きな声で喜んだりしており、周囲に静かに見たいと思っている人は居なかったのかと気になり、残念だった。
- 名張の市街地近くに特徴的な自然が広範囲に存在し、名水の里であることは知らな かった。場面ごとにガイド役の専門家が登場し、地形などの説明をしてくれる構成は 地域版「ブラタモリ」のように感じた。浅田さんは軽快な感じがよく、チャレンジす る気持ちもすごいと思った。クラッククライミングの場面では、天然記念物を登って もよいのか、ハーケンを打ち込むなどして傷つけてはいないのか、気になった。香落 渓の断崖はなかなかの絶景で行ってみたいと思った。また、特徴的な地形の起源となっ たカルデラ噴火を説明するCGはリアルでよくできていると思った。水質のよさを透 明度の高さで説明している場面と、含まれる化学物質の少なさで説明している場面が あって、うまく整理されていないように感じた。また、よい水であることの条件はい くつかあると思うので、電気伝導率だけをもって、よい水だと言ってよいものかと疑 問に感じ、塩素で消毒された水道水との比較も意味がないのではないかと思った。カ ヤックで明治時代に使われていた発電所の水路に行っていたが、ダム湖の水位が下が る時期にしか見られない貴重なものを見られてよかった。ただ、天井が低く岩がごつ ごつしていた場所を通っていたので、ヘルメットを着用すべきではないかと思った。 番組内でしっかりと安全対策を行い、ヘルメットなどを正しく着用することで、安全 意識の啓もうにつなげてほしい。そのほか、こいこくやオオサンショウウオ、ホタル とたくさん紹介していたが、ほかの地域でも楽しめるものもあり、もう少し整理した ほうがよいと感じた。

- 名張に行きたくなるよい内容だったが、水辺でホタルを呼び寄せたり、カヤックに乗っているときにライフジャケットを着ていないようにも見えたので、公共放送としてどうなのかと思った。冒頭にあった2分半の番組全体の紹介は期待の高まる内容だった。ただ、インターネット動画サービスに慣れている私には少し長く、見直してみると、1分半で飽きはじめ限界を感じたので、動画サービスの利用者が多くを占める時代に合わせた工夫が必要ではないかと思った。ドローンを駆使した映像やクラッククライミングの場面からは自然のダイナミックさを感じた。また、1,500万年前の噴火から、現在の暮らしの中での水の使われ方まで紹介しており、時間の流れも感じることができた。こういった番組では資料映像やデータなどを意識的に見たりするが、噴火を再現したCGや場所を示した地図、水力発電所の昔の写真などが過不足なく効果的に用いられていたと思う。名張のさまざまな魅力を限られた時間で多角的に分かりやすく伝えており、楽しい番組だった。
- コロナ禍で遠方への旅行があまりできない中、中部地方の魅力を再発見できるよい内容だった。新緑の峡谷が高精細の映像で捉えられており、雄大な自然の中でのクラッククライミングやカヤックの映像からは、岩壁の荒々しさや水の清らかさが体感でき、入り込めるような内容になっていた。ドローン撮影により急しゅんな地形をふかんして見ることができ、どのような地形になっているのか分かりやすかった。カルデラや柱状節理の成り立ちを説明するCGは、力の入ったもので、構成も分かりやすく、実際の美しい風景とのバランスがうまく取れていたと思う。人と水との関わりを、自然保護という側面だけではなく、電力利用や食など、暮らしと水という側面も含めて紹介したことで、歴史や産業といった視点が加わり、番組の幅が広がっていたと思う。さまざまな内容がうまくまとまっており、とてもよかった。用水路の澄んだ流れの映像や地元の人と水との関わりを表すエピソードが加わることで、きれいな水であることが、より印象づけられていた。一方、水中の化学物質が少ないからきれいという説明は、踏み込みが足りないように感じた。きれいな水の基準は、用途によってさまざまで、どのような視点からきれいだと言っているのか明確ではなく、残念だった。
- 映像の美しさで最後まで楽しむことができた。自然に触れる機会があまりなかったという浅田さんが、自然を楽しんでいる天真らんまんな様子は好印象で、アスリートらしくクラッククライミングやカヤックに挑戦する姿もよかった。冒頭から情報量がとても多い番組だったが、江戸川乱歩と名張の関わりを紹介する場面では、ナレーションを入れず映像と文字スーパーだけで説明するなど、緩急のある伝え方をしていてよかった。ホタルを捕まえて感動している場面では、貴重なホタルを傷つけてしまわないかと心配になったものの、オオサンショウウオやホタルをしっかりと撮影できていたのはすばらしかった。紹介された場所について、位置関係など観光客が望むよ

うな情報が少なかったが、そこに主眼を置いていないことが「中部ネイチャーシリーズ」の特徴の一つなのだと感じた。

○ とてもよい番組だったが、名張に行ったことがないというみなさんの意見を聞いて、 三重のよい所をもっと幅広く発信してほしいと思った。番組では、水に含まれる化学 物質の量を測定し、水道水と比べて川の水がきれいなことを伝えていた。以前、どう すれば水がきれいなことを分かりやすく伝えられるのか、定性的ではなく定量的に示 すことができるよい指標がないかと考えていたことがあり、映像を使ったよい方法が あれば教えてほしいと感じた。雨水が地層によりろ過されて水がきれいになっている とのことだが、ほかの川との違いが分からなかったので、名張ならではの特徴をもっ と伝えたほうがよかったのではないか。三重にはホタルを見られる場所がいくつかあ り、身近な生き物というイメージだったが、ホタルを撮影できたことに驚いたとの意 見を聞き、改めて三重は水がきれいな場所なのだと感じた。ただ、ホタルを呼び寄せ ていたことには違和感があった。浅田さんは、リアクションが素直で分かりやすく、 レスポンスもとても早かったので、番組のテンポがよくなり、退屈することなく見る ことができた。

### (NHK側)

ホタルの撮影は、一時期減少していた名張のホタルを復活させた保全活動家の吉岡正夫さんと行った。ホタルを呼び寄せる行為には、捕まえて別の場所に連れて行こうという意図はなく、吉岡さんの「ホタルと戯れたい」という気持ちから出たものだった。捕まえる際にも、傷つけないように注意を払い、最後には放しているので、問題だという認識はあまりなかった。確かに、ホタルが身近には見られなくなってきている地域もあり、貴重なものという点を強調したため違和感を与えてしまったかもしれない。クラッククライミングは許可を得ていたので問題はないが、貴重な地形として紹介していたので、それを登ってもよいのかと感じさせてしまったかもしれない。カヤック中は小型で目立たないライフジャケットを着用していたが、視聴者に伝わるように着用しないと疑問や不安を抱かせてしまうこともあるのだと思った。

- 11月5日(金)の静岡スペシャル 故郷と決めたニッポンで「シェリーさんが恋した里山で〜島田市笹間〜」を見た。アメリカから移住して民泊やカフェを営むシェリー・クラークさんが中心に描かれていた。彼女は、地区の伝統文化の神楽を習い、残していきたいという思いで、祭りで舞う予定だったが、外国人が舞うことへの反対意見があり、別の人に役が振られてしまった。シェリーさんはこの出来事に対して、自分を責めるようなコメントをしていたが、決して彼女が悪いのではなく、周囲がそのような気持ちにさせてしまったのは悲しいことだと思った。神社の前で舞うシェリーさんを野生の鹿が見ている映像は、自然と伝統文化が一体となっている笹間地区のすばらしさを象徴していると思った。この番組では、外国人が地域のコミュニティーの中で直面する出来事として伝えていたが、多くの過疎地域が抱える問題を浮き彫りにしており、高齢化や若者の流出により地域のコミュニティーが失われていくという悪循環が描かれていたように思う。また、地域のコミュニティーに外国人がいることで、世界に対する窓が開かれるという意味で、このコロナ禍に放送されたこともよかった。
- 11月25日(木)の所さん!大変ですよ「ラーメンで移住者を増やす街!?」を見 た。ご当地ラーメンがブームになって観光客が増えることはあるだろうが、移住者を 増やすとはどういうことなのかと思った。栃木県佐野市にはラーメンの"予備校"が あり、移住が入学の条件のため、卒業後、佐野市に開業することになるが、人口10 万人程度の町に約150店舗ものラーメン店があり、さらに移住者の店が加わることで、 激しい競争になってしまうのではないかと心配になった。この取り組みで、本当に移 住者が増えるのか疑問に感じた。むしろ市外に出店させたほうが佐野市の知名度が上 がり、移住者が増えるのではないかと思った。ラーメンを食べているときに電話が鳴っ て出る場面では、食べているカットから電話に出るカットに切り替わった瞬間マスク 姿になり、映像的につながっておらず違和感があった。1人の場面だったので、マス クをする必要があったのか疑問に感じた。北海道の東川町は30年以上も前から「写 真を文化にした町づくり」を掲げ、建てる家にも厳しい制限を設け、美しい景観を作 り出し、今では住人の2人に1人が移住者ということで、とても参考になる成功例だ と思った。人口減少に悩む地域では、外から新しい世代を呼び込もうとしても、昔か らの住民を大切にしすぎるあまり、うまくいっていない地域も多い中、新たな可能性 を感じさせてくれた。

- 11月26日(金)の中部ネイチャーシリーズ「白山〜祈りの道をたどる旅〜」(総合 後7:56〜8:39 中部ブロック)を見た。登山ではなく登拝と表現し、昔から信仰対象となっている白山の歴史や神秘的な風景、自然を紹介していて、これまでの中部ネイチャーシリーズとは少し違った視点だった。途中に通った郡上や石徹白は、自然との協調に取り組む地域だと思うが、そういったことにはあまり触れず、信仰を集めてきた白山という視点でのストーリーになっていたので、分かりやすかった。なぜ、昔の人は神の住む頂を目指したのか、日本中に白山信仰が広がり、各地に白山という地名が残っているのはどうしてかといった部分も、もう少し深掘りしてもよかったのではないか。この番組の直前に放送された視聴番組を見たため、短期的な利益はないが、人生を充実させたり自分に自信をもたらしたりする行為は重要であるという思考になっており、よりいっそう理解や学びが深まったと思う。今後、そういった番組編成上の仕掛けも必要ではないかと感じた。
- 12月3日(金)のナビゲーション「トラックドライバーの悲鳴がとどかない」を見た。冒頭から暗い雰囲気で始まり、関係者のインタビューでは音声を変えていたため、まるで犯罪者や犯罪被害者が語っているかのような印象を受けた。トラックドライバーの置かれた厳しい状況を、なんとかしたいという強い問題意識の表れだとは思うが、もっと中立的な描き方をした方がよいのではないか。
  - 12月6日(月)の「まるっと!みえ」を見た。「ナビゲーション」の山田大樹アナウンサーが、代理として一時的に出演していたが、とても明るい雰囲気でニュースを上手に伝えており、とてもよかった。短い間だけでも、いつもとは違う人が出演することは、なかなか新鮮で、番組の雰囲気も変わったように感じられる、とてもよいことだと思った。また、山田アナウンサーの「まるっと!みえ」への出演に絡めた、SNS投稿にも親しみが感じられ、非常に好印象だった。
- 12月6日(月)の逆転人生「逆転ゼミ〜地域再生ヒットの法則〜」を見た。これまでの100を超える放送を横断して見ることで、日本の課題解決に挑もうという新企画だった。今回は3本分の概要を短く説明し、共通するキーワードを挙げて、どうすれば地域を再生できるのか、専門家が解説していた。NHKには深く学べる非常によい番組が多いので、うまく組み合わせて分析し、解説する仕組みが必要ではないかと感じた。さまざまな番組を組み合わせて再編集した番組を提供することで、横断的な視点で見るおもしろさを知ってもらい、さらに、もともとの番組の視聴につながる流れができれば、NHKのコンテンツの魅力をより広く受け止めてもらえるのではないか。

- 12月11日(土)の「ドキュメンタリードラマ 命のバトン~赤ちゃん縁組がつなぐ絆~」(総合後4:15~5:55 中部ブロック)を見た。とてもよい番組だったが、BS1と総合テレビの中部地方向けの放送しかなく、視聴できる機会が限られていたのは、とてももったいないと感じた。ドキュメンタリーとドラマが自然な形で組み合わされており、とてもよい構成だった。高校生が見ても分かりやすく、親にとっても、どのような支え方があるのか具体的な選択肢をたくさん伝えていて、とてもよかった。また、実際に赤ちゃん縁組で里親に育てられた女性が、結婚式で自身の生い立ちを語っていた場面は感動的で、すばらしかった。児童虐待や人工妊娠中絶で多くの命が失われる中、赤ちゃん縁組はよい取り組みだと思う。番組と同じような状況になったときの参考になると思うので、中学校や高校で自由に見ることができるようにするなど、番組を広めてもらいたいと強く感じた。
- 「ドキュメンタリードラマ 命のバトン〜赤ちゃん縁組がつなぐ絆〜」を見た。児童虐待死や未成年の妊娠、赤ちゃん縁組の件数が数値として示されるとともに、主人公が、児童相談所の職員との対話を通じて自分の立場を客観的に捉え、不安と向き合っていく過程がよく伝わってきた。視聴者が、それぞれの立場でこの問題への関わりを想像できるよい番組だったと思う。主演の鈴木梨央さんや倉科カナさんの演技もよかったが、養父を演じた中村靖日さんの感情豊かな表現や、伊藤友乃さんの演技もとてもよかった。赤ちゃん縁組は、児童相談所や病院、里親など多くの人たちの「子どもの命を守りたい」という強い思いによって続いていると分かり感銘を受けた。語りを担当していた高山哲哉アナウンサーは、以前「ラジオ深夜便」で赤ちゃん縁組を取り上げるなど、子どもをテーマにしたさまざまな番組に携わることで思いを深めていったこともわかった。いろいろと感じることの多い番組だった。

12月11日(土)のストーリーズ 事件の涙「息子よ、必ず会いに行くから~中国誘拐 執念の22年~」を見た。誘拐によって引き裂かれた親子の絆を見つめるとても切ない内容だった。被害者の母親が22年間息子を探しても見つからず、ほかの誘拐された子どもを支援する姿を見て、「命のバトン」の養父母の姿と重なり感動した。

○ 「デデデデザインって何?!」は 2020 年にグッドデザイン賞を受賞するなど専門的な評価も高く、名古屋局制作の番組の中で最も高い評価をつけたいと思っている。これからもぜひ継続して制作してほしい。デザインは身近にありながら、どう作られていくのかが分かりにくいものだが、5分という短い時間で、工夫を凝らした映像やラップ、リズミカルな音楽を使ってとても分かりやすく伝えていたことに驚いた。中部地方の建築物やまちづくり、お菓子などのデザインを、その背景やプロセスも含めて取り上げており、地域の人たちにも興味深く見てもらえたのではないかと思う。映像や音声だけでも分かるように作られており、視覚や聴覚に障害がある人への配慮も

感じられる番組で、感心した。すぐれた企画構成とリサーチ、分かりやすく伝えるための映像と音声の工夫など、細部にわたって力が込められている点を大いに評価している。

- 11月28日(日)のサイエンスZERO「脱炭素のトップランナー "二酸化炭素 回収技術"大集合」を見た。脱炭素やSDG s は重要なテーマだが、世間的な認知や 理解がそれほど進んでおらず、これから啓発していく段階にあるので、どう伝えていけばよいのか、難しさがあると思う。部分的な紹介や人々の関心を集めるような話題 だけにとどまると、全体像が理解されずに誤解が生じたり、啓発していく段階では水をさすような負の側面を取り上げることを控えてしまうこともあるが、この番組では、新しい技術などが網羅的に紹介されており、よくまとめられていたと思う。また、この分野では、ふだんの生活とはかけ離れた巨大な数値や、なじみのない単位が使われることが多いが、一般の人にも分かるように整理して伝えていたと思う。ただ、「二酸化炭素の排出を減らすにはどうすればよいか」と聞かれた子どもたちが、「電気自動車にする」と答えていた場面で、発電や電動化のための部品を製造する際に出る二酸化炭素についての言及がなかったのは、いかがなものかと思った。脱炭素に関しては、今後、コスト面やエネルギーの貯蔵・輸送といったインフラ面が重要な切り口になっていくと思うので、認知を広め、議論を深めるきっかけとなる番組に期待している。
- 11月23日(火)のザ・ベストテレビ 2021 第3部 芸術祭賞「芸術の価値 舞踊家 金森穣16年の闘い」(BS1 前9:00~10:01)を見た。以前、新潟県の民放 で放送された番組で、公共の劇場が専属の劇団を持つことや、それに対する市民の理解について取り上げていた。改めてNHKが放送したことで、ふだんこのようなテーマを意識していない人たちにも気付かせるきっかけとなり、話題になったことはとて もよいことだと思う。
- 11月20日(土)の美の壺スペシャル「和菓子」(BSプレジス後6:00~7:29)を見た。風呂敷包みをぶら下げた人物が、訪問先の座敷の上座にいきなり座ったり、話題が変わるたびに同じ人物が登場したりしていたが、何を伝えたいのか分からなかった。また、和菓子を贈答用やお茶席用と決めつけているようで疑問だった。京都の老舗和菓子屋では、小豆をまきで炊いていることに驚き、食べてみたいと思った。十勝地方の小豆畑を初めて見たが、良質なものが取れるようになるまで8年もの年月が必要なことも初めて知った。また、打ち物の木型を作る様子を見たのも初めてで、貴重な映像をたくさん見ることができうれしかった。気鋭の和菓子作家として紹介されていた、杉山早陽子さんの作る現代的な菓子は、とても印象的だった。ただ、生菓子から干菓子に話題が移り、再び生菓子に戻る構成は複雑で見づらかった。内容が盛りだくさん

だったので、多くの人に和菓子の楽しさが十分に伝わったか、少し心配になった。

- 11月25日(木)のヒューマニエンス 40億年のたくらみ「"走る" そして、ヒトとなる」を見た。走ることで脳が肥大化して認知機能が上がり、サルから人間に進化していったという説を紹介しており、単に二足歩行を始めたということ以外にも進化の理由があるのかと驚いた。また、かかとが大きく発達したことで走れるようになったことや、適度なスピードで走ればストレス解消になることなど、さまざまな知識を得られた。これまで走ることに関心がなかった人にも、走ってみようかと思わせる番組だった。
- 12月2日(木)のヒューマニエンス 40億年のたくらみ「"顔" ヒトをつなぐ 心の窓」を見た。表情はおよそ30種類の表情筋から生み出されることや、40億年 という長い年月の進化をへて現在の人間の顔となったことを紹介していた。その顔において、さまざまな表情が形成され、とりわけ、うそをつく時に、微妙な表情の変化が表れることは知らなかったので、興味深かった。ただ、表情筋がどうして今のように発達したのか、科学的な説明がなく、納得がいかなかった。AIによる表情認識装置なども伝えていたが、さまざまな内容を詰め込みすぎた印象で、ストーリーが前後する構成になっていて分かりづらかった。番組全体として何を伝えたいのかも明確ではなかったので、改善を期待したい。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

# 2021年11月NHK中部地方放送番組審議会

11月のNHK中部地方放送番組審議会は、18日(木)、NHK名古屋拠点放送局に おいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、中部ネイチャーシリーズ「三重 名張~太古の火山が生んだ名水の里~」 について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師·玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

#### (主な発言)

< 中部ネイチャーシリーズ「三重 名張~太古の火山が生んだ名水の里~」 (総合 11月5日(金)放送) について>

○ 名張のことをあまり知らなかったので、とても興味深く見た。名張を取り上げたリポートや企画などを積み重ねた集大成ということを聞き、だからこそ、構成がとても分かりやすく、魅力的なのだと感じた。地形の特徴は、ことばによる説明だけでも理解はできるが、CGで表現することでより理解を深められるようになっており、とても魅力的な番組だと思った。柱状節理の説明もとても興味深かったが、六角形になる理由や、自然界で見られる六角形が最小限の部材で高い強度を持つことの説明もあれば、さらに分かりやすくなったと思う。クラッククライミングやカヤックを通じて、大地の魅力や歴史を伝え、きれいな水と人々の生活や貴重な生物の関係をとても分かりやすく描いており、よい番組だった。こういった番組の価値は、広く一般には伝わ

りにくいこともあると思うので、視聴者との接点をどう作っていくかが重要になると思う。今後、経済活動と自然資本との関係を見える化しようという流れが世界的に強まっていくと思うが、こういった人の営みと自然との関係を描いた番組との接点を増やしていくことで、スムーズに受け入れられる土台ができるのではないかと思う。公共放送として、番組が持つ価値をうまく打ち出していってほしい。

- 名張には行ったことがなかったので、とても興味深く見た。最初に、地形の特殊さや雄大さを伝え、清らかな水の理由や恩恵、そこに暮らすさまざまな生き物へと向かっていく流れがとても分かりやすく、興味を抱きやすくなっていたと思う。自然にあまり触れてこなかったという元フィギュアスケート選手の浅田舞さんが、素直に感動する姿には好感が持てた。どの専門家の話も分かりやすく、自然に対する愛や感謝にあふれていることも感じられて好印象だった。ただ、全員男性だったので、ジェンダー平等の観点から考えると、意識して女性も起用していくとよいのではないかと思った。地形の形成について、ことばによる説明だけでは分かりづらかったが、CGを使った迫力ある映像による説明も加わることで、とても分かりやすくなり、すばらしかった。番組冒頭でも流していた香落渓の断崖絶壁の映像は見ているだけで手に汗握るもので、視聴者の心をつかむことができたのではないか。自分も参加できるカヤックツアーがあるのかや、名張の名物はほかに何があるのかなど、次々と興味がわいた。同じように、視聴者も番組をきっかけにさまざまなことに関心を抱くと思うので、そういった視点も今後の番組制作に生かしてほしい。
- 名張にはあまりなじみが無く、名水の里ということも知らなかったが、地形がどう 形成されてきたかなども含め、勉強になるよい番組だった。太古のことから始まり、 現在行われているホタルやオオサンショウウオの保護活動まで取り上げ、自然を人の 手で守り、引き継いでいくというまとめ方もとてもよかった。 CGを使った説明もよく、2年前の「中部ネイチャーシリーズ」でも柱状節理が紹介されていたことを思い 出し、そのメカニズムを改めて確認できてよかった。名張の水がきれいなのは、溶結 擬灰岩によりろ過されるからだと説明していたが、一般的に山の沢の水は雨水が地層 によりろ過されたものだと思うので、なぜほかの山よりもきれいになるのかまでは分 からなかった。クラッククライミングは岩の割れ目を利用して登ると紹介していたが、ロッククライミングとの違いはほかにもあるのか、もう少し教えてほしかった。1,500 万年前の噴火により今の地形ができたという話のあとに、カヤックで遺跡を見に行くという流れだったので、かなり古いものかと期待したが、明治時代のものだったので 拍子抜けしてしまった。江戸川乱歩と名張の関わりを紹介する場面では、清らかな音楽とテロップのみで説明していてとても落ち着いた雰囲気だった。水質のよさを紹介した川とオオサンショウウオがいた川、ホタルのいた川はすべて同じ水系なのかよく

分からなかった。簡単な地図を表示すれば、分かりやすかったのではないか。

# (NHK側)

クラッククライミングはロッククライミングの一種で、割れ 目を足がかりに登るものをそう呼んでいる。今回紹介した川は、 最終的にはすべて名張川と合流しているため同じ水系ではあ るが、それぞれ別の場所で撮影したので、地図で位置関係を示 してもよかったと思う。

- 浅田さんは、アスリートならではの体力や柔軟性を発揮し、感動続きの様子や歓声も新鮮な印象で、楽しく見ることができた。熟練した専門家やガイドの案内で、地質や歴史、文化、アクティビティ、生活、食という幅広い視点から名張を紹介し、自然を多角的に捉え、全体的にうまくまとまったよい番組だった。水力発電所の遺構には、今でも明治時代の人工物が残っていることに感動し、名物のこいこくはとてもおいしそうで一度食べに行きたいと思った。希少なオオサンショウウオやホタルを短時間で見つけ、撮影できていたのには驚いた。
- 自然がテーマの番組に浅田さんが出演していることに、最初は違和感があったが、クライミングやカヤックに挑戦する姿を見て、人選の意図がよく分かった。香落渓や屏風岩の紹介はとても興味深く、行ってみたいと思った。柱状節理は日本中に存在しているが、名張ではフィルターのように水をきれいにする役割があると知り、勉強になった。また、水中の化学物質の量を測定することで、水質のよさを説明していたのも、とても興味深かった。単に自然を紹介するだけでなく、アクティビティや明治時代の遺跡も紹介しており、興味を引く構成になっていたと思う。江戸川乱歩がこい料理を楽しんだ店に行ってみたいと思った。また、江戸川乱歩と名張の関わりについてももっと知りたかった。オオサンショウウオやホタルについては、貴重な自然が残る場所での保護活動を行う人やシステムがあることを紹介しており、今後の保護活動に期待が持て、活動を続けていってほしいと思った。町なかには名張川から引き入れられた用水路が張り巡らされていると紹介しており、"水の町"という印象を受けた。以前は生活用水として使われ、今でも花の水やりなどに利用しているとのことだが、住民がこの自然を楽しみ、享受している様子をもう少し紹介すれば、さらに理解しやすかったのではないか。
- 市街地から車で15分程度という距離に、高低差200メートルを超える峡谷があることに驚き、そびえる絶壁からなる景色はすばらしかった。この地形は1,500万年前の火山活動による堆積物からできた柱状節理で形成され、雨水がろ過されることで

澄んだ川の流れとなることが分かった。浅田さんは断崖絶壁のクライミングを見事成し遂げ、さすがはアスリートだと思った。赤岩尾神社のご神体である巨大な岩肌はめったに見られない光景で、ありがたさを感じた。明治時代に作られた発電所の遺跡からは、先人たちの近代化への努力が感じられた。ホタルが立体的に舞う様子は幻想的で感動したが、ホタルを呼び寄せたり大きな声で喜んだりしており、周囲に静かに見たいと思っている人は居なかったのかと気になり、残念だった。

- 名張の市街地近くに特徴的な自然が広範囲に存在し、名水の里であることは知らな かった。場面ごとにガイド役の専門家が登場し、地形などの説明をしてくれる構成は 地域版「ブラタモリ」のように感じた。浅田さんは軽快な感じがよく、チャレンジす る気持ちもすごいと思った。クラッククライミングの場面では、天然記念物を登って もよいのか、ハーケンを打ち込むなどして傷つけてはいないのか、気になった。香落 渓の断崖はなかなかの絶景で行ってみたいと思った。また、特徴的な地形の起源となっ たカルデラ噴火を説明するCGはリアルでよくできていると思った。水質のよさを透 明度の高さで説明している場面と、含まれる化学物質の少なさで説明している場面が あって、うまく整理されていないように感じた。また、よい水であることの条件はい くつかあると思うので、電気伝導率だけをもって、よい水だと言ってよいものかと疑 問に感じ、塩素で消毒された水道水との比較も意味がないのではないかと思った。カ ヤックで明治時代に使われていた発電所の水路に行っていたが、ダム湖の水位が下が る時期にしか見られない貴重なものを見られてよかった。ただ、天井が低く岩がごつ ごつしていた場所を通っていたので、ヘルメットを着用すべきではないかと思った。 番組内でしっかりと安全対策を行い、ヘルメットなどを正しく着用することで、安全 意識の啓もうにつなげてほしい。そのほか、こいこくやオオサンショウウオ、ホタル とたくさん紹介していたが、ほかの地域でも楽しめるものもあり、もう少し整理した ほうがよいと感じた。
- 名張に行きたくなるよい内容だったが、水辺でホタルを呼び寄せたり、カヤックに乗っているときにライフジャケットを着ていないようにも見えたので、公共放送としてどうなのかと思った。冒頭にあった2分半の番組全体の紹介は期待の高まる内容だった。ただ、インターネット動画サービスに慣れている私には少し長く、見直してみると、1分半で飽きはじめ限界を感じたので、動画サービスの利用者が多くを占める時代に合わせた工夫が必要ではないかと思った。ドローンを駆使した映像やクラッククライミングの場面からは自然のダイナミックさを感じた。また、1,500万年前の噴火から、現在の暮らしの中での水の使われ方まで紹介しており、時間の流れも感じることができた。こういった番組では資料映像やデータなどを意識的に見たりするが、噴火を再現したCGや場所を示した地図、水力発電所の昔の写真などが過不足なく効

果的に用いられていたと思う。名張のさまざまな魅力を限られた時間で多角的に分かりやすく伝えており、楽しい番組だった。

- コロナ禍で遠方への旅行があまりできない中、中部地方の魅力を再発見できるよい内容だった。新緑の峡谷が高精細の映像で捉えられており、雄大な自然の中でのクラッククライミングやカヤックの映像からは、岩壁の荒々しさや水の清らかさが体感でき、入り込めるような内容になっていた。ドローン撮影により急しゅんな地形をふかんして見ることができ、どのような地形になっているのか分かりやすかった。カルデラや柱状節理の成り立ちを説明するCGは、力の入ったもので、構成も分かりやすく、実際の美しい風景とのバランスがうまく取れていたと思う。人と水との関わりを、自然保護という側面だけではなく、電力利用や食など、暮らしと水という側面も含めて紹介したことで、歴史や産業といった視点が加わり、番組の幅が広がっていたと思う。さまざまな内容がうまくまとまっており、とてもよかった。用水路の澄んだ流れの映像や地元の人と水との関わりを表すエピソードが加わることで、きれいな水であることが、より印象づけられていた。一方、水中の化学物質が少ないからきれいという説明は、踏み込みが足りないように感じた。きれいな水の基準は、用途によってさまざまで、どのような視点からきれいだと言っているのか明確ではなく、残念だった。
- 映像の美しさで最後まで楽しむことができた。自然に触れる機会があまりなかったという浅田さんが、自然を楽しんでいる天真らんまんな様子は好印象で、アスリートらしくクラッククライミングやカヤックに挑戦する姿もよかった。冒頭から情報量がとても多い番組だったが、江戸川乱歩と名張の関わりを紹介する場面では、ナレーションを入れず映像と文字スーパーだけで説明するなど、緩急のある伝え方をしていてよかった。ホタルを捕まえて感動している場面では、貴重なホタルを傷つけてしまわないかと心配になったものの、オオサンショウウオやホタルをしっかりと撮影できていたのはすばらしかった。紹介された場所について、位置関係など観光客が望むような情報が少なかったが、そこに主眼を置いていないことが「中部ネイチャーシリーズ」の特徴の一つなのだと感じた。
- とてもよい番組だったが、名張に行ったことがないというみなさんの意見を聞いて、 三重のよい所をもっと幅広く発信してほしいと思った。番組では、水に含まれる化学 物質の量を測定し、水道水と比べて川の水がきれいなことを伝えていた。以前、どう すれば水がきれいなことを分かりやすく伝えられるのか、定性的ではなく定量的に示 すことができるよい指標がないかと考えていたことがあり、映像を使ったよい方法が あれば教えてほしいと感じた。雨水が地層によりろ過されて水がきれいになっている とのことだが、ほかの川との違いが分からなかったので、名張ならではの特徴をもっ

と伝えたほうがよかったのではないか。三重にはホタルを見られる場所がいくつかあり、身近な生き物というイメージだったが、ホタルを撮影できたことに驚いたとの意見を聞き、改めて三重は水がきれいな場所なのだと感じた。ただ、ホタルを呼び寄せていたことには違和感があった。浅田さんは、リアクションが素直で分かりやすく、レスポンスもとても早かったので、番組のテンポがよくなり、退屈することなく見ることができた。

### (NHK側)

ボタルの撮影は、一時期減少していた名張のボタルを復活させた保全活動家の吉岡正夫さんと行った。ボタルを呼び寄せる行為には、捕まえて別の場所に連れて行こうという意図はなく、吉岡さんの「ボタルと戯れたい」という気持ちから出たものだった。捕まえる際にも、傷つけないように注意を払い、最後には放しているので、問題だという認識はあまりなかった。確かに、ボタルが身近には見られなくなってきている地域もあり、貴重なものという点を強調したため違和感を与えてしまったかもしれない。クラッククライミングは許可を得ていたので問題はないが、貴重な地形として紹介していたので、それを登ってもよいのかと感じさせてしまったかもしれない。カヤック中は小型で目立たないライフジャケットを着用していたが、視聴者に伝わるように着用しないと疑問や不安を抱かせてしまうこともあるのだと思った。

○ 冒頭の導入部分は約2分半だったが、インターネット動画サービスを見慣れている 人たちには長く感じられるかもしれないという意見があった。私も番組全体で43分 は長いと思った。今後もこういう長さでいくのか。

#### (NHK側)

番組全体の長さや、どのような人に向けた番組なのか、インターネットでも配信するのかといった条件に合わせて、適切なオープニングの長さを検討してきた。同じ情報量であれば短時間で見られたほうがよいのはよく分かるが、今回のように、きれいで見とれてしまうような驚きの景色など、短時間では伝えきれない魅力的なものを、時間をかけて味わえる番組を提供することは、コンテンツの多様性や豊かさを維持するうえで必要だと思う。さまざまな意見や時代のすう勢も鑑みながら、今後

も議論していきたいと思っている。

○ テレビよりもインターネット動画サービスを長時間利用するようになりつつある中、テレビのあるべき姿とは何だろうかと考えている。受動的に見ることが多いテレビと能動的に見ることが多い動画サービスとでは、見る人たちの気持ちもずいぶんと異なり、とにかく短くすればよいという単純なものではないと感じている。

### (NHK側)

番組の冒頭では、視聴者に見続けてもらえるように番組の魅力を短時間にまとめて紹介することが多いが、長いと感じられてしまえば、その意味はなくなってしまう。魅力的な映像がたくさんあれば少し長めに紹介したり、いきなり本編から始めたりする場合もあり、内容によって考えながら制作している。番組をインターネットで公開する際、1分程度に短くしたほうがよく見られることもあり、番組の長さをどうしていくべきかは本当に難しいことだと思っている。今すぐテレビ番組すべてをそこまで短くする必要はないと思うが、将来的に、番組表という概念がなくなりテレビも能動的に見るものに変わったときにどうすべきかは、考えていかなければならないと思っている。

○ テレビのつけっ放しは減ってきているように感じている。自分自身の行動を振り返ると、絶対にリアルタイムで見たい番組があれば放送時間に見ることはあるが、どちらかというと録画して見ることのほうが多い。年代によっても見方が異なり、さまざまな視聴者がいる中、公共放送として特定の視聴者に対してだけでなく全方位的に伝える責務を負っているからこそ、いろいろな挑戦をするとよいのではないかと思う。また、どうしていけば、生活の中で豊かな情報に触れる機会が増え、すばらしい映像体験ができるようになるのか、NHKと視聴者が一緒に考える場を増やしていけば、みんなに愛される番組が増えていくのではないか。

### <放送番組一般について>

○ 10月29日(金)のナビゲーション「再び大空に羽ばたけるか 試練の航空産業」 を見た。航空機メーカーからの発注は国内重工メーカーにあり、部品メーカーなどの 下請け企業へ発注され、それを支える多くの企業へとさらに発注が進むピラミッド構 造が図示され、あちこちでコロナ禍による大きな影響が出ていることを改めて感じた。

苦しい状況に耐え、他分野に進出するなど、さまざまな工夫をして頑張っている企業 を丁寧に取材しておりよかった。大学と中小企業が協力し、熟練の技術者が持つ技を 受け継いでいくために、デジタルデータとして記録、再現できるようにする試みは、 芸術の分野などでも応用できるのではないかと感じられ、おもしろかった。国内の航 空機の生産額の推移をグラフで示していたが、下限が0円ではなかったため、2020年 はその前年と比べて半減しているかのように見えた。キャスターは、3割程度の下落 であることをはっきりとコメントするべきだったのではないか。また、下請け企業の 稼働率がピーク時の3割以下になったとのことだが、ピーク時がいつなのか分からな かった。今回のテーマであればコロナ禍の直前と比較すべきだが、かなり前のピーク 時との比較であれば意味がないと思う。新型コロナウイルスの影響を、より大きく見 せようとしているのではないかと感じられて気になった。三菱スペースジェットの開 発停止が航空機産業に与えている影響は大きいと思うが、冒頭でひと言触れただけ だったので、とても違和感があった。今回は新型コロナウイルスによる影響がテーマ なのだろうが、全く触れないのは疑問で、何かそんたくが働いたのではないかと思わ ざるを得なかった。三菱スペースジェットを見越して設備投資した企業もあるだろう し、航空機産業を正確に捉えるには、押さえるべきポイントだったのではないか。

- 10月29日(金)の中部ネイチャーシリーズ「北アルプス・乗鞍岳〜絶景&山の恵みを探す旅〜」(総合後7:56〜8:39中部ブロック)を見た。旅人のシェルパ斉藤さんは、五色ヶ原の案内人の上平尚さんと布引滝を見ながら「1滴1滴にドラマがある」などと語り合ったり、現地で採取した山菜を使ったみそ汁を作って一緒に飲んだりと、とてもよいコンビネーションで楽しんでいる雰囲気が伝わってきた。また、現地調達した餌でイワナを釣り上げたり、バスを途中下車して湧き水をくみ、山頂でコーヒーをいれたりしており、自由気ままな旅を楽しんでいる雰囲気がよく伝わってきた。信州大学理学部特任教授の原山智さんは地質について解説するのかと思いきや、日本一のコマクサの生息地を案内しており、おもしろい役回りだと思った。山の楽しみ方は、頂上に登るだけではないことがよく伝わり、気持ちのよい番組だった。アウトドア好きでなければあまり興味がわかない内容だったかもしれないが、山歩きが好きな人にとっては、現地に行ってみたいと駆り立てられる、魅力的な番組だったと思う。
- 中部ネイチャーシリーズ「北アルプス・乗鞍岳」を見た。シェルパ斉藤さんが、そばや山菜、イワナといった自然の恵みにひと手間加えて、自然の中で味わう場面からは、街なかでは味わえないおいしさを伝えたいという思いが感じられた。ただ、そういった経験がない人に、そのおいしさを伝えることは大変難しいように感じた。単に食べ物のおいしさを伝える一般的なリポートで求められるものとは別物の独自のノウハウが必要だと思った。

- 11月2日(火)と4日(木)のまるっと!を見た。「KYジャーナル」というコーナーでは、山本恵子解説委員が、政治分野に占める女性の割合や児童虐待について、あえて空気を読まず、言いにくいことも含めてしっかりと解説しており、とてもよかった。言うべきことは、空気を読まずにしっかり発言していこうという勇気をもらった。
  - 11月3日(水)のNHKスペシャル ジェンダーサイエンス (1)「男X女性差の真実」(総合 後 7:30~8:17)を見た。体の性の実態に最新科学で切り込み、ジェンダーを問い直す番組だった。ドミニカ共和国のサリーナス村では、生まれたときの体の特徴は女性だったが、思春期になると男性の特徴に変化する人たちがいて、その理由を科学的に解説していた。別の取材で訪れた際に、たまたま変化前の姿を撮影していたため、変化後の姿と比較ができ、とても貴重な映像だと思った。ジェンダーの問題を考えるときに感情的になりがちなケースもあるが、科学的な視点から伝えてもらえると客観的に冷静に見ることができるので、とてもよかった。5分に編集した動画がインターネットで公開されており、短くまとめてもらえると見直すのに便利だと思った。
- 11月5日(金)の金とく「コロナ禍のワカモノ×ハタラク」を見た。昨年、社会人2年目の人たちに働く意味や悩み、夢などを聞く番組を放送したが、その番組に出演していた4人を取り上げ、1年たった今の心境を聞くドキュメンタリーだった。出演者の"その後"を追うような形になっていて、興味を持って見られた。冒頭、街頭インタビューでコロナ禍での仕事や心境の変化を取り上げ、転職が難しくなっていることをデータで示しながら現状を伝えていたが、そのあとに出てくる4人の考え方の変化とは整合性があまりないように感じた。番組名から、コロナ禍による変化が中心かと思ったが、社会人3年目を迎えたことによる変化も伝えており、今の若者の心境が如実に語られていて、とてもよかった。ある若者から、次の若者に切り替わる際、インタビューの内容にあうニーチェやジョン・レノンのことばを引用していたが、その人がインタビューの中で語ったことばから選んだほうが、より印象に残り、若者の共感が得られたのではないか。
- 11月5日(金)のいしかわ令和プレミアム Trails to Oishii Tokyo「甘えび」を見た。NHK WORLD-JAPANで外国人向けに放送したものを日本語化した番組で、東京と石川を行ったり来たりしながら、さまざまな観点で甘えびの魅力を伝えていた。地域向けの番組としては、なかなかない内容で、国際放送の番組を国内で、しかも取り上げている地域に向けて放送することはとてもよいと感じた。今後も積極的にこのようなコンテンツの共有を行なってほしい。
- 11月7日(日)のNHKスペシャル「グレート・リセット~脱炭素社会 最前線を 追う~」を見た。気候変動の問題を伝えていたが、とてもインパクトのある番組で、

解決に向けて自分自身も頑張らなくてはと思った。二酸化炭素の排出抑制に向けた各国のさまざまな対策が紹介されていたが、日本には具体策があまりないように思えた。 10年以内に手を打たないと深刻な事態になるというのなら、日本で暮らす人々は今どうすべきかといった視点からも伝えてほしかった。我々は何をやるべきか、具体的な提案も含めた続編を制作してほしい。以前「NHK認知症キャンペーン」が功を奏し、認知症は病気であるという認識が広まり、早めに受診する人が増えたと思う。キャンペーンを通じて人々の意識や行動に変化をもらすのもNHKの役割の一つだとすれば、気候変動の問題に対する動きは、少しゆっくりだったのではないかと感じている。最近、NHKでSDGsを取り上げる番組を多く見るようになったが、170要素が散文的に取り上げられているように感じる。本質は何か、危機の優先順位はどうなのかを考えると、気候変動やそれに伴う災害について、もっと発信してほしいと感じた。

- 11月14日(日)のNHKスペシャル「E Vシフトの衝撃〜岐路に立つ自動車大国・日本〜」を見た。ヨーロッパや中国の状況を、日本と対比しながら整理して伝えており非常によい番組だった。E Vシフトで生じる自動車産業での失業者増加といった問題にもしっかりと触れ、抜け落ちがないようさまざまな観点から伝えており、NHKらしい番組だと思った。一方、E Vの生産にはレアメタルが重要だが、各国の保有状況や鉱山での人権問題、家電や携帯電話に含まれるレアメタルのリサイクルなど、ボトルネックになっているトピックが抜けており疑問に感じた。その点もしっかりと伝えたほうが正しい理解につながるのではないかと思った。ただ、非常におもしろかったので、続編を作ってほしい。
- NHKスペシャル「EVシフトの衝撃」を見た。EVシフトが叫ばれ、ビジネスの枠組みが大きく変わろうとしている中、緊張感を持って日本の自動車産業の今後を伝えており、考えさせられる内容だった。単にEVは環境に優しいということを訴えるだけでなく、EVシフトに伴う自国産業の発展や雇用創出などを見越した政治的な動きもきちんと取材されており、NHKらしくてよかった。既存産業の雇用が減少し、分断や格差が生じ始めていることも伝えていて、負の側面もあることに気付かされた。日本ではEVに触れる機会があまりないのでどんなものか分からなかったが、部品や構造を実際の映像やCGで見ることにより、イメージすることができた。一般的な家庭用の自動車だけを取り上げており、トラックやバス、バイクなどすべてが変わっていくのかが分からなかった。また、積雪の多い地域など、バッテリーにとって過酷な環境への対応はどこまで進んでいるのかも気になった。日本は特有の産業構造やエネルギー政策などにより、ガラパゴス化が進んでいると思われる中、どう対応していくかが重要だと思った。EVへの完全シフトを目指す自動車メーカーだけでなく、水素

エンジン車やハイブリッド車も含め同時並行的に開発を進めるメーカーも紹介しており、今後どのような結果になるのかも非常に興味深いと思った。

- 11月17日(水)のガッテン!「筋肉増強☆魔法の言葉 今こそ"朝たん"だっ! SP」を見た。就寝中に筋肉量が低下する原因や、朝食でたんぱく質を20グラム摂取することで筋肉量の減少が抑えられることが分かった。主な食品に含まれるたんぱく質の量が一目で分かる番組特製のカードも活用しながら、自分自身も頑張りたいと思う。
- 〇  $11月18日(木)のSDGsミニドラマ「陸の豊かさも守ろう When the Forest Spirits Dance」(総合前 <math>10:45\sim10:47$ )と「ジェンダー 平等を実現しよう Close the Gender Gap」(総合前  $10:47\sim10:49$ )を見た。 2分でうまくまとまっていて分かりやすかった。ただ、誰に見てもらいたくて平日の午前中に放送しているのかが気になった。
- 11月はNHK・SDGsキャンペーンの集中月間で、さまざまな関連番組を放送していた。1つの番組だけでは意識に残りにくいが、集中的に放送することは効果的で、大きな意味があることを実感した。NHKスペシャルの「ジェンダーサイエンス」というタイトルは、とっつきにくい印象もあり、興味を持つ人とそうでない人に分かれるような気がした。ただ、生物として身体的な性差があるのは事実であり、重要な情報や正しい知識を伝える番組は大切だと思った。「おはよう日本」では、女人禁制の伝統行事や家を継ぐのは男の役目といったジェンダーバイアスについて伝えていたが、こういったことが地方から都会に人が流失してしまう理由の一つになっていると思うので、継続して伝えてほしい。NHKのSDGsへの取り組みについては、出遅れた印象があり、いつから本格的になるのかと思っていた。実際にキャンペーンが始まると、やはり映像の効果は大きく、集中的に放送されると分かりやすく、自分事として考えるよいきっかけになった。今後も続けて取り組んでいってほしい。
- 10月28日(木)、11月4日(木)のバリバラ #ふつうアップデート「俳優になれるのは心身ともに健康な人?レッスン編(1)(2)」を見た。障害があると俳優にはなれないのかという問題提起のもと、オーディションを通過した9人が演出家の鴻上尚史さんのレッスンを受けていた。その中で鴻上さんは「演技は自分の願望ではなく実感を表すもの」と言っており、健常者の俳優にとっても演技の指針として重要なことだと感じた。「車いすの役は車いすユーザーで演技ができる人を選ぶのが当たり前の時代になる」ということばを聞いて、今の社会は障害者と健常者の生きる世界が混じり合うところにまでは至っていないと思った。だからこそ、障害者が特別なもの

として描かれるのではないかと感じた。今回のように2週続けての放送であれば、1 週目の内容がよかったときに、周りの人に「次週を見てみたら?」と勧められる利点 があると思った。

- 10月31日(日)のCOOL JAPAN~発掘!かっこいいニッポン~「外国人が選ぶ日本マル秘観光地スペシャル」(BS1後6:00~6:49)を見た。旅行先を選ぶ際に、有名かどうか、行きやすいかどうかなど、何を基準に決めるのか、外国人と日本人の違いがよく分かる内容だった。ただ、あまり有名ではない遺構や景色を見つけ、そこでの文化や生活を感じたいという外国人の声を紹介していたが、その意見は外国人観光客全体を代表する平均的なものなのか疑問に感じた。結局は何が正解なのか分からず、専門家の発言もあまり印象に残らなかった。
- NHKプラスは場所や時間に縛られず手軽に視聴でき、再生速度の変更もできるので番組を見る頻度と量が増えた。最近、NHKのサービスはインターネットでも利用できるものが増え、時代の変化に追いついてきていると感じ、率直にすごいと思っている。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

# 2021年10月NHK中部地方放送番組審議会

10月のNHK中部地方放送番組審議会は、21日(木)、NHK名古屋拠点放送局に おいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「どう守る?ふるさとの景観〜富山 砺波〜」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

#### (主な発言)

<ナビゲーション「どう守る?ふるさとの景観〜富山 砺波〜」 (総合 9月17日(金) 放送) について>

○ 散居村の非常に美しい風景が丁寧に描かれるとともに、その景観を維持していくことの難しさ、行政や地域の人々が努力する姿が克明に取材されていたと思う。一方、実際に住んでいる人自身の取り組みについては、あまり伝えられておらず、踏み込みが足りないと感じた。景観の維持が難しくなっている背景には、高齢者だけの世帯が増えてきたことや、水田に囲まれ隣家と離れた"孤立状態"での暮らしが現代の生活様式と合わなくなってきたことがあると思う。社会状況が変化していく中、景観を維持していこうと、伝統的な家屋であるアズマダチでレストランを開店させるなど、新たな取り組みも行われている。そういった新しい価値を生み出そうという動きも伝えてほしかった。屋敷林は、散居村の風景を構成する重要な要素ではあるが、その一点

に焦点を絞りすぎていたのではないか。生活様式や家族形態、農業のあり方などがどう変化してきたかにも目を向ければ、屋敷林の減少という表面的な変化だけでなく、その根本にある部分も考察でき、現状を克明に伝えられたと思う。ナレーションでは「散村」と言っていたが、出演していた観光客や住民は「散居村」と言っており、同じものを意味するのか気になった。また、「富山県西部の砺波平野が加賀百万石の米どころ」と紹介していたが、かつて富山県西部が加賀藩領だったことをもう少し説明したほうがよかったと思う。

- 冒頭では、屋敷林をめぐる歴史的背景などを含め全体をふかんして見ることができ、 長い間守られてきたことがよく理解できた。ただ、野焼きが規制されるなど生活様式 が変わる中、手入れの問題は深刻だと感じた。また、先祖から受け継いだ屋敷林を維 持できず罪悪感を抱く住人もいると思う。そういった悩みや心持ちをもっと聞いてみ たかった。砺波市職員の「お金さえかければ残せるという問題でもない」という話に は、屋敷林の手入れをするボランティアなど、多くの人が力を合わせて守っていく必 要性を感じた。ボランティアや屋敷林の内側を見学したり住人の話を聞いたりする散 策ツアーは、どう持続性を保つのかが課題だと感じた。他地域の事例や京都大学の金 田章裕名誉教授の解説からは、地域の景観などを維持していく取り組みの重要性を感 じた。不便さもあるが豊かさもある田舎暮らしについて考えるきっかけとなる、とて もよい番組だった。
- 17年前と比べて屋敷林が1万本以上も減っており、その維持が問題であると伝えていた。しかし、木が減ることよりも、家を継ぐ人が減り、空き家になっていくことの方が重大な問題ではないか。水田の真ん中に家を建て、周囲に木を植えた住まいは、かつては非常に便利だったが、生活様式が変わり、子どもが継がない家も相当出てきて、これから空き家となる家が増えていくのではないかと感じた。ボランティアによる屋敷林の手入れや散策ツアーは非常によい取り組みだと思うが、7,000 軒もの散居村すべての家々を守ることは不可能ではないか。地域を絞って維持するなどの手を打たなければ、どんどん空き家が点在してしまい、管理できなくなってしまう気がした。砺波市職員が「根本的な解決策が見つからない」「お金さえかければ残せるという問題でもない」と言っていたのは、そういうことも含めての話かと思った。ボランティアなどの努力を感じることはできたが、本質的な問題には全く触れられないまま番組が終わってしまい、残念だった。
- 「散村風景」「カイニョ」ということばを初めて聞いたが、冒頭にそれらの説明や住人の話があったので、しっかりと理解したうえで番組を見ることができた。屋敷林を手入れするボランティアの人が活動を始めた経緯や、散策ツアーの取り組みは、とて

もよい話だった。一方、砺波の屋敷林がなぜ存続の危機にあるのかについて明確に示されておらず、もったいなく感じた。屋敷林の経済的価値がなくなったとのことだが、経済的に価値がないものをボランティア頼みで守っていく仕組みは長くは続かないと思う。この景観はもともと農家の営みの中で生まれた、いわば人工の風景であり、時代とともに生活様式が変化する中、住人が減ることは止めようがないと思う。景観は、地域の資産であって受け継ぐ責任があると言っていたが、住人や地域の人たちだけにまかせるのではなく、行政が保存地区に指定するなどしなくては、守っていけない時期に来ていると感じた。また、屋敷林がなくなったとき、暴風への対策がどうなるかなど自然への影響についても検証するとよかったのではないか。

- およそ 7,000 軒からなる日本最大級の散居村で、大きい家だと 600 本もの屋敷林が あり、想像もつかない規模だと感じた。かつては、屋敷林から得られる木材を家の補 修に使い、木の実を食べ、枯れ葉を燃料にするなど多くの恩恵があったが、生活様式 の変化によりその恩恵も薄れてしまった。さらに、住人の高齢化もあり、個人での維 持が難しく、手離す世帯も少なくない実状がよく分かった。行政や民間の取り組み事 例はとても前向きで、気持ちのよいものばかりだった。大きな問題となっている枯れ 葉の処理に対して、行政は丈夫なごみ袋を開発し、安価で販売していたが、財政負担 をどこまでできるのかが問題だと感じた。民間の事例では、ボランティアが高齢者の 代わりに、屋敷林の手入れをしていた。専門家は、地域全体の活動へと広がらなけれ ば、根本的な解決にはならないと説明していたが、まさにそのとおりだと思った。散 策ツアーは、参加者が自然の近くで暮らすことの豊かさに触れ、訪問先の農家が自分 たちの生活の魅力を発信することで、理解を広めることに効果的だと感じた。屋敷林 のある家に住みたい、維持していきたいと思う人が生まれる好循環につながる取り組 みだと思った。今後も、住人の穏やかな人柄がこの風景を守っていくに違いないと思 え、楽しく見られるよい番組だった。ただ、生活様式の変化による課題なども多いの で、これからもさまざまな観点から伝えていってほしい。
- 砺波市の散居村の景観や、そこでの暮らしを知ることができよかった。また、地域の景観をどう守っていくのか考えるきっかけとなる番組だった。「カイニョ」とカタカナで書かれていると、なじみがないため何のことか分からず、ことば自体に意識が向いてしまったが、丁寧な説明があったので、屋敷林が持つ価値や維持する取り組みについてもよく理解でき、応援したい気持ちになった。ただ、語源がどうしても気になったので、少しだけでも紹介してほしかった。屋敷林を維持する活動をしている人も観光客も年齢層が高いように見え、今後も持続していくのは難しいのではないかと思った。屋敷林の経済的な価値がなくなったと説明していたが、景観を維持する活動に生きがいを感じる人にとっては価値があり、観光客が増えれば経済的な価値も生まれる

と思うので、どういうことかと疑問に感じた。キャスターとゲストがワイプで表示されたとき、お互いに反対を向いていて視線があっておらずとても気になった。

○ 冒頭、白川郷や熊野古道、千枚田を映し出し、「原風景」や「貴重な景観」と言ったあとに「散村」を紹介していたので、今回のテーマがイメージしやすくうまい導入だったと思う。ただ、ナレーションでは「散村」と言っていたが出演していた住人は「散居村」と言っていた。「山村」との紛らわしさもあるので、「散居村」に統一すべきではなかったか。散居村の抱える問題をどうしていけばよいか、一緒に考えてみませんかという番組のスタンスには好感が持てた。屋敷林ができた当初は、職住近接であり、エネルギー源や食料にもなって合理的だったと思う。しかし、農業の生産性や規模が大きく変わり、人や物の移動範囲も飛躍的に拡大し、生活様式が大幅に変化する中、その合理性が薄れていると感じた。今も住んでいる人たちがどれくらい散居村や屋敷林に肯定的なのか、移住してしまった人はどういう理由から移住したのかなど、さまざまなことを知りたいと思った。

# (NHK側)

景観の価値をどう守っていくかは、とても難しい問題だと 思っている。今後もいろいろな機会を捉え、継続して取り上げ ていきたい。

- 住人の高齢化などさまざまな理由で屋敷林の維持が難しくなっていることはよく分かったが、今でも住んでいる人たちが、将来どうしていきたいと考えているのかなど生活者の視点からの情報も知りたかった。行政は現状を把握するための調査をしたり、枯れ葉用のごみ袋を通常より安く販売したりしていたが、もっとほかにやるべきことがあるのではないかと感じた。景観条例の活用や、クラウドファンディングやふるさと納税による財源の確保など、より大きな取り組みをしてもよいと思う。行政の役割について、もう少し突っ込んで伝えてもよいのではないかと思った。ボランティアによる屋敷林の手入れや散策ツアーが紹介されていたが、限界があると思う。初めの一歩ではあるが、問題全体を解決するのは難しいと思った。そのような状況の中、この先、屋敷林や散居村を地域としてどうしていくのかといった次の展開、将来的な方向性が見えるとよかった。
- 屋敷林を守る地域の取り組みや行政の工夫はすばらしく、それを知ることができた のはよかった。ただ、これから数十年先、この風景を維持していくにはどうすればよ いかについて、投げかけはあったものの、具体的な話がなくすっきりしなかった。社 会状況や生活様式の変化の中、屋敷林の経済的価値がなくなったと伝えていたが、移

住を希望する人や文化的な価値を見いだして景観を守りたいという人が出てくるといった、将来的な希望となるような部分も少しは取り上げてほしかった。番組では、屋敷林のことを、住民と同じく「カイニョ」と言っていることが多かったが、「屋敷林」と「カイニョ」が明確に使い分けられているわけでもなく、違和感があった。今回だけでなく、「ナビゲーション」は地域の課題や出来事を単に伝えるだけにとどまっている回が散見され、コンテンツとしての弱さを感じている。地域の課題に対して一歩踏み込み、地域の人たちに訴えかけるような構成にすれば、より見応えのあるものになると思う。

- 住人の高齢化やライフスタイルの変化により、「カイニョ」との共存関係が存続の 危機に立たされていることが分かりやすく表現されていた。また、山間部における獣 害と根本的な課題が共通していることも読み取れた。さらに、自治体やボランティア の地道な取り組みにより状況の改善を図っていることも見て取れ、さまざまな要素が 限られた時間の中で分かりやすくまとめられていた。今後の展開につながるヒントが もう少し充実すれば、さらによくなると思う。観光地化に成功した他県の事例では、 よい点や悪い点にも、もう少し言及してほしかった。観光客と住人の共存やボランティ アガイドの収入源の確保など、どうやって課題を解決しているのかが分からないと、 今回のケースに役立つ話にはならないのではないか。他県の事例を簡単に紹介するだ けでなく、次回の放送で詳しく取り上げるなど、数回にわたって複数の放送局が連携 して同じテーマを伝えていくといった仕組みがないと、25分という短い時間で深く 掘り下げるのは難しいと感じる。着眼点は非常によいので、そういった仕組み作りに ついても議論してほしい。
- テーマや山田アナウンサーが現地に行って地域の人に話を聞いていたのはよかった。ただ、以前から「ナビゲーション」に改善してほしいと思ってきた点が、依然として残っていた。「カイニョ」という聞き慣れないことばを、あまり説明することなく多用するなど、取り上げるテーマについて視聴者もある程度知っているだろうという前提で話が進められているように感じた。スタジオでのキャスターと専門家の会話のやり取りがスムーズでない場面もあり気になった。収録ではなく生放送にするのであれば、事前にしっかりと打ち合わせをしたほうがよいと思う。スタジオに呼ぶ専門家も、VTR出演していた富山大学の奥敬一教授のように、屋敷林の調査を行い存続の危機を肌身に感じている人のほうがよかったのではないか。屋敷林に関して、これまでの歴史、現状、維持への取り組みの3つを中心に取り上げていたが、例えば、経済的な価値が高かった時代を知る人に過去の話を、専門家や住人に現状や課題を、市職員やボランティアに具体的な取り組みを聞くといった構成にすればすっきりしたと思う。毎回、スタジオの専門家に話を聞いたり、全く背景が異なる他県の事例を紹介す

る必要はないと思う。今回、地域で取り組んでいる人が多く出演し、行政の支援や住民の自助、地域の魅力発信など多角的に伝えていたので、現地でそうした人たちに話を聞き、その中から示唆に富むことばを伝えたほうが、屋敷林をどう守っていくかというテーマにあっていたのではないか。

### (NHK側)

砺波平野の散居村は景観法の保護対象になっておらず、砺波 市が独自の条例を制定しようとした際には強い反対により頓 挫したという経緯がある。地域として現状は把握しているもの の、将来像を描けるような段階にまでは至っていない。そうい う状況ではあるが、現状を伝えるだけでなくこれからどうする ことができるかについても、もう少し踏み込めたと思う。頂い た意見を今後の番組制作に生かしていきたい。

### (NHK側)

「地域貢献」をキーワードに、番組でさまざまな課題を取り上げ、少しでも地域に還元していくことが重要だと思っている。1回の放送だけで何かを変えることは難しく、継続性が大切だと考えている。一方、「ナビゲーション」では中部地方のさまざまな課題を取り上げているので、長期間同じテーマで放送することは難しいという事情もある。そのため、各県向けの番組も含め継続的に取り上げ、新たな成果が得られたところで、再度中部地方向けの番組で伝えるなどしていきたい。地域貢献の一つとして、NHKの放送がきっかけとなり、地域の課題解決に向けた具体的な動きにつながったと感じてもらえるようにブラッシュアップしていきたい。

#### <放送番組一般について>

○ 9月19日(日)の小さな旅「この山に逢(あ)いたくて~北アルプス 朝日岳~」 を見た。山小屋を経営する清水ゆかりさんが、遭難事故で亡くなった女性の記憶を振 り返る場面や登山客を気遣う姿からは、事故を防ぎたいという思いがよく伝わってき た。長年、朝日岳に通っている72歳の男性が、山小屋への差し入れとしてみずから 育てた野菜をクーラーボックスいっぱいに入れて登ってくる様子や、若いころ山頂に 設置した方位盤のことを語る姿からは、山への強い思いが伝わってきた。一つの山に 登り続けることで、登山仲間との人間関係が広がるだけでなく、その土地と結びついた思い出が生きる力となっているように感じた。山本哲也アナウンサーのナレーションは、飾り気がなく自然な感じでよかった。

- 9月24日(金)の金とく「#だから婚活中」を見た。結婚しない若者が増える中、 結婚相談所に通う男女の話がコンパクトにまとめられており、とてもおもしろかった。 お笑い芸人のおかずクラブの二人のコメントは的確でとてもよかった。婚活する理由 は、人それぞれでおもしろかった。成婚までの期間や費用のほか、会おうと思えば1 日に複数の人とのお見合いも不可能ではないことなど、さまざま事情を紹介しており 興味深かった。また、口下手な人には声のかけ方や褒め方などをカウンセラーのよう に1対1で細かく指導しており、結婚相談所の現状がかいま見えておもしろかった。 家族で見ていて会話が弾み、肩の力を抜いて見られるとてもよい番組だったと思う。
- 9月24日(金)のいしかわ令和プレミアム「まるごと珠洲市 奥能登芸術祭&まちの魅力を深掘り!」(総合 後 7:30~8:17 石川県域)といしかわ令和プレミアム選イッピン「手になじみ 目に楽しい黒の器~石川 珠洲焼~」(総合 後 8:17~8:42 石川県域)を見た。珠洲市について、開催中の奥能登芸術祭や観光名所を紹介したほか、地元食材を使った料理をスタジオで調理して見せるなど、地域の魅力をうまく伝えていてとてもよかった。さらに、料理の器として使われていた珠洲焼を取り上げた過去の番組を、続けて放送したことにとても感銘を受けた。NHKには多くの優れたコンテンツがあるものの、気付いていない人がとても多いと思う。今回のような編成は、ある事柄に興味を持った人に、その事柄に関する以前放送した魅力的なコンテンツを知ってもらうことにつながると思う。こういった工夫はまだまだできると思うので、これからもどんどん展開してほしい。
- 10月1日(金)のナビゲーション「私は親の遺体を放置した~いま家族に何が~」 (総合 後7:33~7:58 中部ブロック)を見た。4月に同居孤独死について放送したところ、「自分にとってもひと事ではない」との反響が多くあり、タイトルに「私」という主語を入れたのだろうと感じた。知的障害のある息子が親の遺体を放置した事例を取り上げ、周囲からは家庭内の問題に入っていきづらいことが課題であると伝えていた。どうすれば手を差し伸べられるのか、改めて考えさせられる番組だった。40代の娘が父親の遺体を放置していた事例からは、家族間の複雑な関係が背景にあるように感じたが、なぜそうなってしまったのかまではよく分からなかった。その理由を伝えることは、決して当事者を非難することではないと思う。それぞれの事例をケース分けし、家族の関係性なども含めて、もっと詳しく伝えてほしかった。今回はいつもと違い、副調整室からキャスターが伝える形式で、取材から見えてきた事実を丁寧に積み

重ねていく姿勢には好感を持った。ただ、黒い機材が並ぶ背景からは、当事者に厳しい目を向けているような印象を受けた。寄り添っていくといった雰囲気だとよかったと思う。

- 10月1日(金)のイッピン「挑戦する心を受け継ぐ〜岐阜 和紙製品〜」を見た。岐阜和傘について、素材の選択や和紙を貼る技術などを紹介していた。新たな試みに挑戦し続けた祖母に憧れて職人になった女性は、さまざまな工夫をして現代にも合う和傘を作っていた。桜の花をかたどった日傘がとても鮮やかに映し出されており、映像演出が巧みだった。岐阜提灯については、イギリス人がデザインしたランプシェードを作る様子を紹介していた。彫刻家のイサム・ノグチのデザインをもとにした提灯を作った経験を持つ先輩職人の教えをよりどころに、特徴的なデザインをどう形にしていくかという技術的な工夫を伝えていた。伝統技術と師匠や先輩職人の教えが組み合わさり、現代に通用する伝統工芸品が作り出されていくところに焦点を絞ったことが功を奏し、視聴後の清涼感につながったと思う。とてもよい構成だった。
- 10月8日(金)ナビゲーション「あなたも社長になりますか?~広がる"個人M & A"~」を見た。コロナ禍や経営者の高齢化が進む中、いかに事業を承継していく かが重要になってきており、時宜を得た番組だった。引き受け相手として、企業だけ でなく個人も対象に含めて探すようになっていることは、新たな発見だった。個人に よるM&Aは新たな事業承継の可能性をもたらす一方、企業によるM&Aで期待され る資本やノウハウの共有といったシナジー効果は見込めないと思う。番組では「新た な人生を始めるチャンス」といった明るい一面のみを強調しているように感じられ、 経営には大きなリスクや苦労があることを伝えきれていなかったと思う。企業にはさ まざまなステークホルダーが存在するので、「事業承継は単なる物の売買ではない」と いうメッセージはとても大事だと思った。一方、タイトルの「あなたも社長になりま すか」は軽すぎ、そのメッセージとは食い違っているように感じた。実際の経営者の 事例では、M&Aへの思いといった感情的な部分だけが取り上げられていたが、企業 の経営状況や顧客からの評価といったビジネスの本質となる部分を伝えてほしかった。 個人でも買える金額の企業は、後から大きな問題が表面化することが多いと思う。仲 介業者は成功事例ばかりを並べると思うので、その裏にどのような失敗例があり、具 体的なリスクを取材して伝えることが、報道機関として大事な役割ではないか。
- ナビゲーション「あなたも社長になりますか?」を見た。昨年度の中小企業を対象としたM&Aは2,139件で、活発になってきていることが分かった。コロナ禍で廃業が多くなっている中、事業承継を考える人も増え、仲介が商売として成立するほどになってきたのだと思う。今後、後継者のいない企業が増え、さらに盛んになっていき

そうな印象を受けた。紹介していた事例では、成功しているように伝えていたが、ビジネスとして本当に軌道にのっているのか疑問に感じた。売上高など、データを示して成功の度合いを説明してほしかった。成功の秘けつやリスクについても触れられていたが、もっと具体的な事例を交えて伝えたほうがよかったと思う。また、福井県の事業承継センターを紹介する際、同様の機関が全国にどれくらいあるのかなども紹介してほしかった。全体として、もう少し情報が欲しいというもの足りなさを感じた。

- ナビゲーション「あなたも社長になりますか?」を見た。M&Aは企業が行うもの だと思っていたので、「個人M&A」というタイトルに衝撃を受けた。コロナ禍による 廃業急増もあってか、ウェブ上には仲介業者の広告があふれ、今後、多くの失敗例が 生まれるのではないかと危機感を抱きながら番組を見た。「あなたも社長になります か?」というタイトルや番組内容から、手軽さが強調されているように感じられ、M & Aが簡単で気楽なもののように視聴者に誤って伝わってしまうのではないかと心配 になった。ビジネスにリスクは必ずあり、それを前提に、どう番組を作り、何を伝え ていくのかが大切だと思う。失敗しないためには「事前に勉強が必要」「困ったら専門 家に相談」と言っていたが、いつ、どのような専門家に相談すればよいか、もっと具 体的に示せば、さらに役立つ番組になったと思う。複数の事例を挙げていたので、新 たに経営者となった当事者たちから、実体験に基づくアドバイスをもらったほうがよ かったのではないか。「ナビゲーション」は、スタジオに解説者が出演することが多い が、必ずしも毎回は必要ではないと思う。事例の中で取り上げた人の話が、個人的な ものにとどまらず広く参考になるものであれば多くの時間を割き、そうでない場合に は、専門家を呼んで客観的な立場から解説してもらうなど、ケースバイケースで構成 を工夫してもよいのではないか。
- 10月15日(金)のド真ん中ジャーナル!「東海の魅力再発見!オトクな情報満載」 (総合 後7:30~8:13 東海3県プロック)を見た。3つの話題すべてが前向きで楽しめた。 最初は、青色LEDでノーベル賞を受賞した名古屋大学の天野浩教授がみずからの最新研究を紹介していた。常に笑顔で偉ぶった様子がなく、自分の研究が人の役に立つのが楽しいという思いがよく伝わってきた。コンセントのない家や走行中の電気自動車への送電、バッテリーなしで飛び続けるドローンなど、環境にも優しい新たな暮らしが近い将来にも期待できるという話には勇気づけられた。次に出演した旅館おかみの市川祥子さんは、コロナ禍で大変なはずなのに、自然な笑顔だったのが印象的で応援したくなった。最後に紹介していた山田正昭さんは、50代で動画共有サイトへの投稿を始め、車の修理をするもようを撮影していた。その表情はとてもよく、好感が持てた。スタジオでの出演者の受け答えは大変よかったが、後ろで番組キャラクターのタコ父さんがしきりに動いていたのが気になり、残念だった。

- 10月15日(金)のアノコロTV 知らないとは言わせない!「2021 秋のクイズSP」(総合 後8:13~8:38 東海3県ブロック)を見た。出演者どうしの自然な名古屋弁でのやりとりが楽しかった。新幹線「のぞみ」の一番列車が名古屋駅に停車しなかったことをきっかけに「名古屋飛ばし」という言葉が全国的に使われるようになったという話から、当時の懐かしい記憶がよみがえった。
- 10月15日(金)のゲームゲノム「本田翼×星野源×小島秀夫出演!名作ゲームの魅力に迫る教養番組」(総合後10:45~11:15)を見た。40代ぐらいまでの世代では、ゲームやアニメなどのサブカルチャーから教養や知識を得た人が多くいる一方、さらに上の世代ではサブカルチャーは遊びであって勉強にはならないという意識があり、いまだにギャップが存在していると思う。こうした世代間のギャップを埋めていこうとしているようにも見える、野心的な番組だと思った。番組の放送に加え、出演者にSNSでゲーム実況もしてもらえれば、テレビをあまり見ない若者との接点も作り出せるのではないかと感じた。今後、いくつかの番組で、テレビとインターネットの連携を進めてほしいと思う。コロナ禍で求められる、新たな人間関係のあり方のヒントになる内容もあり、非常におもしろかった。取り上げていたコンテンツは魅力的で、番組に込められたメッセージも非常に深かったので、新しいNHKらしさが感じられるとてもよい番組だった。次回も楽しみにしている。
- 10月19日(火)のプロフェッショナル 仕事の流儀「自分を変えることは無限~依存症回復支援・栗原豊~」を見た。依存症回復支援をしている栗原豊さんは、自身も酒や薬物の依存症で何度も服役した経験から独自の支援策を構築し、現在は全国最大規模の支援施設代表として依存症で苦しむ人たちに寄り添っていた。栗原さんの施設では、就業支援をしっかりと行い、働く場所も提供していることがほかとの違いで、すばらしいと思った。施設を出て就職したものの再度薬物で逮捕された人に、裏切りを感じるのではなく、病状がそれほど深刻だと受け止め、再び温かく迎え入れる姿勢には心を打たれ、どんな状態からでもやり直せるというメッセージを感じた。依存症の人にとって、孤立することはマイナスの影響があるので、施設で亡くなった人に対し、みんなできちんと葬儀や墓参りをしている姿は、入所者にとって大きな支えになるだろうと感じた。依存症のほか、引きこもりや不登校、うつなどのメンタル不全といった問題は、重要な社会課題だと思う。悩んでいる人は多いと思うので、相談できる窓口などの情報をより広く伝えることは社会への貢献につながると思う。
- 「土方のスマホ」を見た。「光秀のスマホ」がおもしろかったので、この番組も楽しみにしていた。ばかばかしい内容をとても真剣に作っているところにNHKらしさを

感じた。SNSの番組アカウントでは、ほかの歴史番組に対して突っ込みを入れるなど、インターネット上でもおもしろい展開をしていると思った。手抜きのないコンテンツ作りをしており、第3弾もとても楽しみにしている。

- 10月14日(木)のNHK高校講座 芸術/美術I「アートとジェンダー」を見た。この番組はたまに見ており、いつもよい内容だと思っている。私が高校生のころと比べ、内容がずいぶんと変わった印象を受けているが、それは、学習指導要領が大きく変わったことによるものだろうと思う。今回はジェンダーやマイノリティーについて、画家のベルト・モリゾに注目し、彼女の生き方などを通じて伝えており、とてもすばらしかった。また、美術史家の小勝禮子さんの話からは、アートを通じて今まで気付かなかった社会問題に目を向けてみようというメッセージを感じた。さらに、アートは描かれた時代の思想や社会状況を色濃く反映していることも取り上げ、大人が見ても楽しめる内容だった。一方、出演者への演出に幼稚さを感じた。高校生をある程度成熟した人間としてとらえ、彼らにふさわしい演出をしたほうがよいのではないか。
- 私自身、小さいころはNHKを見ていたが、学生時代には見なくなり、子育てをするようになると子どもと一緒にEテレをよく見るようになった。しかし最近では子育て世代でも、タブレットで動画を見ることが増えていて、もったいないと感じている。NHKは、せっかく質の高い番組をたくさん作っているので、いったん離れても、いずれ戻ってくる流れを取り戻す取り組みを期待している。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

### 2021年9月NHK中部地方放送番組審議会

9月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「2021年度後半期の国内放送番組」について説明があり、「20 22年度の番組改定」についての意見交換を行った。

続いて、「ド真ん中ジャーナル!」について説明があり、放送番組一般も含めて活発 に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス株式会社相談役)

#### (主な発言)

<「2021年度後半期の国内放送番組」および「2022年度の番組改定」について>

- ジェンダーの視点から、例えば報道番組の出演者で、無意識のうちに若い女性と有識者としての年配の男性という組み合わせになっていることがあるなど、女性に対する配慮が足りないのではと感じることがある。番組審議会では地域放送局の局長を含めて女性が増えてきてうれしく感じており、番組制作の決定権を持つ人などで女性の割合を一層増やしていくことが大切だと思う。 LGBTもそうだが、一般にはまだこれからといった状況だと思うので、NHKにはぜひ率先して取り組んでもらいたい。
- 「ラジオで!カムカムエヴリバディ」は、2021年度後期の連続テレビ小説が英 語講座をテーマとしていることもあり、テレビとラジオで連動した番組を制作しよ うということだと思う。今後はこのようなマルチメディア展開が求められると思う

ので非常によい取り組みで、とても楽しみにしている。また、後期の番組時刻表に「新しいNHKらしさを追求する番組開発ゾーン」とあるように「新しいNHKらしさ」という表現を目にするようになってきたが、一般の人にはどういうことなのかあまり伝わっていないのではないかと感じている。とてもよい取り組みだと思うので、何を目指しているのか、これまで何をしてきてどのような成果があったのかなど、分かりやすく伝えていってほしい。

## (NHK側)

この半年間でおよそ50本の新しい番組の開発に取り組んでいる。「新しいNHKらしさ」をどのように体現していくかを手探りで進めているが、視聴者層に比較的偏りがあり、若い人たちに伝わっていないのではないかと再認識している。若い人たちにも届く番組、さらにその人たちの生活に役立ったり大きな希望になったりする番組を、1つの内容に偏ることなく多彩な形で開発していかなくてはならないと考えている。長寿番組も多くなっているので、活性化を図りたい。多くの人たちに納得してもらえる番組、できれば若い人たちに見てもらえる番組を念頭に置き、NHKが必要だと思ってもらえるような多彩な番組を懸命に開発している。また、開発した番組は、さまざまな形で検証もしており、来年度の改定に向けて検討している。「新しいNHKらしさ」を、今までにはないNHKらしさとして皆さんに広く受け入れてもらえるよう、模索しながら進めている。

- 非常にすばらしい取り組みだと思っている。若者は最終成果物である番組だけに関心を持っているのではなく、番組を作り上げていくプロセスやそこでの対話も求めているのではないかと思う。おそらく、仮説を立てて番組を制作・放送し、さまざまな方向から検証を繰り返すことで「新しいNHKらしさ」になり得る要素を手探りで探しているのではないかと思う。そのプロセスの一部でもよいので若者と共有しながら進めることができれば、一緒に作り上げたという感覚が強くなってNHKへの愛着が湧いてくると思う。とても頑張っている取り組みだと思うので、単に番組を放送するだけでなく、作り上げるプロセスを共に歩んでいけるような工夫も加えながら進めてほしい。
- 災害報道を見ていて、大きな被害があった場所などを局所的に映していることが多く、災害の全体像が分かりづらくなっているのではないかと感じることがあり、いか

がなものかと思っている。また、ライブで伝えることにこだわったためか、すでに雨 風が弱まり、水の流れも強くない映像のときもあるので、もっと冷静に災害の全体像 が分かるような伝え方ができないのかと思うことがある。

# (NHK側)

8月の大雨ではこまめに状況を伝えた。災害報道として、日 本全体がどのような影響を受けているのかをしっかり伝える ことは重要であり、全国放送の大きな役割だと思っている。さ らに、地域に特化した情報をどれだけ細かく伝えられるかも、 減災・防災報道として重要だと考えている。8月14日(土)に は、全国放送の「ライブ・エール2021」を休止して東海3 県向けに大雨に関するニュースを放送した。 東海 3 県全体につ いて伝えたうえで各地域の様子を伝えることを念頭に置いて いたが、全体像と各地域の状況がともに伝わるような災害報道 をさらに充実させていきたいと思う。映像がなく、コメントだ けの注意喚起では、状況が気になる地元の方が現場を見に行っ てしまうことがある。多数設置されているロボットカメラなど を活用しながら、すでに河川の水かさが増していることや、短 時間で危険な状況になることを映像を通じて伝えることもテ レビ局の役割だと思っているので、その点も意識しながら伝え ていきたい。

#### <「ド真ん中ジャーナル!」

(総合 9月10日(金) < 東海3県プロック>放送) について>

○ 選挙、きしめん、ミャンマーの3つの話題を取り上げており、1つ目の選挙の話題では「いきなりAKB48選抜総選挙か」と感じたが、私がAKB48選抜総選挙を全く関心なく見ていたように、若者は衆院選などを関心なく見ているのかもしれないと思った。そうだとすれば、選挙ポスターの作り方や写真の意図など、興味を引くものから導入し、番組に触れてもらおうという手法も効果があるかもしれないと感じた。公約の読み解き方では、文末に注目して「実現」と「支援」では主体性に違いがあると解説していた。確かにそういう見方もあり、取っかかりとしてはおもしろいと感じた。オンライン出演の学生が説明している途中でMCが質問をしたが、発言がかぶってしまってうまく伝わらず戸惑っていた。生放送らしさとも言えるが、学生がかわいそうに感じた。また、学生が質問に答えられなかったときに誰もフォローしていなかっ

たように見え、いかがなものかと感じた。2つ目のきしめんの話題では、取材の過程を見せることで参加感を出したいという意図だと思うが、麺類食堂生活衛生同業組合できしめんのスマートな食べ方を聞いた部分は必要なかったと思う。その時間を使って、きしめんの起源などを伝えたほうがよかったのではないか。3つ目のミャンマーの話題では、ミャンマー式の仏塔のあるお寺が名古屋市内にあることや、僧侶の馬島浄圭さんが約30年にわたってミャンマー支援を続けていることを知らなかったので、とても勉強になった。ミャンマーについてさまざまな報道がされているが、ひと事として捉えている人が多い中、東海地方とも関わりの深い国だと気付いてもらうという点で非常によかった。特に、馬島さんの「日本に来るミャンマー人の信頼を裏切らないよう迎え入れてほしい」ということばは、まさに視聴者に向けたものであり、胸に響いた。番組の中盤で、番組キャラクターのタコ父さんがいきなり動き出し、出演者が驚きながら「ずっと潜んでいたのか」と問いかけるやりとりがあったが、ぱっと見ただけでは意味がよく分からなかった。このキャラクターについて説明があるとよかった。

○ 番組をきっかけに行動してみようと思えるよい内容だった。選挙については、ポス ターや公約を紹介していた視点で見てみようと思い、きしめんについては箸をスライ ドさせて食べてみようと感じ、ミャンマーについては寄付などで支援したいと思った。 選挙を取り上げたのはとてもよかったが「選挙を楽しむ」と掲げて伝えていたことに、 楽しむことなのかと疑問を感じた。ポスターや公約の見方など、選挙には興味深いこ とがたくさんあるという意味で「おもしろい」と表現したほうがよかったのではない か。オンラインで出演していた学生の話はとてもよかったが、MCとの会話がスムー ズにいかなかったり、答えられないような質問をしていたことがとても気になった。 制作者はもっと配慮したほうがよかったのではないか。きしめんについて、音を立て ずに食べたいと投稿した視聴者が出演していたが、明るい人で楽しかった。紹介され ていたすだちきしめんは以前から食べてみたいと思っていたので、世間の関心を集め る旬な情報を伝えていると感じた。ミャンマーへの馬島さんの支援はすばらしいと感 じ、また、彼女のことばは心に響いてくる内容だった。ミャンマーでクーデターが起 きたときは大変驚いたが、最近ではアフガニスタンのニュースに触れる機会が増え、 そちらに関心が移ってしまうところがある。周囲の国々が関心を寄せ続けることが重 要だと思うので、よい情報を伝えていたと思う。番組全体を通して明るく楽しく伝え ようとしていたのだと思うが、冒頭から空元気ではないかと感じてしまい戸惑った。 価値ある情報の伝え方として、どうすればテーマと自然になじむのか、洗練して伝え られるのか、情報の伝え方を考えたほうがよいのではないかと思った。

- 東海地方向けの番組だったが愛知県の情報が多く、コロナ禍で県を越えた取材が難しかったのだろうと思った。テレビだけでなくラジオやツイッター、ホームページでも展開していた。特にラジオは2時間というボリュームで、テレビで紹介できなかったことも深堀りされており、メディア連動の取り組みが興味深かった。視聴者やリスナーから寄せられた意見を積極的に取り上げながら番組を進めるなど、参加感を出していこうという姿勢を強く感じた。一方で、スタジオセットやテロップにたくさんの色が使われていたり、さらに、テレビ画面の下にはメッセージや2次元コードが表示されていて、どこを見てよいのか分からなかった。集中力を欠くような状態だったので、もう少し色合いを考えるなどの工夫ができるのではないかと感じた。また、ポップなBGMを多用していたが、内容が聞き取りづらいところがあったので、ボリュームを下げるなどの配慮をしたほうがよかったのではないか。ミャンマーについて、地域の情報を単に伝えるだけではなく、ミャンマー料理の屋台がいつどこに出店されるかやミャンマーへの寄付の受付窓口など、関心を持った人たちの具体的な行動につながりやすい情報を伝えることはとても大切だと思った。これからもそうしたことを意識しながら番組の構成を考えていってほしい。。
- 3つの話題がかけ離れているように感じて疑問に思った。選挙は、ちかぢか衆院選 もあるのでタイムリーな話題だと思った。導入部分で映し出されたAKB48選抜総 選挙のポスターがあまりに魅力的で目に焼き付いてしまったため、肝心の選挙ポス ターが印象に残りづらくなってしまった。公約の見方では、「支援する」「実現する」 といった文末のことばを比較することで、立候補者の主体性の違いを読み解くことが できるという話が心に残った。投票する側の私たちよりも、立候補者本人が見ると大 いに参考になるのではないかと思った。きしめんを音を立てずに食べる方法は浅薄な 内容だと思った。それよりも、途中で言及されていたが、名古屋でもきしめんを食べ る機会が減ってきていることのほうが問題で取り上げるべきだと思った。、音を立て て麺類を食べるのは日本の風習だと思うが、箸をスライドさせたりれんげにのせたり して食べることは、外国人への遠慮なのか、若者にとっては普通になっているのか知 りたかったミャンマーを約30年間も支援し続け、東海地方に住むミャンマー人の支 えとなってきた馬島さんのにじみ出る人柄に、自分も支援をしなければと心が動いた。 ミャンマー料理にはなじみがないが、笠寺観音に定期的に出店する屋台には一度出か けてみたいと思った。番組の中で突然動きだしたタコ父さんが、どういったキャラク ターなのか分からず気になった。
- NHKが情報バラエティー番組を制作すると、こういった雰囲気になるのかと思いながら新鮮な気持ちで見た。各テーマについて、身近なことから取り上げて伝えていく構成だったが、取り上げた背景なども伝えると理解がより深まったのではないか。

ゲストの須田亜香里さんは、選挙ポスターに対する自分の考えを分かりやすく表現し、ミャンマーについてさまざまな角度から質問を投げかけるなど、きらりと光る存在だった。一方で、オンラインの出演者にはMCの声がやや遅れて伝わっていたのか、聞き取りにくそうにしていたことが気になった。技術的な問題があったのではないかと感じたので改善してほしい。MCが進行に必要なコメントを把握しきれていなかったのではないかと感じる場面があった。また、画面に表示された視聴者からの投稿メッセージには内容の薄いものが多く、それをゲストに投げかけるよりかは別の質問をしたほうがよかったのではないか。出演者の名前を表示する際、毎回的を射るアニメーションを表示しており、その動きに目がいってしまい気が散ってしまった。

- 選挙を楽しむコツを伝えており、選挙に興味を持つきっかけになる内容だった。ま た、衆院選を控えたタイミングで時期的にも非常によかった。NHKは公共放送の役 割の一つとして「健全な民主主義の発達に寄与する」ことを掲げており、その役割を 果たす絶好の機会だと思う。各地の放送局でも、明るくゆとりのある番組を通じて、 楽しみながら選挙について知ることができるよう、取り組んでいってほしい。「岐阜県 若者の選挙意識を高める会」を学生が楽しみながら選挙について考えていると紹介し ていたが、活動内容を調べると必ずしもそうではない背景もあるように感じた。真剣 に社会のあり方を考える若者が増えていることや、若者が選挙に参加しないと若者自 身が暮らしやすい社会にはなりにくい実態があることをデータ等で示しながら伝え、 その中での動きの一つとして、この活動を紹介するほうが素直に受け止められやすく、 選挙に対する問題意識も高まるのではないかと思った。きしめんのスマートな食べ方 は視聴者との対話によって番組を作り上げており、非常によい取り組みだと思った。 生放送の中で、すぐに試したくなる身近な話題を合間に取り上げることは、非常によ いと思う。馬島さんのミャンマー支援の取り組みは非常にすばらしく、この話題を中 心とした番組の作り方もよかった。一方で、番組内で「ミャンマーと東海地方の深い 関係」と表現していたが、馬島さんの取り組みをもって深いということなのか、それ ともミャンマー人居住者が首都圏に次いで多いからなのか、あるいは東海地方から進 出している企業が多いからなのか、番組として何をもって「深い」と言っているのか よく分からなかった。その点を整理したうえで伝えると、もっと楽しく見られたので はないか。選挙の話題もミャンマーの話題も、コーナーのサブタイトルと内容が合っ ていないように感じる部分が多かった。出演者が無理にサブタイトルの内容に合わせ ようとしているようにも見え、違和感を覚えた。非常によい番組だったので、今後も、 そういった部分をブラッシュアップしながら放送してほしい。
- 選挙の話題は、衆院選だけでなく三重県知事選の時期でもあったのでタイムリー だったと思う。きしめんを食べるときに汁が飛び散る様子のスロー映像からは自分も

同じようになっているのかもしれないと感じられ、現実味のあるおもしろい話題だったと思う。東海地方に暮らすミャンマー人たちと地元の人たちの交流などをよく取材しており、現地への思いが伝わってくる内容だった。番組をきっかけにミャンマーに関心を持ち、軍事政権の歴史を調べたところ根深い問題があることも知ることができた。生放送ということもあり、MCが予定にない質問を突然するなどハラハラする場面もあったが、藤井彩子アナウンサーがうまくまとめていて、緊張感とおもしろさが同居する番組だった。画面の下に視聴者からの投稿メッセージが表示されていたが、読んでいるとそこばかりに目がいってしまった。ただ、出演者がメッセージを読み上げ、その内容に答えていたのはよい演出だった。番組キャラクターのタコ父さんが突然動きだす場面があったが、ほかにも東海地方ゆかりの番組キャラクターがいるので、それらもいつか動きだすのかもしれないと今後に期待できる演出だった。

- 冒頭でMCが「みなさんの心に届いているのでしょうか」とおそらくアドリブで 言っていたが、予定調和を脱し、ライブ感を出そうという意欲を感じた。最初のテー マは選挙だったが、AKB48選抜総選挙の話で始まり、選挙ポスターの背景色や顔 の向きの意味などを解説していた。しかし、実際には選挙プランナーという仕事があ り、髪型や服装からポーズや表情に至るまで、立候補者にさまざまな助言を行い、みん なが型にはまってしまっており、おもしろみがなくなってきていると伝えたほうがよ かったのではないか。公約の読み解き方などもあまりおもしろくは感じられなかった。 MCとオンライン出演の大学生との会話は、通信状態の問題なのか声が重なってしま うなどぎくしゃくしていて、大学生が気の毒に感じられた。出演者が国会を見学した ときに、ある政治家を見たという話は不要だと思った。自民党総裁選をめぐる動きが、 各候補の周囲の思惑や裏での駆け引きも含めて詳しく報道されていることと比べると、 内容が薄く感じられた。きしめんに関するテーマでは、すするときの音の防ぎ方を紹 介していたが、個人的には音が気になったことはなく、その方法が箸をスライドさせ るというのもしっくりこなかった。汁が飛ぶのも防げると言っていたが、むしろ、そ ちらのほうがよい情報だと思った。あるお店でさまざまな種類のきしめんが提供され ていることを新しい取り組みとして紹介していたが、そういったお店は以前からある のではないかと思った。ミャンマーの話題では、植民地になったりクーデターが何度 も起きたりと激動の歴史を歩んできた国なので、そういったことも取り上げてほし かった。寄付の呼びかけもあったが、どういう活動にどのような形で届くのかについ ても、もう少し詳しく知りたかった。
- スタジオにアイドルのポスターが並んでいる様子は、うるさく感じた。30代から40代のファミリー層に向けた番組とのことだが、10代から20代の若者向けという印象で、視聴番組でなければ見なかった。民放の番組からおしゃれな感じを排除し

たかのような印象で、これが新しいNHKらしさなのかと疑問に感じた。選挙権が1 8歳以上に引き下げられたこともあり、若い人たちに選挙の重要性を正しく理解して もらうことが今後の社会にとって大切なので、選挙を楽しむという取り上げ方には違 和感があった。正しく関心を持ってもらうことに主眼をおいて、それでいておもしろ く見せる工夫を求めたい。ミャンマーについては、クーデターなど真面目で重い内容 も含んでいたものの、ミャンマーの食べ物についての視聴者からの投稿メッセージを 立て続けに表示した場面があり、軽薄な印象となってしまった。取っかかりとして身 近なことを取り上げるとしても、正確に理解するために必要な情報がきちんと伝わる ようにしてほしい。番組のコンセプト自体はよいが、今回の3つのテーマの組み合わ せはいかがなものかと感じたので、統一感を意識して選んでほしい。スタジオセット は落ち着きのない印象で、画面上の視聴者からの投稿メッセージを読んでいるとスタ ジオでの会話についていけなくなったので、もう少し画面をすっきりさせたほうがよ かったと思う。NHKにとって、若い世代にもいかにテレビを見てもらうかが大切で、 さまざまな苦労をしていると思うが、テレビを持たない若者も多く、全く見ない人は いかなるアプローチをしても見ないと思う。NHKが、あまりにも若者に迎合しすぎ る方向に進んでしまうことには疑問を感じる。公共放送として、正しく中立に真面目 でよいのではないか。新しいNHKらしさがどういう方向に進むとよいのかは分から ないが、若者ばかりに迎合するのではなく、今までのNHKらしさを維持したほうが 信頼できると思う。

○ 出演者の顔ぶれからは若者を対象とした番組という印象を受け、私たちの年代にとっては、友達口調での会話は聞き苦しく、視聴番組でなければすぐにチャンネルを変えていたと思う。内容も浅く、選挙ポスターとAKB48選抜総選挙のポスターを同じレベルで論じることには無理があると思った。音を立ててきしめんを食べる映像は見苦しかった。また、ミャンマーと東海地方のつながりについても、浅薄な印象を受けた。MCとオンライン出演者とのやり取りが一部途切れていたのも見苦しかった。こういった番組はテーマの選択と深堀りの仕方が重要だと思う。楽しく見られる番組もよいが、ジャーナルと銘打っている以上、必要な知識が十分に得られる番組が求められると思う。

## (NHK側)

番組キャラクターのタコ父さんについて、もう少し説明してもよかったかもしれない。東海地方ゆかりの動物をもとにしたキャラクターたちを、ド真ん中ファミリーと称している。お茶の間で家族で見てほしいという思いでこの番組を制作しているが、その様子を思い浮かべながら、キャラクターには家でく

つろいでいるような服を着せた。オンライン出演の大学生とスタジオ出演者とのやり取りがスムーズにいかなかった場面があった点は、今後、同じようなことがないよう十分な事前準備を心がけたい。

# <放送番組一般について>

- 7月18日(日)のNHKスペシャル「逆境 その先へ "最強"日本バドミントン」 (総合 後 9:00~9:59)を見た。7月の視聴番組と同じような映像もあるのはしかたが ないと思いながら見た。桃田選手が全日本総合選手権で優勝したときの「この1年は 本当に皆さんも苦しく思い通りにいかない生活を強いられたと思うが、このように大会を開催してくれて、サポートしてくれた皆さんに感謝したい。スポーツの力で明る いニュースを届けたい」ということばはとてもよかった。また、番組の最後を「フクヒロペアは世界の頂点を目指す以上の意味を見い出そうとしている」というナレーションで締めくくっていて、とてもよい終わり方だと思った。。
- 7月21日(水)の「お試し!未来さん」(総合 後 7:33~8:18)を見た。司会のファーストサマーウイカさんとゲストの会話のテンポがよかった。未来の生活を紹介するVTRには、温水洋一さんなどの演技上手な俳優が出演していて、楽しかった。新しいNHKらしさを届ける8つの番組の1つとして制作されたようだが、バラエティー色がありながらも事実を土台に構成されており、まさにNHKらしさが感じられ、その強みをうまく発揮していたと思う。20~30年後の未来に実現するかもしれない商品やサービスとして紹介していたが、もう少し早く実現するのではないかと思った。公的機関による技術開発の目標を参考にするなど、実現可能な時期について、裏付けをしっかり取ったうえで制作してほしい。とはいえ、とてもよい番組だったのでぜひ続編を制作してほしい。また、最近の教育現場では日本の未来について議論することが増えており、学校でも活用できるように「NHK for School」での公開なども検討してほしい。
- 8月21日(土)のNHKスペシャル「TOKYO カラフルワールド~香取慎吾のパラリンピック教室~」を見た。番組では、それぞれの違いを認め、みんなが自分の居場所を見つけて活躍できる、パラリンピックの目指す世界を「カラフルワールド」と呼んでいたが、参加国の国旗の色を次々と映し出す開会式での演出を見てイメージがつながった。パラリンピックの目標はインクルーシブな社会を作ることで、実現するのは難しいと思うが、常に目指し続ける姿勢が大切なのだと感じた。ボッチャ日本

代表の江崎駿選手と香取慎吾さんとのやりとりは楽しいものだったが、自身の障害だけでなく、新型コロナウイルスに感染し重症化した場合、命の危険もある中で競技をしていたこともよく分かった。ある障害者からの「パラリンピックだけでは障害者への理解が進むとは思えない」という意見が紹介されていたが、選手以外の障害者やさまざまな困難を抱えている人は、このパラリンピックをどう見たのかも知りたかった。多様なバックグラウンドを持つ10代の出演者たちは、みんな自分の意見をはっきり言っていて驚いた。水泳の一ノ瀬メイ選手の「障害はその人の体ではなく社会が作り出している」ということばはとても印象的で、多様性について考えさせられる番組だった。

- 〇 9月6日(月)のクローズアップ現代+「菅総理大臣"退任"の衝撃 キーパーソンが舞台裏の攻防を証言」、9月12日(日)の日曜討論「"緊急事態"延長 感染第5波は "制限緩和"は」を期待して見たが、台本ありきのような印象でふだんのような切れ味が無く、見ごたえがなかった。
- 9月6日(月)の逆転人生「下町工場が奇跡の再建!せんべい兄弟の大逆転劇」を見た。司会の山里亮太さんの進行や、ゲストのお笑い芸人たちのトークは雰囲気がよく、安心して楽しめた。祖父や父の世代のエピソードが、現在の逆転劇へとつながっていく展開がうまく、スタジオでの「醤油ダレとは」という最後の問いに、社長の笠原健徳さんが「血液」と答える場面まで、ストーリーがまとまりすぎだと感じるほど見事に流れていたと思う。こういったサクセスストーリーを描く番組では、ハッピーエンドが約束されているからこそストーリー展開がうまくいく部分があると思うが、この番組では特にうまくできていたと思う。ただ、冒頭で奇想天外と言っていたが、それほどでもない内容、ありがちともいえるエピソードではないかと思った。そういう意味では、ややインパクトに欠けた内容だったので、これから取り上げる"逆転劇"は厳選が必要かもしれないと思った。
- 9月9日(木)のクローズアップ現代+「その校則、本当に必要ですか?ルール改革の最前線に密着!」を見た。スタジオゲストの現役高校教員・弁護士の神内聡さんは、都内で教べんを執りながら弁護士活動もしている人で、テーマに合ったとてもよい人選だと思った。彼の話は論理的で説得力があり、テンポもよくて分かりやすかった。校則の緩和により学校が荒れるのではないかという不安や、単にルールだから守るべきという理由で指導している現状があり、先生側に迷いがある中での指導では、生徒も納得できないので、時代に合った見直しがとても大切だと思った。熊本市の公立小・中・高校では一斉に校則の見直しを始め、児童・生徒みずからが考えて決定し、守っていく取り組みを進めていて、まさに民主主義を学ぶことそのものだと感じた。NH

Kによるアンケート結果では、校則見直しの予定について未回答だったのは2県だけで、そのうちの一つが愛知県だった。愛知県は管理教育で有名な地域ということもあり、なかなか一歩を踏み出せないのかなと思った。ただ、番組の内容はとてもよかった。

- 9月10日(金)のおもてなし北陸「in 福井県小浜市」(総合後7:30~7:55福井県域)を見た。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会議室のような部屋で出演者が映像を見ながらコメントをしていくという形式だった。背景が部屋の壁でさみしく見えたので、もう少しどうにかできなかったのかと思った。また、福井放送局制作の番組などでも同じタレントが出演しており、少し多用しすぎではないかと感じた。小浜市のさばを紹介していたが、養殖に取り組む漁師やIターンして笹漬けを開発した人、廃校でへしこを作る人など、単に食べ物として紹介するのではなく、さばに関わる人を中心に伝えており、とてもおもしろかった。小浜と京都を結ぶ鯖街道については、知らない人もたくさんいると思うので、説明が少し足りないと感じた。鯖街道にはたくさんのルートがあり、当時の道のりがどうだったのか、図で示しながら説明してもよかったのではないか。
- 9月11日(土)のブラタモリ「松本~国宝・松本城はなぜ愛された?~」を見た。 家族みんなで楽しく見ることができた。タモリさんが、松本の古い地図を見ながら歩き、なぜ松本に城が造られたのか、なぜ武田信玄が松本城に拠点を置いたのかといったことを掘り下げており、とても興味深かった。松本城に行くときには参考にしたい。
- 9月12日(日)の愛知発フォーラム「がんと向き合うとき~"情報"と"寄り添い"を考える~」(総合 後1:05~1:48 東海3県ブロック)を見た。番組の目的が明確で、内容や出演者の人選が非常に適切に感じられ、凝った演出をしなくても良質な番組が制作できるよい例だと思った。司会を務めた福祉ジャーナリストの町永俊雄さんの進行はスムーズで、番組の流れがよく分かり、話し方も落ち着いていた。また、ナレーションや音楽などすべてがテーマに調和していてバランスのよい番組だった。最近のNHKはさまざまなことに取り組んでいて、この番組でもオンラインでの参加者にアンケートを取るなどの双方向性を取り入れており、よい印象だった。抗がん剤の副作用への悩みやがんケアサポートセンターの利用など、がん患者の実体験を映像も交えて紹介していたので、素直に納得できた。がん患者を周りがどのようにサポートしたらよいかについて、「寄り添いハラスメント」という刺激的なことばを使いながら問題提起をしていた。誰もがなり得る病であるがんについて一石を投じ、深く考えさせられる良質な番組だった。

- 7月15日(木)、22日(木)のバリバラ #ふつうアップデート「俳優になれるのは心身ともに健康な人?」を見た。このシリーズは、私たちがつい思ってしまう「普通はこうだ」というものが、誰にとっての普通なのかを問いかけるもので、とても興味深い内容だった。俳優を目指しながらも、「俳優になれるのは心身ともに健康な人」という世の中の"普通"に可能性を狭められてきた障害のある人たちが集まり、ワークショップ形式の演技審査を開催していた。「演技することは自分自身の痛みや傷と向き合ってさらけ出すこと」「見世物になるな、言いなりになるな、その場に立つ意味を自分で作る」ということばが印象的だった。参加者には、これまで機会が与えられてこなかったことへの悔しさがあったと思うが、いざ人前で演技することになった際の、己をさらけ出すことへの緊張感と真摯に向き合っていて、個々の輝きが画面からも伝わってきた。LGBTや障害のある人を取り上げる番組は増えてきているが、当事者を起用することも大事なことの一つではないか。
- 8月29日(日)のサイエンスΖΕR〇「富士山 噴火の歴史を読み解け」を見た。 富士山ハザードマップが17年ぶりに改定されたことに合わせて制作された番組だと 思った。富士山の噴火は、現存する資料で確認できるかぎりでは 781 年から 1707 年ま でに10回あり、最も間隔が空いたときで約350年だった。現在は、最後の噴火から 300 年以上経過しているので、いつ噴火してもおかしくない状態にあると感じた。静 岡県の須走地区は宝永噴火の火口近くに位置し、地下からは焼けた木の柱が見つかっ た。高温の噴石によって焼けた家の上に火山灰が降り積もったものだった。また、当 時の噴火で、須走村では住宅37棟が燃え、残る39棟の全てが火山灰の重みで倒壊 しており、次はいつ噴火するのかととても恐ろしく感じた。地磁気による年代測定に よって、宝永山はマグマの隆起ではなく、噴出物の堆積によって出来たことが分かっ たが、その測定メカニズムをイラストも活用しながら丁寧に説明していたので、とて も分かりやすく勉強になった。富士山の噴火によって、首都圏でも2センチメートル 以上の火山灰が降り積もる可能性があり、鉄道や水道に大きな影響が出るおそれもあ るという説明には、非常に恐ろしいことだと思った。番組冒頭で「正しく恐れて備え るために」と言っていたが、そこまで大きな噴火が起きてしまうと、個人レベルでは 備えようがないようにも思え、無力さを感じた。
- 9月6日(月)のスポーツ×ヒューマン「戦い抜いて ふたり バドミントン フクヒロペア」を見た。勝者ではなく敗者のその後を追った番組は作りづらかったと思うが、ペアのつながりの強さを印象づける内容で好感が持てた。今年の6月に廣田選手が選手生命を脅かしかねない大けがをしたものの、装具でカバーすればプレーできる可能性があると分かり、リハビリや練習を重ね、東京オリンピックのコートに姿を立ったことは立派だと思った。金メダル候補と目されていた中での大けがは、さぞかしつ

らいものがあっただろうが、二人の間に、より一層強い絆が芽生えたと思う。東京オリンピック最後の試合が終わったあと、相手選手が真っ先に廣田選手の脚を心配していた姿はとてもすばらしかった。つらいことが多かった二人の戦いだったが、お互いがいたからこその強い絆が感じられ、さらなる活躍を見続けたいと思った。

- 8月22日(日)のNHKスペシャル「混迷ミャンマー 軍弾圧の闇に迫る」を見た。 2月1日にミャンマー軍によるクーデターが発生して以来、軍の攻撃によって 1,000 人以上の一般市民が犠牲となっている現状を報告していた。ミャンマー人たちが置か れている終わりの見えない厳しい状況を、日本人も無視してはいけないと思った。と ても興味深いドキュメンタリーだった。
- 身近な人が新型コロナウイルスに感染したとき、NHKのニュースを見れば最新の 感染状況などが分かると思ったが、東京オリンピック・パラリンピック期間中で競技 の中継ばかりしており残念だった。非常時には、自分自身がNHKをとても頼りにし ており、強く信頼していることを改めて感じた一方、その期待が裏切られてしまった とも感じた。同じような思いをした人も多かったのではないか。
- 東京オリンピック・パラリンピック期間中、こんなにもニュースを放送しなくなってしまうのかと衝撃だった。各地に放送局があることがNHKの強みだと思っており、地域のニュースをいつも楽しみにしているので、大変残念だった。津放送局のホームページの更新もあまりなかったように感じた。大会期間中、三重県では新型コロナウイルスの感染急拡大や国民体育大会の中止、知事の辞職表明など重要なニュースが多かったが、しっかりと放送時間を確保して伝えておらず、これでは地域の放送局の存在意義が薄れてしまうのではないかと思った。NHKには複数のチャンネルがあるので、きちんと使い分けながら、スポーツ中継ばかりでなく、伝えるべきものをしっかりと放送したほうが、受信料で成り立つ公共放送として適切だったのではないかと感じた。
- NHKは若い世代に見てもらうことをテーマにしているようだが、なぜ若い層を獲得していこうと考えているのか、また、若者が見ているかをどのようにして把握しているのか少し疑問に感じた。調査結果などのデータを開示しているのであれば見てみたいと思った。年を重ねていくとNHKをたくさん見るというイメージがあるが、長年のデータによって、今の若者もいずれ必ずNHKを見るようになることが分かっていれば、そこをコアターゲットとして定め、品質を落とさずコンテンツを提供していくのが、NHKとしても得意なことかもしれないと思った。

# (NHK側)

さまざまな調査により、若者のNHK離れが長期的に続いており、どんどん厳しさを増してきていることが確認されている。テレビを持たない人が増え、動画配信サービスなど、さまざまな形で情報を得る人も増えている中、どうやってNHKからのメッセージを伝えていくかが重要だと考えている。「Uta-Tube」などの番組を通じてはもちろん、「NHKプラス」などのインターネットサービスも活用し、なるべく多くの接点を設けてNHKのよさを伝えていきたい。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

### 2021年7月NHK中部地方放送番組審議会

7月のNHK中部地方放送番組審議会は、15日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「コロナ禍でも強くなれる~福島由紀 廣田彩花 葛藤の先に~」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師・玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス(株)相談役)

#### (主な発言)

< 「コロナ禍でも強くなれる~福島由紀 廣田彩花 葛藤の先に~」

(総合 6月18日(金)放送) について>

○ 2年という長期間の密着を通じて、オリンピックに出場する2人がコロナ禍で葛藤する様子やリアルな心境、助け合いながら成長していく姿が伝わり、丁寧に寄り添って取材されていると感じた。試合中はプレーのみならず精神的にも福島選手に頼ることの多かった廣田選手が、福島選手のスランプをきっかけに、その状態を克服し成長していく姿は、美しいと感じた。監督から厳しい指導を受けたあとの福島選手へのインタビューでは、カメラの前で涙を流すなど、周りに配慮して明るくふるまうふだんの姿とは別の一面を捉えており、応援したくなった。一方、本人としてはこのような状況でカメラを向けられるのはつらいのではないかとも思ったが、インタビュアーとの信頼関係があるからこその映像であり、困難を乗り越えようと頑張る姿を見ることが

できたと感じた。廣田選手が気持ちを安定させるために、好きな曲の歌詞を手書きで写しているのを、自身で撮影していたのは、飾らない雰囲気で大変好感を持った。廣田選手の「ことばでうまく伝えられないので、自分が頑張る姿を見せることで福島選手も気持ちが上がるのでは」ということばからは、自分らしく、自分のできる方法でペアに貢献しようとする気持ちが伝わりとてもすてきだった。世界選手権でライバルに敗れたあと、コロナ禍で成長し、全日本総合選手権で雪辱を果たすという展開は、ドキュメンタリーとしてすばらしかった。自由視点映像による試合運びの再現は分かりやすく、選手のすごさを効果的に伝えていた。ただ、ここまで見せてしまうと、ほかのチームに作戦を知られてしまうのではと心配になった。海外遠征中に廣田選手がホテルの自室で朝食を1人で食べていた場面からは、コロナ禍で普通ではない困難な状況に置かれていることが伝わってきた。オリンピックが近づく中、さまざまな世論に対する自身の葛藤など、選手たちの抱く複雑な思いを理解できた。そういった部分では考えさせられたし、爽やかなよい気持ちにもなれた番組だった。

- 海外遠征にも同行しており、制作する側の意気込みは大いに感じたが、対戦相手の 徹底的な分析といった部分では、掘り下げが無く残念だった。ペア競技には、フォー メーションやサインプレーなど重要な要素がさまざまあると思うが、競技に詳しくな い人には難しい部分もあり、もう少し説明があれば、ペアを組む選手どうしの意思疎 通の難しさや深さがより理解できたのではないか。コロナ禍での国際大会中止や、番 組のハイライトになるはずだったオリンピックの延期に、制作する側も、番組の構成 やどこに重点を置くかなど、さまざまに翻弄されたのではないかと思う。その影響も あり、やや不完全燃焼に感じられたのかもしれない。自由視点映像は技術的にも未熟 で物足りなかった。一方で、選手自身が科学的な分析を応用したり、観戦する側にも、 そういったデータを受け入れる素地ができつつあると感じているので、オリンピック 中継では最新技術による新たな驚きがあることを期待している。
- オリンピックの中止を求める声が多くある中での放送とうこともあり、さまざまな受け止め方があるのを前提として、しっかりと作られていたと思う。世界ランキングの上位に位置しているという特別なプレッシャーの中で、日々戦っている2人の異なる個性や表情が印象的で、よく捉えていた。ペアに密着したドキュメンタリーは、1人の選手に密着したものとはまた違った味わいがあり、非常に特徴があったと思う。自由視点映像によって、試合中、瞬時に状況判断を行っていることがよく分かり、改めてその能力の高さに驚いた。ただ、福島選手の競技に対するモチベーションがなかなか戻らなかったとき、どういう気持ちだったのか、一般の人には分からない世界だと思うが、大変な状況の中、どのように復活したのかも見られるとよかった。

- 最新の映像技術によるプレーの分析など科学的な視点も取り入れられており、単なるスポーツドキュメンタリーにとどまらない、力の入った骨太な番組だと思った。コロナ禍で困難に直面しつつ、一段と成長していく様子を2人の関係性も含めて多面的に描いており、興味深かった。高校時代など過去の映像も活用しながら、2人の心境の変化や地道な練習の積み重ねによる成長を丁寧に伝えており、感動的だった。オリンピックが延期になり、福島選手がなかなか気持ちを切り替えられなかったとき、廣田選手が黙々と練習に取り組み、ことばではなくプレーや姿勢で引っ張っていくようになる過程がとても印象的だった。自由視点映像を使った解説は、世界トップレベルのプレーを分かりやすく伝えており、バドミントンをあまり知らなくても楽しむことができた。ナレーションは落ち着きがありながらも情熱的で、番組に入り込みやすいものだった。一方、音声とテロップの出るタイミングがあまり合っていないと感じる部分があったのは残念だった。また、参加者が1人でも感染したら中止となる異例の状況で行われた世界大会が、結局どうなったのかが判然としなかった。
- 素顔をさらし、日常も全部さらしてしまうような密着取材を、選手たちはなぜ許す のだろうかとも思っていたが、この番組では、2年間に及ぶ密着取材によって良い映像がたくさん撮れていた。今の日本女子バドミントンには非常に強い選手が多いが、 その中でフクヒロペアが世界ランキング1位にいるという、その強さはどこから生まれてくるのか全く知らなかった。これまでは福島選手がリードしながら、廣田選手と のコンビネーションによって勝ってきたこと、しかしコロナ禍でそのコンビネーションが崩れ、それでも克服していったことを改めて知ることができた。ミスをした福島選手に、これまでついていくだけだった廣田選手が声をかけることで、気持ちを 切り替えられたシーンは印象的で、スポーツの難しさとおもしろさが伝わってきた。また、このシーンではBGMが非常に効果的に使われていて、鳥肌が立つほど上手に 作られていたと思う。自由視点映像はとてもおもしろく、試合のポイントを分かりや すく伝えられる技術だと思った。東京オリンピックでもこうした最新の映像表現を駆使して、スポーツの新しい楽しみ方を伝えてほしい。

#### (NHK側)

長期間、程よい距離感で取材したことがよかったと思っている。取材を積み重ねることで、信頼関係を築くことができ、福島選手がカメラの前で心のうちを明かしてくれた。コロナ禍で人と人との距離が離れることが多い中、ペアという関係性に焦点を当て、お互いに少しずつ変化しながら支え合おうとする2人の姿から、何か感じてもらえればと思いながら制作した。自由視点映像のような技術は、スポーツのポイントを読み解くに

は有効だが、リアルな熱量を伝える点では不十分な面もあった かと思う。今後も進化していくであろう技術をうまく活用しな がら番組を制作していきたい。

- 感動的な内容も多くあったが、番組の冒頭と終わりのインタビューには違和感があった。東京オリンピックの中止を求める声があることや、かつてない状況の中で開催されるオリンピックの金メダルの価値について尋ねていたが、選手たちは2人とも答えづらそうで、自身の考えもまとまっていない内容だったように思う。番組の冒頭は見る人への意識づけ、最後は伝えたいことをまとめる部分だと思うが、2人の関係が深化していく過程やコロナ禍でスポーツ選手が直面している状況と、オリンピック開催の是非とが、「葛藤」ということばでひとくくりにされているようで違和感があった。選手として、コロナ禍で試合ができない、力を出しきれないという葛藤はあると思うが、2人にとって、オリンピック開催の是非は葛藤の一部ではなかったと思う。今回のオリンピックは開催の是非が問われていて、それに対する葛藤があるはずだという制作者の視点があったのかもしれないが、選手たちが明確に応えられないようなインタビューを番組の最初と最後に取り上げていたことには疑問を感じた。
- 2年間を追ったドキュメンタリーとしてとてもよい番組になっていて、東京オリンピックを前に、2人を応援したくなる、ちょうどよいタイミングでの放送だった。東京オリンピックが1年延期になったことに対する2人の反応や葛藤、それらがどう変化してきたのか経過も見ることができてよかった。ふだんの練習や世界戦を転戦する様子からは、コロナ禍の中でよいペースを維持することの難しさを感じた。トップアスリートは恵まれた環境で練習していると思っていたが、鉄工所で地道に練習する2人の姿からは、日本のスポーツ環境の厳しさが感じられ、ドキュメンタリーとして興味深かった。ひとりが落ち込んだときにもうひとりが鼓舞するなどお互いに補い合う様子からは、ペアスポーツならではの難しさとおもしろさが伝わってきた。2人の気持ちを一つにすることが勝ちに結び付いていくところも見ることができてよかった。ただ、試合での戦略やモチベーションの維持には監督の存在も大きいと思うので、その部分ももう少し詳しく伝えてほしかった。
- コロナ禍で葛藤する姿を描くにしても、語りのトーンのせいか非常に重苦しく感じた。冒頭での「オリンピック中止を求める声が多いと思うがどう感じるか」という質問は、夢を持って晴れ舞台に力いっぱい挑もうとする選手に対して失礼ではないかと思った。2年余り密着取材したとのことだが、最初の頃の屈託のない明るい笑顔に比べ、海外での試合の相次ぐ中止やオリンピックの延期で、表情が明らかに変わっていくのがよく分かった。当然、モチベーションの低下もあり、心の乱れからミスが出て

しまい、「勝つのは甘くない」との監督からの激励の声は厳しいが、2人にとっては大事なひと言だと思った。しかし、その直後にインタビューし、カメラで映し、ここまで大きく取り上げる必要があったのか疑問に感じた。世界的な選手でも弱い部分があることを強調しているようで、本人にコメントまでさせることには違和感があった。福島選手に頼ることも多かった廣田選手が自分を磨き上げ、試合へ積極的に臨むことができるよう成長し、コンビネーションがより強固となって、世界ランキング1位の座を取り戻しオリンピック代表にも選ばれた。困難を乗り越えての日本代表であり、雑念をすべて取り払い、思い切り楽しみながらプレーしてほしいと思った。

- バドミントンについてよく知らない人でも分かる番組になっていたが、詳しい人にとってはやや物足りないのではないかとも思った。おそらく、取材当初は今のような状況を想定しておらず、2人は苦労を重ねながら東京オリンピックを目指し、メダルも期待される選手になっていると紹介する番組を作ろうと考えていたのではないかと思った。冒頭、オリンピック開催の是非について選手に質問していたが、開催を危ぶむ声がある中での放送となったため、そういった状況も踏まえて放送していることが伝わるよう、意図的に入れたのではないかと感じた。そのような番組側の意図を、選手への質問という形で盛り込むのはいかがなものかと思った。番組全体としては過度な応援ムードではなく、選手に寄り添って丁寧に取材してきたことが分かる内容だった。自由視点映像を使った解説は、画面の色合いなども含め、効果を十分に発揮できていなかったのではないかと思う。
- 冒頭で、世界ランキング1位であるフクヒロペアの東京オリンピックに対する複雑な思いを伝えていたのはよかったと思う。このシーンがあることによって、オリンピックに対して複雑な思いを抱いている人たちも、番組を見やすくなったのではないかと思った。「オリンピックを観戦しよう」といった一方的なメッセージにはなっておらず、スポンサーのいない公共放送としての役割を果たしているように感じられ、とてもよかった。選手自身も、コロナ禍での大会出場が怖く、乗り気になれずに調子を落としてしまうといったこともしっかり描かれており心に響いた。さまざまな困難に対し新しい形を見つけ出し、乗り越えようとする姿は、スポーツ選手ではないわれわれにも通ずるところがあり、すごくよかった。「コロナ禍でも強くなれる」というのは、単に選手としてだけでなく、人間としても強くなるということなのだと納得できた。世界的な選手であっても、特別扱いせず一人の人間として等身大で描くことは大切なことだと思う。引き続き、感動の押しつけではなく、視聴者が共感し自然に感動できる番組を作っていってほしい。自由視点映像を使った解説は分かりやすくて非常によかった。使いこなせばもっと分かりやすく表現できる可能性を感じたので、積極的に活用することで経験値を上げていってほしい。

2年間にわたって密着取材を行ったとのことだったが、"密着"は手段に過ぎず、大 事なのは膨大な映像の中から何を取り上げ、何を伝えるのかということだと思う。そ ういう意味では疑問を感じたり、違和感が残ったりした部分もあった。まずBGMに ついて、選手の気持ちを示すかのようなアップテンポの曲は、若干過度な演出に思え た。映像や選手の肉声で伝えたほうが、二人の成長の瞬間がより伝わったと思う。ま た、自由視点映像は効果を十分に生かし切れていないように見えた。モチベーション 変化のグラフについても説明が不十分に感じられ、選手たちがどのようにしてモチ ベーションを上げていったのかを丁寧に描けば、ペアとしての成長がさらに伝わった のではないか。監督から厳しい指導を受けたあとの気持ちを選手に聞く場面では、映 像から彼女の感情の高ぶりは伝わったが、そのあとの気持ちの変化や監督との対話と いった部分が描かれていなかった。福島選手がシャツをまくり上げるシーンもあって、 この映像を放送する必要があったのか疑問に感じた。また、東京オリンピックの開催 について、選手本人に意見を求めるのは少し酷に感じられ、わざわざ聞く必要があっ たのかと思った。番組は「コロナ禍で迎える夢の舞台、葛藤を続けるその先に2人は 何をつかむのだろうか」というコメントとシリアスな音楽で終わっており、前向きさ や快活さがあまりないまま終わったように感じた。もう少し前向きに、彼女たちの成 長や思いを描く形で制作したほうがよかったのではないか。

## (NHK側)

7月18日(日)放送予定の「NHKスペシャル」に向け、選手の気持ちのアップダウンをもっと分かりやすく伝えられないかなど、検討しながら制作を続けている。頂いた意見も踏まえながら進めていきたいと思う。オリンピック開催についての質問は、その是非を選手に聞くという意図ではなかった。もしコロナ禍でなければ、みんなの応援を受けながら夢の舞台に立つはずだったが、そうではない環境でのオリンピックとなってしまった。かつてない状況でオリンピックを目指す彼女たちの気持ちを聞きたかった。番組の最後については、2人がオリンピックに金メダル以上の意味を見いだそうとしていて、さらなる成長、選手としてだけなく人としての成長を遂げようとしている姿を伝えたいという思いがあった。

# <放送番組一般について>

○ 6月17日(木)の「まるっと!みえ」のコーナー「聞かせてください あなたの生き づらさ」で、ひきこもりについて取り上げていた。三重県の調査によるとひきこもり

の長期化・高年齢化が進んでおり、半年以上ひきこもっている人のうち20年以上ひきこもっている人が17%余りという驚きの実態を伝えていた。コロナ禍でひきこもりの子を持つ親の集まりなどが開けなくなり、実際の状況が見えづらくなっているので、支援する側が当事者に積極的にアプローチするアウトリーチ型支援が必要とまとめていた。高年齢化が進めば、親が面倒を見ることが難しくなるケースも出てくると思うので、どうやって支えていけばよいのかなど、具体策なども引き続き取材して伝えてほしい。

- 〇 6月22日(火)のクローズアップ現代+「再エネビジネスの"ゆがみ"独自取材  $\nabla$ 災害リスク」を見た。山の急斜面に太陽光発電施設を設置したことに起因する土砂災 害を取り上げており、熱海市の土石流災害とは因果関係は異なるとは思うが、災害を 未然に防ぐという意味では問題提起となる番組だったと思う。バイオマス発電の電力 買取単価は燃料の燃えやすさで変わり、検査会社の推計で決められているが、検査サン プルの改ざんが横行しているという内部告発を取り上げていた。悪いことをつまびら かにすることには意義があるが、不正な利益を生む仕組みについての説明が不十分で 理解しづらかった。買取単価が、燃えにくいものが高く、燃えやすいものが安く決め られていることも釈然とせず、検査方法の説明も簡略化されていて、詳しいところま ではよく分からなかった。ただ、かなり悪質なことはよく理解でき、取り上げる意味 があるとは思った。太陽光発電施設は、一定の電圧を超えると変電設備設置などの義 務が発生する。この義務を回避しようと意図的に施設を分割するケースが相次ぎ、認 定にあたり原則禁止とされたものの、疑わしい事案が後を絶たないと伝えていた。た だ、制度や規制には境目があり、ビジネス上の工夫の範囲内で合法的に行っているの であれば、バイオマス発電の改ざんと同列で非難するのは少し違うのではないかと感 じた。
- クローズアップ現代+「再エネビジネスの"ゆがみ"独自取材 ▽災害リスク」を見た。再生可能エネルギー固定価格買取制度の説明では、制度設計の背景等も含め、もっと分かりやすい表現ができたのではないか。脱炭素社会のよい面ではなく悪い面に焦点を当てたのは非常によかった。SDGsをめぐる動きでもそうだが、何かを解決しようとすると常に別の課題が出てくるトレードオフの状況にあり、これをどう乗り越えるかを考えなくてはならない。再生可能エネルギー以外でも、SDGsがブームになっていることを表面的に利用し、利己的な行動を取り、逆に社会的な課題を生み出す人たちが増えている。こうしたことをビジネスとして片づけてしまうと、これまでの大量生産・大量消費を是とした社会からの変革は促せないと思う。そのため、引き続き今回のように社会変革の闇の部分をしっかりと伝えていってほしい。さらに、トレードオフの状況をどうしたら乗り越えていけるのか、海外の先進的な取り組み等

にも注目し、視聴者も一緒になって考えるきっかけとなる番組も放送してほしい。そうすることで、「闇の部分があっても仕方がない」で終わらせず、さらに乗り越えていこうという前向きなところにまで視野が広がっていくのではないか。

- 6月29日(火)のクローズアップ現代+「ワクチン・デマや差別がある中…いま必要なのは」では、ワクチン接種の現状報告と問題提起をしていたが、多くの人々の関心事であり、よいタイミングでの放送だったと思う。冒頭で職域接種が始まったことを伝えていたが、ワクチン不足で受付が一時休止となってしまった事例もあり、常に情報は変わるので、新しい情報をもとに次の番組を作ることも必要ではないかと思った。若い人たちの接種が進むかどうかが今後の課題だと思うが、子どもへの接種が進むと、接種していない子どもへのいじめや差別につながる可能性もある。国からは、いつ誰に接種するのか、本人の意思決定をどう支援するのかといった情報提供が少なく、対応が遅れていると感じた。若い人たちの接種を進めるには、ワクチンパスポートによる行動制限の緩和など、科学的な根拠に基づいて人々の行動を変えていく必要があるが、国にはそれがうまくできていないと思う。政府で重要な立場にある人たちに、この番組を見てほしいと思った。アメリカで行われている、接種を迷う人たちに対するカウンセリングを紹介していたが、そういった動きまで取り上げていた点は提案型の番組として評価したい。
- 7月2日(金)のナビゲーション「不登校の君へ"学校らしくない学校"の挑戦」を 見た。岐阜市に開校した不登校特例校の先生たちが日々試行錯誤しながら、子どもた ちにとって居心地のよい学校を目指す様子などを伝え、理想的な学校のあり方につい て考える番組だった。不登校の原因のひとつに、いじめがある。いじめる側がよくな いのは当然だが、実際の教育現場では、いじめられた側にも問題があるのではという 見方をされてしまう場合がある。多様性を認め合うことが重要と言われながらも、現 実的には難しい部分もあるので、こういった学校ではどのような取り組みが行なわれ ているのか興味を持って見た。全国の不登校者数が紹介されたが、実数だけでは多い のかどうかよく分からなかったので、そもそも不登校者というのがどういう状態にあ る人を指していて、生徒全体に対してどの程度の割合を占めているのかも説明してほ しかった。また、コロナ禍によって不登校者数も増えているといった現状についても あわせて伝えてほしかった。この学校では、ルールに子どもを合わせていくのではな く、子どもに合わせてルールを変えていくなど、居心地よく学べる環境を作ろうと懸 命に取り組んでいることが分かった。すべての先生がみずから希望して赴任し、「学校 に行きたいけど行けない」というつらい思いを抱える子どもたちに何かをしてあげた いと頑張っている、よい学校だと思った。

- ナビゲーション「不登校の君へ"学校らしくない学校"の挑戦」を見た。スタジオに出演していた草潤中学校の井上博詞校長と京都大学総合博物館の塩瀬隆之准教授のことばからは、不登校の解消に対する強い信念が感じられとても印象深かった。特に、井上校長の力強いことばからは、確固たる意志を持って学校を運営していることが伝わってきた。これまでも、この学校の理念をさまざまな場で語って、理解を得てきたのだろうと分かる語り口だった。また、「(このような学校が増えていくことで)不登校特例校という名前がなくなることが理想」という塩瀬准教授のことばも印象に残った。2人からは、学校のあり方に対する固定観念のほうが問題で、学校は子どもたちのための場であり、居場所でなければならないという強いメッセージを感じた。不登校特例校の現場では、先生たちの奮闘が始まったばかりだが、2人のことばはとても心強いものに感じられた。
- ナビゲーション「不登校の君へ"学校らしくない学校"の挑戦」を見た。私立ではなく公立中学校だということが画期的に感じられ、設立に至る経緯など、もっと情報を知りたくなった。現場の取り組みが見られ、生徒たちの生の声も聞けたので、さまざまな子どもたちがいることは分かったが、番組の中で生徒たちは登校していたので、いわゆる不登校ではないのではと感じてしまった。タイトルにもある不登校の定義をしっかり説明してほしいと思った。「学校らしくない学校」というのは、よいタイトルだとは思うが、学び方や教え方の多様性の確保は重要な社会問題になっていて、先生たちが一丸となって新しい形を模索し奮闘していたので、そうしたことも伝わるような、もう少し違った表現にしてもよかったのではないか。
- 7月2日(金)のザウルス!今夜も掘らナイト「行列のヒミツ4~人気スポットの裏側に若者たちの奮闘が!~」(総合 後 7:30~7:57 福井県域)では、扱う商品はもちろん、行列のでき方もそれぞれ異なる店をバリエーション豊かに紹介していてよかった。永平寺の門前町にある土産物店では、コロナ禍で観光客が減少する中、新たにプリンの製造販売に挑戦し、短期間で行列ができるまでになったことを伝えていた。また、福井県坂井市三国町のジェラート店のような、以前から行列の絶えない地元でおなじみの店まで、さまざまな行列店を紹介していてすばらしかった。単なる情報番組のような伝え方ではなく、しっかりとしたインタビューを行い、行列店に至るまでの店主の苦労や思いがしっかり盛り込まれていると思った。福井農林高等学校の農産品販売店では、販売や接客などの店舗運営を学校教育の一環として生徒自身が行っており興味深かった。司会のパトリック・ハーランさんのコメントは、ユーモアを交えながら内容をうまくまとめており、とても分かりやすかった。今後も、地域を気軽に楽しく、おもしろく深堀りする番組を期待したい。

- 7月5日(月)のクローズアップ現代+「カメラが捉えた土石流の脅威・熱海の現場から生報告」を見た。発災から2日後の放送だったが、現地での取材に、専門家のインタビューを交え、伝えたいメッセージも含め番組としてまとめ上げるまでの早さにとても驚いた。被災者や消防団員の生の声を基に被害拡大の要因に迫ったり、3人の専門家による科学的見地からの要因分析がなされており、内容も構成も非常によかった。今後、西日本だけでなく東日本でも土砂災害が発生する可能性が高くなる危険性が示されていたが、こういった自然災害に対する専門家の知見をもっと活用できれば、少しずつ安全・安心につながっていくのではないかと思った。被害のあった地区は、土砂災害警戒区域に指定されていた地域だったが、住民の「集中豪雨ではなかったので気にしてなかった」という声に驚いた。どのように情報を伝えれば避難してもらえるのか、メディアの役割がとても大切だと思った。避難したものの災害が起きなかった場合でも、"空振り"でなく"素振り"と考え、命を守る行動を続けてほしいと締めくくられていた。今回の災害は長雨によるもので、短期的な集中豪雨でなくとも大きな被害が出たケースだったので、避難の大切さをしっかりと訴えるよいまとめ方だと思った。
- 7月9日(金)の「ド真ん中ジャーナル!」(総合後7:30~8:13 東海3県プロック)を 見た。司会の井戸田潤さんと藤井彩子アナウンサーは、ともに明るいキャラクターで 上手に番組を進行していた。水害への備えを取り上げていたが、防災報道はメディア の使命であり、その大切さを繰り返し伝えていかなければならないと思う。熱海市の 土石流災害を受けての放送だったのかは分からないが、防災への呼びかけという観点 からも、よいタイミングでの放送だった。ただ、7月の豪雨で被害がたびたび起きて いることを紹介する際、使われていた過去の災害映像が、去年と2010年の岐阜市に続 き、3つ目は 1972 年の愛知県豊田市と50年近く前の映像だった。東海地方にこだ わったためかもしれないが、少しも「たびたび」とは言えないのではないかと感じて しまった。ゲストの飲食店経営者を紹介する際、画面の左半分を使って本人のSNS を映し出していたが、変わった紹介のしかただと思った。また、熱海市の災害につい てのコメントには違和感があり、ゲストの人選としてどうなのかと思った。気象予報 士の寺尾さんが、気象庁のウェブページにある「キキクル(危険度分布)」の使い方を、 実際に操作しながら詳しく説明していたのは非常によかった。このページを見て、土 砂や浸水による危険性が低そうだと思った人は油断してしまうのではとも思ったが、 そのタイミングで在宅避難の話題へと移っていったので、非常によい展開だったと思 う。3日間電気・ガス・水道を使わない生活をタレントが実際に体験することで、ト イレが流せなかったり冷蔵庫の食品が腐ったりと在宅避難の大変さがよく分かり、危 険性が低いとされる場所に住んでいる人も災害への心構えを意識できたのではないか。 非常用トイレの大切さや、体温を下げるにはAVA血管がある手のひらを水に浸すと

効果的なことは知らなかったので、非常に役に立つ番組だと思った。引き続き、このような番組を作っていってほしい。

- 7月9日(金)のいしかわ映像歩き「七尾・能登島編」(総合 後7:30~7:55 石川県域)は、映像がまだ白黒だった 1960 年代の七尾での暮らしや能登島での火祭りなどを記録したアーカイブ映像を活用した番組だった。行商の女性が蒸気機関車で移動する様子などを映像で見ることで、この時代の都市と農村・漁村では、こんなにも違ったのかと、驚きとともに理解できた。過去の生活の様子は本人たちの記憶としては残っているが、次の世代へとうまく伝えていくのは難しいと思う。NHKには貴重な記録である映像が残っているので、公共放送の役割のひとつとして、各地域局でも活用し、大事な思いを引き継いでいけるような番組を制作していってほしい。また、テレビ画面の縦横比が今と昔では異なるため、画面の両脇に番組タイトルを表示した静止画がずっと映っていた。この部分に、どのあたりの映像なのか地図で示したり、撮影した年代を出し続けるなど、映像の理解が進む補足情報を付加すればさらによくなると思う。
- 7月5日(月)のスポーツ×ヒューマン「わたしたちが走る理由 南スーダン陸上選手の600日」を見た。オリンピック強化合宿のため、南スーダンから群馬県にやってきた陸上選手たちが、長期間の滞在を通して地域の人々や同世代の日本人選手と絆を深めていく姿が印象に残った。南スーダンは、代表選手でも2日に1度しか食事ができないことがあるほど貧しく、オリンピックのためとはいえ、大黒柱として働くことを期待されていたある選手を遠く離れた日本へ送り出すのは、家族にとって一大決心だったのではないかと思った。母親と電話で、久しぶりに話ができたときの選手の安ど感や嬉しそうな表情が印象に残った。コロナ禍でなければ、選手たちが感じるはずだった日本のよさをあまり味わうこともなく、競技後すぐに帰国してしまうと思うと残念だが、頑張ってほしいと思った。
- 7月11日(日)の解体キングダム「街のシンボルを解体せよ」(BSプレミアム 後1:27~2:56)では、巨大な水槽やガスタンクの解体を紹介していた。ふだんこういった建物の構造を目にすることはないが、図やモデルを使って説明していて非常に分かりやすかった。世界に誇る日本の職人技が、ドローンを使った空撮映像やタイムラプス映像を駆使してダイナミックかつ繊細に表現されており、最後まで楽しく見られた。解体作業がどのように行われているかは、ふだんはシートに囲われていて分からないが、現場でのさまざまな苦労や工夫を知ることができた。また、解体される建物の中には、地域住民に長きにわたって親しまれ、人々を支え続けてきた物もあり、それらに寄り添って生活してきた人々がいることに改めて気付かされた。人口減少が続く今、

日本経済が成長し続けた時代は過去のものとなり、今後もこういった建物の解体が相次ぐと思う。物の解体を通じて、社会的な構造や人々の生活のあり方が改めて見直されつつあると感じた。解体は、実は新たな始まりであり、再生でもあり、縮小を続ける現代社会に生きる者として、解体が時代に何を問いかけているのかを感じることができ、身近にそういったことが起きていることを実感させられた。

○ 6月25日(金)の「名古屋発ラジオ深夜便」を聞いた。ゲストの大東めぐみさんのトークでは、出産・育児の期間も両親や周囲の助けがあってタレント活動を続けられたことや、タレントとしての発信力を生かして「親学アドバイザー」としても活躍しているという話を聞き、バイタリティーに富んだ人だと感心した。同世代の村上由利子アナウンサーとのやり取りもよかった。悩み相談では、ひとつの答えを明確に示すのではなく、いろいろな角度から一緒に考えていくスタイルで好感が持てた。 4時台の「明日へのことば」では社会福祉士の矢満田篤二さんが出演し、愛知方式の特別養子縁組を特集していた。生まれてくる赤ちゃんだけでなく母親の命も守る仕組みで、養父母のおおらかさや覚悟が大切という話に一番感銘を受けた。児童相談所のケースワークということだが、インタビュー自体がケースワークとして構成されており、非常に分かりやすかった。養父母や子どものことばからは、親子でともに生きてきた時間がシンプルで太い絆となっていくのだと感じた。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

### 2021年6月NHK中部地方放送番組審議会

6月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「激動!地方銀行~"衝撃"提携の舞台裏~」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐) 副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役) 委 員 遠藤 英俊 (名城大学特任教授) (中日新聞社取締役) 岡安 大助 榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役) 玉井 博祜 (能楽師/玉井屋本舗社長) 成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長) 平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長) (愛知県農業協同組合中央会常務理事) 廣田 憲吾

(東邦ガス(株)代表取締役会長)

(主な発言)

<ナビゲーション「激動!地方銀行~"衝撃"提携の舞台裏~」

安井 香一

(総合 5月21日(金)放送) について>

○ 静岡の地方銀行と山梨の地方銀行が業務提携を行う現場が取材されていて非常に 興味深かった。両行の議論の場で意見が衝突するシーンからは、提携のほかにも生き 残るための手だてがあるのではないかという気もしたが、お互いの懸命さが伝わって きた。ただ、銀行が取り扱う商品の幅や営業の対象地域を広げることの妥当性につい て説明が無く、山梨の銀行がなぜ証券業務を手がけなければならないのかまではよく 分からなかった。ゲストの「新型コロナウイルスの影響で大変なときこそ、チャンス の回数が増えるので何をやってもよい」というまとめのコメントは、抽象的で番組の 趣旨とも異なっており、少し無責任ではないかと感じた。業務提携に肯定的な立場の ゲストもいたほうがよかったのではないか。一般の銀行利用者にとっては距離のある 内容で、あまり身近には感じられなかった。全体的に銀行の大変さは伝わったが、証 券業務に進出する必要性やメリット・デメリットが見えず、あまり心が動かされなかった。地方銀行が今後どうしていくべきかや、金利の低下など構造的な問題のほうが重要ではないかと思った。

- タイトルは「激動!地方銀行~"衝撃"提携の舞台裏」となっていたが、どの部分 が"衝撃"なのかよく分からなかった。銀行が統合や子会社化などで生き延びる道を 模索している中、この題材を取り上げたことは妥当だと思う。ただ、冒頭で「地域経 済への影響はどうなる」と問いかけながらも、地域経済に関する内容がほとんど無く、 完全に置き去りになっていた。5か月にわたる密着取材により撮影できた会議での 生々しいやり取りは興味深かったが、異なる組織どうしが対立するのはリスク管理の 面では当たり前だと思った。ゲストが「互いが強く主張するばかりで、落としどころ が見つかっていない」とコメントしていたが、実際には落としどころは見つかってい ると思う。撮影できた生々しい舞台裏を紹介することにこだわったため、ちぐはぐな コメントになってしまったのではないかと感じた。増えつつある個人投資家にとって は、いかに手数料を安くするかが重要で、手数料の安いネット証券が人気を集めてい る。その中で、新たな金融商品の販売に乗り出し、手数料収入で生き延びようという 銀行側の視点だけで一方的に伝えることにどのような意味があるのだろうかと感じた。 番組で取り上げた例は、生き残り策の一つだとは思うが、地方銀行の本来あるべき姿 からは外れてしまっている印象を受けた。ゲストもそのようなコメントをしているよ うに感じた。
- 各地で進む地方銀行の業務提携について、詳しく知らなかったので興味深かった。 昨年度、銀行は新型コロナウイルスの影響を受けた企業への融資を積極的に行っている印象があり、番組内でも「これ以上融資をするのはどうか思うところがある」という銀行員の話を聞き、同じ思いを抱いているのだと分かった。長引く低金利で地方銀行の経営が厳しくなっていると伝えていたが、低金利は今に始まったことではないと思う。実際には、新型コロナウイルス関連の融資によって地方銀行の貸出残高は3月に過去最高額を更新している。また、この融資制度は自治体が利子補給を行い、信用保証協会が焦げ付きのリスクを負うことになっている。そのため、銀行は貸し倒れのリスクを負うことがほぼ無く、安定した金利収入が収益の下支えになっていると思う。その制度が終わることのほうが地方銀行の危機感を高めていると感じているが、それらの説明が無かったのでふに落ちなかった。借り手からすると、コロナ禍では積極的な融資が行われているが、終わったとたん貸し渋りが生じ、返せなくなると銀行の対応がひょう変するのではないかという不安もあると思う。顧客の立場で番組を見ていたため、顧客にとってどのような影響があるかが取り上げられておらず違和感があった。番組で紹介されていた事例よりも、ゲストの「顧客の信頼や本業回帰が大切」と

いうコメントのほうが共感を持てた。また、冒頭で「地域のお金はどうなる」と言っていたが"お金"には幅広い意味があり、地元中小企業に対する融資の話だと思って 見始めてしまったので、もう少し適切な表現がなかったのかと感じた。

- 銀行の業務提携に関する話題は、もともと経営難と言われていた地方銀行がコロナ禍で存続の危機にあることが現実味を帯びて感じられる中、事業家や地域の人々にも関心の高い内容だと思う。ただ、地方銀行が今なぜ激動しているのか、その背景が語られないまま銀行内部の提携に向けた動きを見せられたので、よく分からない番組を見たという印象が残った。社会的な背景があって合併や業務提携などの動きが起きているはずなので、起きている現象だけを伝えても理解しづらいと思う。地方銀行が業務提携し金融商品の取り扱いを始めたというニュースでも伝えられる内容を、密着取材によって得られた提携の内幕を加えて、長い時間を使って伝えただけではないかと感じた。ゲストが「融資で地域を元気づけようという銀行の従前の態度が問われる」とコメントしていたが、新規業務を担う行員のインタビューでは、「融資より金融商品が大切」という銀行側の視点だけに立った話に終始しており、これでは視聴者が「地方銀行はそういうところだ」と感じてしまうのではないか。制作者が地方銀行の置かれている状況や背景をあまり理解せずに作ってしまったようにも感じられ、全体的にまとまりのない番組だと思った。
- これまで、いくつもの都市銀行が合併し、証券会社も一体となって巨大な金融機関が生まれてきた。現在も、長引く低金利と人口減少、コロナ禍によって地方銀行の存続が危ぶまれ、提携が模索されている。中部地方でも各地で地方銀行の合併が進んでおり、今回は静岡の銀行と山梨の銀行による業務提携の事例が伝えられた。証券販売のノウハウを教える静岡の銀行と顧客に商品を提供する山梨の銀行とで、どちらの立場が有利なのかは分からなかった。ただ、議論の冒頭で利益配分の話を切り出しておきながら「気を悪くしないで」というのは無理な話だと思った。お互いを理解しようと努めたうえでの議論だとは思うが、無理だと感じてしまう私の認識が甘いのだろうか。頭取のインタビューで、異なる風土と社風の銀行どうしが共通の課題認識を持って一緒に歩んでゆける心強さを語っていたのは救いだった。地域を豊かに、元気にしていくためのサポートをするのが地方銀行の役割だと思うので、ゲストの「地方銀行は初心に帰って地域に寄り添い信頼関係をより厚くしようと考えることが大切」というコメントには納得ができた。
- 銀行の業務提携について5か月も密着取材したとのことだが、番組からは長期的な時間の流れを感じることができなかった。提携に向けた話し合いの中で衝突している様子など、ポイントとなる場面を撮影できたのは成果だと思う。ただ、提携に向けた

全体の流れの中で、それらがどう動いていき、どのように帰結したのかが番組からはよく分からなかった。また、提携の根本にある地域経済の悪化に、今回の提携がどのように働き、生活にどう影響するのかもよく分からなかった。銀行業務では、顧客との信頼関係が重要視されていることや、さまざまなノウハウを持っている銀行が強いということは番組から感じ取ることができた。

- 一般論で終わるのではなく、実際の地方銀行どうしの業務提携に着目し、機密情報 の多い銀行への密着取材によって得られた情報を中心に展開していてよかった。金融 業は専門用語が多く、一般の人に分かりやすく伝えるのは難しい業種だと思うが、で きるだけ具体的な事例を使って伝えようという姿勢に番組としての努力を感じた。一 方、構成には疑問を感じる部分が多かった。冒頭、コロナ禍で苦しむ地域経済と銀行 の話で事業承継について触れており、そのまま深掘りしていくのかと思ったが、実際 には証券業務について深堀りしていた。今の状況を示すのに、証券業務が適切な事例 だったのか疑問に感じた。ゲストの「地域が元気になるために銀行は何ができるのか や、業務提携がどう役に立つのかを考えることが大事」といったコメントは、とても 重要だと思った。これを番組のメッセージにして、事業承継や業務提携の背景、ある べき姿と現実のギャップなどを深掘りしていけば、もっと明快に伝えられたのではな いか。銀行はさまざまな社会状況を反映させながら事業を展開しており短時間ですべ てを取り上げることは無理だと思うが、番組として何を伝えたいのかは、はっきりさ せるべきだと思う。内容を絞って構成を考えるか、事前に出演者とメッセージをしっ かり共有したうえで議論を尽くすかのどちらかを徹底しなければ、今後も何を伝えた いのか分からない番組を作ってしまうと思うので、ぜひ改善をお願いしたい。
- 地方銀行が地域の "総合商社化"の方向に進んでいると言われているが、本業は融資業務であり、事業全体のバランスを考えるときに、そのことをどう捉えるべきか、また、顧客との関わり方や本業に集中することで地域を元気にするというのはどういうことなのか、考えさせられる番組だった。融資業務につながる事業承継の働きかけについて掘り下げを期待したが、役員の話や部長らによる折衝、若手社員が出向して顧客対応のノウハウを学ぶ様子など、多角的な内容が取り上げられていて、そういったところに時間をかけて取材したのだと思った。その中でも証券事業での提携について多くの時間を割いて伝えていたが、金融機関の収益悪化の構造的な要因や今後の予測を踏まえたうえで、今取り組んでいるさまざまな戦略にも切り込んで解説したほうがよかったのではないか。ゲストのコメントにもあったが「本業にもう一度目を向けて集中することが基本」というのはそのとおりだと思ったが、それはなぜなのかについてもコメントしてほしかった。本業をベースに地域にどう密着し、バランスの取れた多角的な経営が進められていくのか、地方銀行の今後についても伝えてほしい。

- 番組を通じて、何を訴えたいのかよく分からず、主題は何なのか疑問に感じた。ま た、内容に対してタイトルやテロップ、コメントの表現が大げさすぎるのではないか と思った。冒頭で、三重県や福井県での銀行再編を紹介していたが、そこからイメー ジするものと今回取り上げた事例とは少し違う話ではないかと思った。取材に入った のは提携が発表されたあとだと思うが、提携の方向性や思い描く将来の姿は発表以前 にかなり議論され、大半のドラマはそこで起きていたのではないか。番組では、その 方向性に基づき業務レベルで協議している場面を紹介していたのだと思う。それを踏 まえたとしても主題がどこにあるのか分からず、地方銀行の生き残りに向けた模索な のか、あるいはコロナ禍による閉塞感の中でこれまでにないリスクを取った企業の紹 介なのか判然としなかった。利益配分を折衝する場面はドキュメンタリーとしての 生々しさを感じさせる効果があったと思う。二つの銀行の間には、規模や営業エリア の経済圏に格差があり、折衝の様子からもその力関係がかいま見え、無意識のうちに 一方に肩入れして編集されているのではないかとも感じた。議論の内容には「地域や 利用者のため」という視点が希薄で、番組を見た銀行利用者の信用を損ないかねない のではないかと感じた。地方銀行の貸出金利のグラフを最初に見たときにはここ数年 で半減したのかと思ったが、よく見ると1割程度の減少でしかなく、誤った印象を与 えかねない表現だった。苦悩する地域経済について伝える場面では、銀行が地元企業 に提示した解決策がネットでの営業展開だけだったのには寂しい印象を受けた。ゲス トは、不安をあおったり精神論を語ったりすることが多く、制作者の意向に合わせた のかと勘ぐってしまうほどで、あまり共感できなかった。今回の提携の根底には、銀 行業務と証券業務の間におけるファイアーウォール規制の緩和を巡る動きもあると思 うが、番組では触れられていなかった。タイトルをセンセーショナルにしすぎた結果、 内容が追いつかず、訴えたいことがうまく伝わらなかったように感じた。
- タイトルは"衝撃的"だったが、内容に比べて過大な表現だったと思う。何度も意見として出ているはずだが、タイトルによってハードルを上げすぎてしまうのはいかがなものか。放送する前にあらためて確認してほしい。たった25分という短さにもかかわらず、まとまりがなくて何を言いたいのか分からなかった。冒頭と最後の締めは一番の肝であり、途中に多少のぶれがあったとしても、最初と最後が締まっていれば、全体として言いたいことを伝えられると思う。この点が改善されるのであれば、生放送にこだわらず、収録・編集して放送してもよいのではないか。なじみのない地方銀行どうしの提携だったこともあり、なぜこの事例を取り上げたのかや、地域をまたいだ業務提携を決めた理由、そこに至る背景について丁寧な説明がなく、最後まで置き去りにされたような印象を受けた。両行の折衝では、これが本当に提携を決めたあとの話し合いなのかと疑ってしまうような決裂気味の場面がクローズアップされており、非常に後ろ向きで、その銀行の顧客だったら心配になるのではないかと思った。

最初は決裂したものの、徐々に両者が歩み寄り、ビジョンが一つになっていくということが放送されることもなく、5か月間にもわたる長期密着取材の成果がどこにあったのかが分からなかった。ゲストは、紹介された事例に対し、あえて抽象的に表現したり言い方を変えながら、この提携の難しさをはっきりと言い切ってくれたのでよかった。5か月間の取材内容をダイジェストにして、ゲストのコメントを付けたものを見たいと思った。また、番組内で「先週」や「今月」といった表現が多かったが、NHKプラスなどで配信されることが増えていけば、放送日と実際に視聴する日に違いが出て、週や月をまたぐことも多くなると思う。コメントはそのままでもよいと思うが、テロップで補足するなど、視聴する日付とのタイムラグを前提とした工夫が必要なのではないかと思った。

○ 企業などに融資して利息や手数料を得ることで収益を上げる旧来のモデルは、労働 人口の減少やゼロ金利政策、窓口を持たないネットバンクやフィンテックの伸張によ り成り立たなくなっていると思う。番組では、コロナ禍の影響もあって地方の事業者 が苦境に陥り、金融機関にも影響が及び、静岡の銀行では回収できなくなるおそれが ある金額が46億円増加したことを取り上げていた。しかし、銀行全体の売り上げ額 や営業利益が示されておらず、どれくらいのインパクトなのかが不明確だった。46 億円という金額だけをセンセーショナルに取り上げるだけではなく、その金額が全体 に占める規模感も示してほしかった。スタジオ出演者が話しているとき、リモート出 演者のマイクがオンのままだったのか大きな雑音が入っていて非常に気になった。ま た、ゲストとして小説家が出演していたが、金融の専門家としてのアプローチがあま り無いように感じられ、今回のテーマにはややそぐわないのではないかと思った。県 をまたぐ業務提携を5か月にわたって密着取材しており、現場ならではの臨場感があ り見応えがあった。その一方で、両者が自分の立場を主張するばかりで前向きな議論 がされているようには感じられなかった。結局、番組の終盤まで提携による具体的な 効果やシナジーが見えないまま消化不良な感じで終わってしまい、この事例をどう いったスタンスで取り上げているのか見えにくくなっていた。スタジオでのやり取り も個別の事例に寄りすぎていてピントがずれているように感じた。もう少しふかん的 な見方があれば、示唆に富む内容になったと思う。放送時間に限りがあるとは思うが、 提携の一事例だけでなく、事業承継に成功した事例なども盛り込むことで、困難な状 況の中でも可能性を感じさせ、多面的な見方も提供できたのではないか。

# (NHK側)

今後、頂いた意見を踏まえて番組を作っていきたい。金融機関の 裏側に入っての取材は難易度が高く、撮れた内容をどのように考 えるかを示してもらうためにゲストに出演をお願いした。ゲストの「本来業務を見つめ直して地域経済を支えることが本筋ではないか」というのをメッセージの一つと考えながら番組を制作した。地域の"お金"という観点で、地元の企業や住民がこの提携をどう見ているのかといった側面も取材を深めていきたいと思った。金融や経済は難しいテーマだが、次回作の取材を続けていきたいと思う。

## (NHK側)

金融機関の裏側に5か月密着取材したという1点から突破していく番組だったが、そこにウエイトを置きすぎていたこともあり、内容が不十分との指摘につながったのだと思う。タイトルの付け方や番組の冒頭と終わり方、メッセージは何かといったことは、すべての番組で重要だと思っている。基本的にメッセージは1つ、コメントは過剰にしない、事実をしっかり伝えるなど常々気をつけているが、NHKはよい番組を作っていると視聴者に思ってもらえるよう、意見をしっかりと受け止め改善できるところは進めていきたいと思う。

## <放送番組一般について>

○ 5月21日(金)のドキュメント72時間「能登半島 桜咲く無人駅で」を見た。無人駅の桜を見に来るさまざまな人やその思いが伝わってくる番組で、とても印象に残った。ボランティアで駅のトイレ掃除に来る近所の老夫婦のことばは、駅の開業以来、長きにわたり桜を守ってきた地元の人たちの営みを感じさせ、頭の下がる思いがした。病気で医師を辞めた男性とその妻が、遠出を諦め、何度か来たことのある駅の桜を見ることにしたという場面からは、遠くまで行って見る景色よりも身近によいものがあるのだというメッセージにも受け取れ、とても心に響いた。去年は桜を見るゆとりすら無かったが、ことしは見に来ることができたという青年の場面では「変わらぬ桜は鏡のように今の心を映し出す」というナレーションが特に印象に残った。「能登はやさしや土までも」というコメントからは、連続テレビ小説「まれ」のオープニングで見ていた能登の情景が思い出され、とてもよい番組だった。

- 5月22日(土)の【ストーリーズ】この社会の片隅で(2)「公衆電話」を見た。ピーク時には全国で93万台あった公衆電話が15万台まで減少したとのことだが、いまだにそれだけ残っていることに驚いた。大阪の電話博物館にあるレバーハンドルを回して相手につなぐ電話やピンクの電話などからは、懐かしい昭和を感じ、楽しい気持ちになった。災害時に一般の電話が混雑する場合でも公衆電話には通信規制がかからずつながりやすいことや、電話回線から流れる電流により停電時にも使えることなど、災害時の対策としての側面も紹介されていた。将来的な技術の紹介では、若干不十分と感じるところもあったが、懐かしさもあって楽しい番組だった。
- 5月23日(日)のNHKスペシャル パンデミック 激動の世界(10)「迫る"介 護崩壊" 新型コロナで揺れる老後」を見た。介護事業者の経営状態は一時的によい 時期もあったが、今は新型コロナウイルス対策や利用の手控えで困難な時期を迎えて いる。もともと経営の厳しい小規模事業者が多く、国は介護報酬を是正してきたもの の、コロナ禍でさらに厳しい状況になっている。また、職場での感染を恐れて介護従 事者が離職してしまい、ますます事業の継続が困難になっていると伝えていた。コロ ナ禍で、去年の休廃業は 455 件、倒産は 118 件に上ったことからも、その厳しさが伝 わってきた。認知症の利用者が無意識にマスクを外してしまうなど、対応に追われる 現場の様子や、介護の利用を控えたことで症状が悪化してしまった事例などは興味深 かった。これらの対策として、ITを活用した効率化や感染対策を意識した非接触介 護の導入などが紹介されていたが、人手不足の原因や介護事業者のぜい弱性がどこに あり、どう解決していくかについての深掘りが足りなかった。国は地域包括ケアとし て社会福祉協議会やシルバー人材センターなどさまざまな場所でボランティアを導入 しているが、なかなかうまくいっておらず、何が問題となっていて、どうすれば解決 できるのか根本的にメスを入れる必要があるのではないか。ドイツでは介護度の重い 人に重点的にサービスを提供するシステムだと伝えていたが、うまくいっているのか どうか具体的に分からなかった。田村憲久厚生労働大臣へのインタビューではキャス ターの質問による掘り下げがなく、ただ普通に話を聞いているだけという印象を受け た。現状の厳しさは伝わったが、今後に向けた提案や将来的な対策といった面では不 十分だと感じた。
- 5月26日(水)のたけしのその時カメラは回っていた「日本のウーマンパワー」(総合 後7:30~8:15)を見た。NHKではジェンダーの話題をよく取り上げているが、この番組では、昔から家庭では女性が強かったというまとめ方で終わっていた。クローズアップ現代+「ジェンダーギャップを町ぐるみで解消・試練の先に」では、家庭での女性の役割の低さがギャップの原因のひとつと指摘していたのに、ジェンダーに関する番組として、あまりふさわしくないと感じた。

- 5月27日(木)のクローズアップ現代+「ワクチンで危機克服?開発の立役者×山 中伸弥教授」を見た。タイトルから受ける印象と出演者のキャスティングや内容が一 致していて、すばらしい番組だった。高齢者への接種や身近な場所での集団接種が進 む中、m(メッセンジャー)RNAワクチンは非常に大きな関心事の一つでもあった ので、とてもタイムリーでよかった。ワクチンについてさまざまな情報があふれる中、 今私たちが知りたいことや気になることを、山中教授が開発の立役者である科学者の カタリン・カリコさんに聞くというテーマで、科学的にも信頼性が高いのではないか と期待して見た。mRNAやそれを使ったワクチンについてほとんど知らなかったが、 クオリティーの高いCGを使って誰にでも分かりやすい形で伝えており、理解が一気 に深まった。こういった技術はNHKの圧倒的な強みであり、適切に活用すれば大き な効果があると改めて思った。ただ、地域放送局の番組ではあまり活用されておらず、 使われている場合であってもクオリティーの違いを感じた。コロナウイルスの手ごわ さや変異種の怖さ、ワクチンがどのようにして効くのかなど、映像で分かりやすく伝 えていてとてもよかった。また、40年もの間、mRNA一筋に基礎研究を続けてき たカリコ博士の人柄や人生について、本人や彼女をよく知る人物によって語られてい た。成功という光の面だけでなく、長年の苦労や失敗談も含めて立体的に人物が描か れており、とてもすてきな人だと感じた。スタジオでのアナウンサーと山中教授との やり取りも的確で安心して聞くことができ、統一感のある番組だった。
- 5月30日(日)の小さな旅・選「骨とろくろと雨の花~岐阜和傘~」を見た。織田信長が築いた城下町と説明があったが、木材や和紙を生かした工芸品の文化が花開いたのは江戸時代であり織田信長とは全く関係が無く、無理やり和傘の話に結び付けようとしているのではないかと感じた。岐阜の和傘を紹介する際、川原町の和傘店がたびたび取り上げられているが、加納地区で昔から作られている特産であり川原町のものではないと思う。川原町には、古くからの材木屋や日本有数の懐紙屋があり、さまざまな形態の紙製品を作り続けている職人がいる。番組は「川原町で和傘」のイメージを植え付けようとしているのではないかと感じてしまい、中世から川港として栄えてきた町の歴史がわい曲されたかのように思えた。町のイメージが脚色されているかと思うと寂しくなるので、それぞれの町の歴史を大切にして番組を制作してほしい。
- 6月6日(日)の目撃!にっぽん「"家族"の記録~写真家・植本一子 心を刻む~」は、写真家の植本さんのコロナ禍における3か月間をつづったドキュメンタリーで、生活が不安定になる中、パートナーとのかかわり方やさまざまな葛藤、子どもの成長の様子などを描いていた。パートナーと家族のあり方に思い悩む植本さんが、何にこだわっているのかの説明が足りないと感じた。ことばで説明できない部分もあり、過度に説明せずそのまま伝えることもドキュメンタリーとしてのよさかもしれない。た

だ、植本さんの亡くなった夫への思いなど、ベースとなる情報を知らずに番組を見た 視聴者にとっては、分かりにくい部分があったのではないか。この番組もジェンダー という切り口で扱えば、植本さんが何にこだわっているのかが分かったのではないか と感じた。

- 6月6日(日)の「技研公開2021 未来のテレビを見てみよう」(総合 後4:35~ 5:00)を見た。技術開発の成果を紹介するという硬めの内容だが、未来の世界では当た り前となっている技術を、その誕生から振り返るという設定で、ロボットと若者の掛 け合いで進み、かなり軽めの雰囲気になっていた。3つの技術が紹介されており、1 つ目は没入型ディスプレーだった。360 度取り囲むディスプレーの実現には曲面素材 が必要で、柔軟性の高さが特徴の有機ELを紹介していた。民間技術だと思っていた が、NHKでも20年以上取り組んでいるということは知らなかった。素材の開発だ けでなくフレキシブルディスプレーのようにどう活用するかを研究することも非常に 有用なことだと思った。2つ目は空間共有システムだったが、あまり訴えかけるもの がなかった。昔の大家族の団らんを今のリビングに再現して取り戻すという説明も、 取って付けたように感じた。3つ目はテレビを一緒に見ながらおしゃべりしてくれる ロボットで、これ自体にはあまり興味を引かれなかった。ただ、このロボットに使わ れている画像認識の技術に、NHKが50年以上前から取り組み続け、それがディー プラーニングの基礎となり、世界的に権威のあるバウワー賞を受賞したことは、もっ と広くアピールしてもよいのではないかと思った。技術的に可能であっても、広く普 及させるためにはコストの壁を越えなければならないことや、だからこそ地道で多面 的な技術開発に意義があるといったことも、広く知ってもらえるようなパートがあっ てもよかったのではないか。
- 6月6日(日)のNHKスペシャル 2030 未来への分岐点(4)「"神の領域"への挑戦〜ゲノムテクノロジーの光と影〜」は、テーマ設定が非常に秀逸だと思った。最近、SDGsに関する取り組みが増えてきているが、表面的なものが多く、17個のゴールの中から、ひも付けしやすく分かりやすいテーマばかりが扱われているように感じる。民放では、スポンサーの意向も加味しているのではないかと思うほど、SDGsが誤解されたまま扱われていることがあり、有識者の中でも疑問の声が出ている。一方、NHKでは、持続可能な未来を模索していくため、自分たちが考えなくてはならない重要なテーマは何なのかを、しっかりと捉えたうえで制作していることを強く感じさせる番組だった。今回は遺伝子を操作することについての功罪を取り扱い、次回はAIによる軍事的被害の拡大などについて取り上げる予定とのことだった。技術は必ずしもよい面だけでなく非常に怖い面も持っていて、地球規模の課題を膨らませてしまう可能性もあることをテーマとしていたのが非常によかった。この点は、以

前から専門家の中でも大変重要だと指摘されてきたにもかかわらず、世間ではあまり注目されてこなかったので、ここに光を当てるのはすばらしいことで公共放送の役割を果たしていると思う。近年、技術者の倫理がとても重要になってきており、大学でもその教育が重視されてきているので、併せて取り上げるとよりすばらしい番組になると思う。このシリーズは、「未来へ17アクション」「地球のミライ」「NHKクリエイティブ・ライブラリー」と連携してウェブでも展開しているが、「NHKクリエイティブ・ライブラリー」には、第1回のものしか公開されていない。それ以降のものも公開してほしい。多くの人がコンテンツを自由に活用できる取り組みを継続していくことで、NHKの番組の質の高さや有用性が広く認識され、NHKプラスなどほかのサービスの利用者の増加にもつながると思う。短期的な視点だけではなく中長期的な視点で、視聴者サービスの価値を高めていくという意味でも、オープンアクセス性の向上やウェブでの取り組みとの連携を強くお願いしたい。

- 6月8日(火)の「まるっと!みえ」のコーナー、イチ押し!の「コロナ禍の学生生活 "住んでいる県が違うだけなのに"」を見た。三重大学が緊急事態宣言の実施区域から通う学生に誓約書を書かせていたことについて、1人の学生の声を取り上げ、そのつらさを紹介していたが、学生側の立場から一面的に伝えている印象が残った。実際には、感染が拡大している地域から通ってくる学生と同じ教室で授業を受けたくないという声もあり、同じ学生の中でもさまざまな意見がある。さらに、今や大学のステークホルダーは地域社会全体にまで広がっており、さまざまな立場での考えがあると思う。1人の学生の声だけを取り上げて「よくない」というのではなく、プラスとマイナスの両面から取り上げるべきだと思う。
- 6月10日(木)のクローズアップ現代+「ジェンダーギャップを町ぐるみで解消・ 試練の先に」を見た。ジェンダーギャップの解消に取り組む兵庫県豊岡市を3か月に わたり密着取材していて、まさに理想と現実とのギャップを突きつけられる番組だっ た。ジェンダーギャップの解消を進めているという企業を取材した際、女性社員がお 茶を出す場面があった。取材側の指摘に対し、社長が「差別のつもりは全く無かった が、やはり気になるだろうか」と返していたのには、日常に隠された性的役割分担意 識に気づくのが、いかに難しいかを感じた。その企業の従業員へのアンケートでは「高 い役職を担いたい」と答えた女性はわずか9.1%で、男性の38.7%とは大きな差が あった。また女性従業員が、大学に行きたくても家族の反対にあったことや仕事と家 庭の両立の難しさを語る様子からは、ジェンダーギャップの存在そのものが、さらに その隔たりを広げているように感じた。町内会の役員を務める男性からは「女人禁制 の伝統行事も少子高齢化のため女性が参加するのはしかたない」という発言があった。 男性はディレクターに「この発言は気になる?」と問いかけ、「それがまさにギャップ

なんだよね」という本音の語り合いが生まれていたのはよかった。3か月の密着の中で、先ほどの企業で女性のお茶出しが廃止されるなど、ジェンダーギャップに気付き、解消に向け変化していく様子が見られてよかった。コロナ禍によって、日々の食事にも事欠くシングルマザーや子育てで孤立する女性にとっては、ジェンダーギャップそのものが遠い存在で、目の前の生活を何とかしてほしいという訴えもよく理解できた。ただ、女性が困難な立場に陥ってしまうのは、やはり根底に男女格差があると思う。その点について、豊岡市では、男女で平均年収に約200万円の差があることや、男性の80%以上が正規雇用なのに対し、女性は半数以上が非正規雇用であることなども取り上げていたのはよかった。さまざまな立場を踏まえながら現実的な側面を伝え、その上で理解を広げていく番組となっていた。

- クローズアップ現代+「ジェンダーギャップを町ぐるみで解消・試練の先に」を見た。外部の取材やカメラが入ることで、当事者がこれまで意識してこなかった何かに気付いたり、本音が見えてきたりすることが多く、それがこういった番組のだいご味だと思う。豊岡市は市長選で演劇のまちを推進していた現職が落選したこともあり注目していたので、さまざまな取り組みがどうなっているのかも知りたかった。
- 6月11日(金)のナビゲーション「"生きる天才"と私たち~ケニア・スラムとつながる人々~」を見た。ケニアの人たち全員が非常に明るくたくましいという、ステレオタイプ的な描き方だと感じられる部分もわずかにあったが、現地の人たちの笑顔や、子どもたちの生き生きとした表情は非常によいものだった。スラムの映像を見て影響を受けた人として、日本の女性教員や親のアルコール依存症により苦しい少年時代を送った男性などを取材していた。彼は、スラムの孤児の少年がみずから勉強したいと学校に通い、卒業後はミュージシャンになる夢をかなえたことに励まされたと言う。その後、ケニアを2度訪れ、その少年と一緒に撮った写真も紹介され、よい番組だと思いながら見ていた。ただ、番組側が彼らをどうやって探し出したのだろうと気になり調べてみると、マゴソスクールを支える会という組織がさまざなま支援をしていることを知った。その中にはケニアへのツアーもあり、彼はこれを利用したのではないかと思った。日本側に立派な支援組織があるにもかかわらず、番組では、それがほとんど紹介されなかったように思う。演出的に効果があると判断したのかもしれないが、もしそうであれば誠実な報道姿勢とは言えないのではないか。

#### (NHK側)

ケニアのマゴソスクールを支援する人たちがいることを番組の 中で紹介はしていた。しかし、マゴソスクールを開校した早川さん の取り組みに重点を置いたため、組織自体を紹介する部分が短くなってしまった。決して演出的な意図で触れなかったわけではないが、意見は今後の参考にしたい。

- 6月13日(日)の小さな旅「提灯(ちょうちん)つなぐ心意気~福井県三国祭~」を見た。祭りを担う地域の人々を取り上げていたが、その人選がすばらしかった。ちょうちん職人やすし屋の大将、代々お囃子の指導をしている親子などが描かれ、祭が形作られる背景には人々のつながりや受け継がれる思いがあることがよく伝わってきた。映像も美しく、毎回とても丁寧に作られている番組だと思う。福井放送局で制作、放送している2分番組「チアアップふくい」を見た。全国的に有名な福井商業高校のチアリーディングチームのJETSとNHKが協力して地域を応援する番組で、これまで放送を重ね、バリエーションも増えてきた。女子ラグビーチームのメンバーを募集する回や、地域の団体をJETSが応援する回もあり、コロナ禍でも地域で頑張る人たちの姿を目にすることができ勇気づけられている。内容も型にはまったものではなく、それぞれの団体に合わせた作りになっていて地域に寄り添う姿勢が感じられる。応援とは本来そういうものだと思い、毎回楽しみにしている。構成を変えるなど、今後もチャレンジしていくことで、また違った楽しみも生まれると思うので、期待している。
- 5月29日(土)の日本一の氷瀑に挑む「立山連峰ハンノキ滝 単独初登攀(はん)の記録」(BSプレミアム 後 6:00~7:29)を見た。アイスクライミングの選手が 500メートルもの氷瀑に挑む姿を伝えていた。本人による淡々としたナレーションからは、緊張感や命を懸ける思いがとてもよく伝わってきた。体に付けたカメラや地上からの望遠による氷瀑を登る映像や、ドローンでとらえた氷瀑全体の映像からは、手に汗を握って見るほどの緊張感が伝わってきた。ふだんは会社員をしているが、日頃から体力をつけ技術を磨いている姿も紹介されており、とても印象に残るよい番組だった。
- 6月12日(土)の有吉のお金発見 突撃!カネオくん「みんな大好き!とろ~り チーズのお金の秘密」を見た。ふだん何気なく購入しているが、改めて考えると身近 なようで意外と知らないチーズについて知ることができ、興味深かった。ナチュラル チーズとプロセスチーズの2種類に分けられることや、プロセスチーズはナチュラル チーズを加工して作られていることを、目で見て理解できるように構成されていて分 かりやすかった。ただ、内容はプロセスチーズに偏っており、ナチュラルチーズの製 造工程や、どこで作られてどのように運ばれてくるのか疑問だった。プロセスチーズ のほうが大量生産可能で長もちするから値段が安いと紹介されていたが、原料となる

ナチュラルチーズのほうが高価で、さらに高価な機械を使って加工した結果、かえって安くなるということが、あまり腹に落ちなかった。単純に考えれば加工の手間や機械の償却といったコストがかかるので安くなるとは考えにくいが、例えば市場規模の違いが価格に反映されているといった、逆転現象に隠されたお金の秘密にまで切り込めば、おもしろい内容になったのではないか。また、日本ではプロセスチーズのほうが人気だと伝えていたが、消費量はナチュラルチーズのほうが多くなっているので、何を根拠に人気があるとしたのか疑問に感じた。さまざまなプロセスチーズ製品の歴史と開発の裏側はおもしろく、特にとろけるチーズと宅配ピザの関係は興味深かった。ナチュラルチーズからプロセスチーズが生まれた経緯についても掘り下げることで、乳業というものが農業から"工業"へと変遷していく姿を感じられて、奥行きが生まれたかもしれない

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

## 2021年5月NHK中部地方放送番組審議会

5月のNHK中部地方放送番組審議会は、20日(木)、NHK名古屋拠点放送局(ウェブ開催)において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ショートストーリーズ「#29 思い繕う かけつぎ職人~岐阜 美濃加茂~」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告の説明、ならびに「2020年度中部 地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告と番組編成の説明が行われ、 会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師/玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス(株)代表取締役会長)

# (主な発言)

<ショートストーリーズ「#29 思い繕う かけつぎ職人〜岐阜 美濃加茂〜」 (総合 5月1日(土)放送) について>

○ 親子の間で受け継がれる職人の技と心を、明るく落ち着いた雰囲気で描いており、家族で一緒に楽しめる内容だった。単に継承するだけでなく、さらなる研究を重ねて技術を発展させようとする娘の佳子さんの心意気は非常に印象的だった。かけつぎはそれほど広くは知られていないと思うが、そのような中でも、次世代の職人である佳子さんがインターネットを活用し、思い入れのある服を直したい人と直接結び付いている話はとても参考になった。店を訪れた人々の服についてのエピソードや、修復の工程、よみがえった服を試着する様子などが一連の流れとしてスムーズに構成されていてよかった。佳子さんがかけつぎ職人を志した理由や、多忙な中でも親の責任を果

たす姿に共感でき、父親の鉄舟さんが娘の晴れ舞台のために一度は断念したテーラーとして再び腕を振るってスーツを仕立てた話には心が温まった。鉄舟さんが37歳で初めてかけつぎに出会い、その道で身を立てていこうと決意した経緯も加わると、かけつぎにかける思いがより伝わったのではないか。背広を直しに来た人を「サラリーマンふうの男性」と表現していたが、後日、自宅でも取材をしていたのであいまいな表現にする必要があったのか疑問に感じた。また、かけつぎの原理について実際の映像だけでは理解しづらくアニメーションや図などを使って、どのように織り込まれているのかを説明してほしかった。大使館でのイベントでかけつぎを披露したとのことだったが、日本にしかない技術なのか、日本で活躍する職人はどれくらいいるのかなども気になったので、かけつぎ自体への理解がもう少し深まる情報もあるとよかった。

- 見終わったあと温かい気持ちになる番組だった。ただ、技術の継承という意味では、かけつぎ以外にもさまざまな職業で親子の物語があるのではないかと思った。かけつぎとはどのような技術なのか、詳しく教えてほしかった。繊維の構造をまとめた組織図をどのように使って修復するのかや、これまでの技術では修復の難しかった生地まで直せるようになった理由など、魔法のように直していく過程がもう少し分かるとよかった。小さな物語というテーマに沿って、仕事以外の私生活のエピソードも紹介していたと思うが、それよりも、かけつぎのやり方や作業の様子を見せたほうがおもしろかったのではないか。また、依頼される服は大切なスーツなど、修復にそれなりのお金をかけているとは思うが、どれくらいの費用が必要なのか知りたかった。直接的に値段を言わなくても、さりげなく値段が分かる物を映り込ませるなどすれば納得感があったのではないか。父親と娘がかけつぎ職人になった理由や、どのように技を受け継いできたのかについては、しっかりと描かれており、非常に楽しく見られた。
- 以前、同じような番組を見たことがあり既視感があったものの、父親がテーラーからかけつぎ職人になり、娘へと受け継がれていく様子が家族の歴史とともに描かれていておもしろかった。華々しさは無かったが、つい見入ってしまった。特に、魔法のように生地を直すかけつぎという技術が伝承されているところがおもしろかった。また、海外のイベントで評価されたという話は、東海地区の店として誇らしく感じたし、興味深かった。かけつぎを通じて、修復を依頼する人、修復をする人、双方の人生が映し出されているようで、仕事を通じて人に喜ばれる姿を見ることができてよかった。
- セピア色のオープニング映像からは懐かしく温かな雰囲気が伝わり、ディレクターの語りも素朴で誠実な印象だった。魔法のように服が直っていく過程は感動的で、以前、かけつぎによって友人のコートが美しく直って驚いた自身の体験を思い出した。 1ミリの間に4本の糸を通す描写から、かけつぎは繊細で集中力がなればできない技

だとよく分かり、1センチ織り込むのに約40分かかることにも驚いた。スーツの見返しからかけつぎに使う生地を切り取っていたが、切り取った部分もきれいに修復されていることまで伝えており、視聴者の「あの部分はどうなってしまったのか」という疑問にも答えていたと思う。仕上がり具合からは、本当に細やかなところにまで心遣いが行き届いていることが伝わり、見事によみがえった服に感動する家族の姿に思わず涙が出そうになった。父親と娘が、ふだんはなかなかことばにできない尊敬や感謝の気持ちをお互いに伝えあっており、親子にとっても番組がよい機会になったのではないか。見ている側も「こんな親子になりたい」「こんな仕事がしたい」という爽やかな気持ちになれた。父親の膨大な生地の研究が娘の道しるべになったという話からは、手取り足取り教えるのではなく、自分で見て学べという職人かたぎの姿勢が伝わってきた。情報技術の発展によって、このような誠実で努力を惜しまない職人の技が、より多くの人の役に立つようになったことはすばらしいと思う。服が直って喜ぶ家族の姿は、「人々を笑顔にする魔法のかけつぎ」というナレーションのとおりだと思った。料金が気になって思わず調べてしまうほどに印象深くとてもよい番組だった。

- 職人親子の関係、依頼に来た人の背景、かけつぎの技術という3つの要素のバランスが大変よく、多くを語っているわけでもないのに、スムーズにストーリーがつながっていたと思う。タイトルに合った内容であり、音楽や語りのトーンなど全体を通じてすっきりとデザインされていて好感を持った。取材がきっかけとなり、親子がふだんはなかなか言えない本音の部分までも語っている姿はほほえましく、対面ではそこまではお互い言わないだろうなと思わせるところが、これもまたよい親子の関係なのだろうと感じた。依頼した人の背景まで拾い上げ、自宅にも訪れるなど、丁寧に取材している印象を受けた。父親の生地研究の膨大さを示す映像と、娘もそれを超える努力をしてきたからこそ今があることを示唆する内容がきちんとつながっていて、とてもよい映像の作り方だと思った。料金を調べたが安くはない金額だったため、やはり依頼する人はその服に非常に深い思い入れがあるのだと思った。ファストファッションが広まる中で、物を大切にするということや、物の背景にある自分のストーリーを改めて見つめ直すきっかけになる番組だと思った。
- 一般的にはあまり知られていない、かけつぎをする職人親子ということで珍しさを 感じた。娘の佳子さんは、高校生の時に自分の不注意で傷めてしまった友人のズボン を父親が見事に直してくれたことに感動し、かけつぎのすごさを実感して受け継ごう と思った気持ちがよく分かった。また、研究熱心な父親に弟子入りし、今では日本を 代表して海外のイベントで技を披露するほどの職人になっているとのことだった。か けつぎで服を直してもらった経験はあるが、その工程のきめ細かさは想像以上だった。 日本人ならではの手先の器用さや、細かな配慮、そして誇るべき技術の継承を今後も

広く取り上げていってほしい。別の番組で、長年使える物か見定めて買うことや、再使用やリサイクルなどを意識して資源をむだにしないよう心がけるべき時代だと伝えていて、この番組も地球温暖化防止につながる内容だったように感じた。

- 内容がとても濃く、一気に見てしまった。職人としての親から子への技術の継承、 父親の背中を見て育ってきたという親子の物語、店に持ち込まれる衣類にまつわる持ち主の物語がとても丁寧に描かれていた。持ち主の物語の紹介では、昔の写真なども活用しながら伝えていてよかった。かけつぎの技術が魔法のようで本当にすばらしく、番組ではとても丁寧に撮影していたとは思うが、それでもまだ「どうなっているのだろう」と思えるほどの技術だった。また、父親が研究して作成していた組織図がとてもきれいだった。地域のお店が世界に向けて発信し、遠方からも依頼があることを伝えていたのもとてもよかったと思う。全体的にとてもよくまとまっており、「ショートストーリーズ」というタイトルにふさわしい、たくさんの要素が濃縮された番組だった。
- 非常にすてきな番組だった。お気に入りの衣服を修復するかけつぎは非常によい取 り組みだと思う。直した場所が分からないように修復することで、物に込められた思 いをよみがえらせるということが伝わるよい内容だった。物の機能を重視する考え方 から、物に込められた意味や思い出を重視する方向へ価値観が変化しつつある今、か けつぎに注目したのはすごくよかったと思う。こういった職人を敬える社会になって いってほしいと強く感じた。こうしたことに光を当て、社会における新しい価値観の 広がりを加速させていくこともメディアの大きな役割の一つなので、その観点からも すごくよい番組だったと思う。いろいろな切り口で物語を紹介している点も印象的 だった。仲介業者を挟むビジネスモデルから、顧客の顔や声に直接触れられる形式に 進化していく話には、大量生産・大量消費社会からの脱却という観点がうまく盛り込 まれていたと思う。かけつぎの紹介だけにとどまらず、物自体やそれに込められた人々 の思いを大事にしてきた職人の、父親と娘の物語が織り交ぜられているところもよ かった。父親が蓄積してきた技術と娘の新たな取り組みが組み合わされることで困難 な修復を成し遂げ、顧客の思い出をよみがえらせた場面は非常にスムーズな流れで、 分かりやすかった。コンセプトとしても、異なるものを組み合わせて1枚の布にして いくというイメージと合うストーリーになっていて、すごく感動的だった。
- さまざまな物語をうまく織り交ぜて制作していたと思う。注文から納品までのかけっきの流れ、作業工程がイメージできる番組だった。年間 2,000 点以上受注しても、収入としてはそれほど多くはないと思うが、40年間で10万もの人々の思いとつながっていると想像するだけで豊かな気持ちになれた。職人のかけつぎへの思いだけで

はなく、客の物語もよく伝えていたと思う。職場と家庭が同じという環境で、常に神経を張り詰めて働くことは、気持ちの切り替えが難しいのではないかと思ったが、毎週末、父親が古民家で自分の時間を過ごす姿を見て、この時間が妻や娘の息抜きにもなっているのではないかと感じた。かけつぎを何度か利用したことがあったので、きれいに直ったときの客の思いに共感でき、非常によい番組だと感じた。

- 根底に親子の信頼関係、尊敬や感謝の念があって、ほっこりした雰囲気で、ほっとさせられる番組だった。父親と娘が交互に登場し、依頼者のエピソードと縦糸横糸をなすよう上手に構成されていて、伝えたいことがうまく届いていたと思う。出来上がりに喜ぶ依頼者の姿からは、日常におけるさまざまな行為の動機には、人に喜んでもらいたいという気持ちがあると感じ、仕事に取り組む原点も再認識できた。依頼者の喜ぶ姿を取材するために遠方まで出向いた効果もよく出ていたと思う。父親が作った組織図は織物の奥深さを見事に表現していた。日本文化を紹介するニューヨークのイベントにかけつぎ職人代表として出ていたが、彼女の技量が全体の中でどれくらいの位置にあるのか、どのような経緯で選ばれたのか、どのような技を披露し、その反響はどうだったのかなど、もっと詳しく知りたかった。父親が古民家で過ごすシーンは少し余分だと感じた。親子の関係がメインテーマではないが「通奏低音」となっていて、ほっこりできるよくできた番組だったと思う。
- タイトルが非常によく、いくつもの物語を糸のように織り込み、うまく織り交ぜて出来上がったかのようなすてきな番組で、心が温まった。父親と娘はカメラを意識しすぎることなく、自然な会話ができていると思った。制作者と親子の間に信頼関係ができていると感じられ、何度も通うなど丁寧に取材された番組だと思った。また全体として、親子の仕事や人柄にほれ込んで制作された番組だと感じた。かけつぎの伝統的な技術は魔法のようだと表現していたが、仕上がりを見た客の表情やことば、依頼が全国から来ていることなどを通じて、しっかりとした評価がついてきていることを描いており、本当に高度な技術であることが理解できた。あれほど精緻な仕事を見ていると、利益が出るのかと心配になった。今の社会には物があふれ、すぐに買い替えることが普通になってしまっているが、直して大事に使い続けることの大切さに心を動かされた。番組をきっかけに、かけつぎが広く知られ、仕事の依頼や職人を目指す人が少しでも増えれば、公共放送として意味のある番組になると思う。ナレーションは無理に盛り上げたりはせず、脚色するような演出もなく、かけつぎという本当に見事な技術を等身大に描いており、とても印象のよい番組だった。

#### (NHK側)

かけつぎの技術をもっと紹介したいと思って交渉したがすべてを見せ

るのは難しいということだった。かけつぎの値段は業者によって大きな差があり、紹介することで宣伝になってしまう可能性もあるため、今回は伝えなかった。ただ、これだけ多くの人たちが気になるのであれば、宣伝にならず情報として伝えるにはどのような手法があったのかさらに考えてもよかったのではないかと思った。職人の親子からは「番組を通して自分たちの仕事がどのように届いているのか知ることができ、よい経験になった」と言っていただけたので、かけつぎを続けていく原動力になれたのではないかと思う。視聴者からの反響としては、SDGsに触れているものが多数あり、物をどんどん捨てる風潮に対する否定的なメッセージを感じたという意見もかなりあった。今回いただいた指摘を参考に、今後も取り組んでいきたいと思う。

# <放送番組一般について>

- 4月22日(木)の所さん!大変ですよ「世界中で争奪戦!?狂乱のウイスキーバブ ル」を見た。日本産ウイスキーが人気という話だったが、お金の話題があまりにも先 行しすぎていると感じた。日本産ウイスキーがいつ、どのように始まったのかなどに ついて掘り下げが少なく、物足りなかった。家庭にあるお酒が高値で買い取られた例 を紹介するだけでなく、お酒を買い占めて転売する人がいる問題も取り上げ、酒税法 上、販売免許のない人がなりわいとして継続的に行うと罰則の対象になりうるといっ た情報も、公共放送としてしっかり発信するべきではないかと感じた。さらに、50 年以上熟成された日本産ウイスキーの販売時、転売を防ぐために購入者に作文の提出 を求めたり、ボトルに購入者名を彫り込む対策をしたものの、結局はオークションに 出品されて高値で落札されたことも伝えており、それだけでは転売防止にはならな かったこともきちんと指摘してほしかった。個人でノンアルコール飲料を作っている 話はほっこりする内容だったが、ウイスキーバブルというテーマからはかけ離れてお り唐突な印象を受けた。全体として表層的な印象で、話題性のある部分だけを抽出し ているように思えた。大手ではないウイスキー蒸留所が増えていることや、日本産ウ イスキーの特徴をきちんとした形で取材してほしかった。中国で日本産ウイスキーが 偽造されていることを伝えていたが、日本国内でも海外産ウイスキーを瓶詰めして日 本産と偽って販売する業者も非常に多いと聞くが、そこまできっちり放送すべきだと 思う。このような背景から業界団体が日本産ウイスキーの定義を定めたが、そういっ た業界の大きな動きには全く触れず、お金のことに終始していたのは残念だった。
- 4月23日(金)のナビゲーション「麻酔科医が足りない~三重大学病院 汚職事件 の波紋~」を見た。麻酔科医の需要が全国的にとても増えていて、不足している実情

がよく分かった。汚職事件の動機が純粋に麻酔科医を育成する費用の捻出だけだったとは思えず、疑問に感じた。大学への寄付の見返りとして、その企業の薬品をたくさん使ったと伝えていたが、その流れは逆ではないか。薬品をたくさん使った見返りとして寄付金が流れたのではないかと思うので、番組での解釈に非常に違和感があった。専門家は、防止するには情報公開を進めて金の流れの透明性を高めるしかないと言っていて、まさにそのとおりだとは思う。ただ、トンネル法人を使って行われている状況では透明性が高まるわけもなく、机上の空論ではないかとも思った。三重県は人口10万あたりの麻酔科医の人数が全国最下位で岐阜県は下から2番目、愛知県や静岡県も平均以下なのに対し、石川県や富山県は平均以上と伝えていたが、なぜなのか、平均以上の県はどのような取り組みをしているのかといったことも、今後、取り上げてほしい。事件の背景は分かったが、見返りの流れなど、解釈にいくつか甘い点が見られ、少し違うのではないかと感じた。

- ナビゲーション「麻酔科医が足りない~三重大学病院 汚職事件の波紋~」を見た。 タイトルだけを見ると、番組での描かれ方によっては取材先や地域医療へ大きな打撃 を与えかねないと感じたが、テーマに対して丁寧に向き合い、過剰な演出のない素直 な構成で好印象だった。起きた事象を表面的に捉えるだけでは、汚職や不祥事の根本 的な問題は解決しないと思う。その点において、ニュースでは悪徳医師のような扱い で繰り返し報道されていたのに対し、「ナビゲーション」では国内トップレベルの麻酔 科医を育成しようとしていた元教授の思いも取り上げていた。同じ人物でも、番組に よって描かれ方が大きく異なることには不思議な気持ちを抱いた。汚職事件そのもの を取り上げたというより、麻酔科医の不足やその実態を中心に描き、麻酔科医のニー ズの高さなどについて、複数の病院を取材して生の声とともに丁寧に伝えていた。麻 酔科医不足の問題を切り口に掘り下げていたので、地域医療にダメージを与える内容 ではなく、事件が起きた背景の理解が深まる作りになっていたと思う。また、麻酔科 医を目指す人に対してネガティブな印象を与える部分が少なかったことや、大学が寄 付金をもらうこと自体は罪に当たらないことをはっきりと伝えていたこともよかった。 麻酔科医不足の問題を幅広く視聴者に認識してもらい、これまで注目度が低かった麻 酔科にスポットライトが当たることで、今後人材が増えていくきっかけになるとよい と思った。
- 5月7日(金)のナビゲーション「あるスリランカ人女性の死~入管収容施設で何があったのか~」を見た。この番組がひとつのきっかけとなり、入管での収容者の扱いが社会問題化、政治問題化していったことは大きかったと思う。入管法の改正は見送られたが、改正案は在留が認められない収容者を迅速に送還させることを目的としていると思うが、収容の長期化以前に、収容者の健康管理が適切に行われていない点や、

本人の声がきちんと届いていないことが問題だと思う。出入国在留管理庁が作成した中間報告書には、病状や医師の声が反映されておらず、がく然とした。亡くなる直前の診察が外部の病院で行われ、診察したのが精神科医だった点も、いかがなものかと思った。1月から吐血や脱水症状があって電解質異常が予想される中、面会した支援者が何度も問題だと言っているのに、3か月も放置されたことに痛々しさを感じた。あってはならないことで、収容者の人権問題を問う番組だったと思う。解説者は今後の課題として、第三者機関の設置や収容対象者の見直しを挙げていたので、引き続きこの問題を取り上げていってほしい。報道として価値がある番組となっておりよかった。

- ナビゲーション「あるスリランカ人女性の死」を見た。ニュースで見たときからこの事件のことは気になっていたが、こんなことが本当に起こっていたのかと改めて思った。収容施設の外観は新しくて清潔な雰囲気にもかかわらず、中で起きていたのは、今この時代に本当にあったとは信じられないようなことだった。まだすべてが明らかになってはいないが、まとまった時間を使って事件のことをよく伝えていたと思う。
- 5月10日(月)の「【よるドラ】きれいのくに(5)」を見た。整形によってほとんどの大人が同じ顔をしているという設定で大人役は限られた俳優が演じているため、整形をしていない高校生役の演技がとても映える作りになっていたと思う。SFやファンタジーのような作品で複雑な部分もあり、このあとの展開が気になっている。高校生のパパ活等の生々しい描写が話題になっており、蓮沼執太さんの音楽も作品を盛り上げていたと思う。マジョリティーとマイノリティーのどちらに属するかという容姿に対するコンプレックスや差別などに対し、かなり刺激的に取り組んでいる作品なので引き続き注目していきたい。
- 5月11日(火)のNHK地域局発 静岡スペシャル「#静岡のミライにきゅんです "買い物"でSDGs」を見た。長濱ねるさんとともに静岡県内でのSDGsの取り 組みについて学ぶ内容で、慶應大学の蟹江憲史教授による解説もあり、出演者が充実していた。地域の番組を全国に向けて放送することで、全国的に影響力のあるインフルエンサーや最前線の専門家が、各地の魅力を新しい視点で伝える機会が増え、地域の人にとっても各地の魅力的な取り組みを再認識することにつながるので非常によいと思った。ブランド力のある企業と連携してフェアトレード製品を企画した学生がリモート出演していたが、ゲストと対話する機会もしっかり盛り込まれていたのが印象的だった。長濱ねるさんはSNSでSDGsに関するメッセージを発信しているとのことだが、有名人による情報発信は一方的になりやすく、双方向性というSNSの特

徴が十分に発揮できないのではないかと思う。この番組では対話の機会を設けることでSNSへの呼び込も試みたのではないかと感じられ、放送局だからこそできる取り組みだと思った。中部地方の各放送局でも、若者との対話型の番組でSNSを活用したキャンペーンとの連動に取り組むことで、若者の関心をさらに高めていくことができるのではないか。

- NHK地域局発 静岡スペシャル「#静岡のミライにきゅんです"買い物"でSD Gs」を見た。番組冒頭で、SDGsについてタレントによる呼びかけやお笑い芸人 の動画、認知度の低さを伝える街角インタビューを使って紹介していたので、初心者 向けの番組だと認識した。エシカル(倫理的)消費の紹介では、買い物への意欲やか ける労力に男女間で大きな差があるように感じる部分があり、出演者のほとんどが女 性だったこともあって、女性目線の番組なのだろうかと思った。手提げバックの材料 であるジュートの説明があまりなかったので調べたところ、高い生分解性で環境に優 しく、生産地である発展途上国と対等な立場で取り引きされているフェアトレード商 品ということだった。そういった点もきちんと説明した方がよかったのではないか。 エシカル消費が大切なのはもちろんだが、現状では新型コロナウイルスに関連した応 援消費のほうがさらに優先度が高いのではないかとも思った。業種を問わず地域の施 設や店舗に野菜の定期配送を行う「やさいバス」を紹介する際に出た、物がどこから 来てどこへ行き、最終的にどのように捨てられるのかは非常に大事な視点だと思う。 これまでも地産地消が推奨されてきたが、静岡県の生産物の7割が県外に出てしまう ということで、消費する側の地産地消への意識が追いついていないことの表れのよう に感じた。全体としては、初心者向けとはいえ、消費者意識の啓発という意味では内 容が少し薄かったと思う。SDGsのゴールは解釈が難しく、必達目標という見方や 希望的な到達イメージくらいの緩いとらえ方もある。また、その裏側には国際的な金 融経済の思惑などがあるとも言われているので、今回のような地方での取り組みを取 り上げた初心者向けの番組だけではなく、大きな視点でさらに踏み込んだ番組も制作 してほしい。
- 5月13日(木)の所さん!大変ですよ「一流シェフが自宅に!料理人の新しい働き方」を見た。新型コロナウイルス感染拡大防止策によって飲食業界は特に大変で、料理人も苦境に立たされている。そんな中、各家庭の台所で調理する出張シェフの需要が高まっているとのことで、採用試験の様子が紹介されていた。店舗と比べると一般家庭の台所はスペースが限られ調理器具も小さく、時間内に決まった品数を作ることができなかった。調味料も間違ってしまっていたが味付けはよく、献立の組み合わせや清潔感も高評価で見事合格していた。一つの店舗で、すし、フレンチ、イタリアンの料理人3人が同じキッチンを共有している事例も紹介されていた。客に名刺を出し

てあいさつしたり、SNSで料理を発信したりと大変な努力をしていた。酒類を提供する店に休業要請が出され、外食に行きづらくなり、飲食業界にはつらい日々が続いている。一日も早い新型コロナウイルスの感染拡大の終息を願うばかりだ。

- 5月16日(日)のNHKスペシャル「ビジョンハッカー~世界をアップデートする 若者たち~」を見た。社会問題の根本的な解決に取り組むビジョンハッカーがSNS でビジョンを掲げると、あっという間に共感者が集まり大きなムーブメントになっていた。私たちの世代ではあまり実感がないかもしれないが、それが大きなうねりになって課題の解決にとどまらず、課題を生み出すシステムまで変えていく動きはすごいと思った。貧困の連鎖が起こっている社会を変えたいと考えた青年がビジョンを掲げたところ、多くの人たちが衝撃を受け、社会をよくしたいという情熱がどんどん集まっていたが、こういった行動力はまさに若者のパワーだと思った。ほかにも、働く人すべてが正当に報われる社会の実現を目指す人や、貧しい人たちが自立できるようにスラム街で社会システムを考える人など、さまざまな20代、30代が紹介されていた。新型コロナウイルスで大変な世の中になっている中、よりよい社会のために行動する人たちを応援したり、自分にもできることをしていきたいという気持ちになった。
- 「【土曜ドラマ】今ここにある危機とぼくの好感度について」を見た。出演者からナレーションまで、よくこれだけ実力のある俳優陣をそろえられたものだと感心した。国立大学の内部事情や、不祥事の際にどのように対応するかなど体質的な部分を描いていて、かなり骨太なドラマだと思う。最近は新型コロナウイルスのクラスターやハラスメントなどの問題で大学に対する負のイメージが強くなっているが、教育面だけではなく大学運営の厳しさや研究員不足、教員のポストの不安定さなど、深くて重いテーマをユーモアを交えてシニカルに描いており、そのバランスが秀逸だと思った。かなり専門的な内容や用語が出てくるため、視聴者はすべて理解できるのだろうかと感じる場面もあるが、非常に楽しく番組を見ている。
- 4月5日(月)、12日(月)、19日(月)、26日(月)の「100分de名著 渋沢 栄一 "論語と算盤"」を見た。この番組は時世に合わせた本の選択がすばらしく、特に 新型コロナウイルスの感染が拡大したあとは、マルクスの「資本論」、ミヒャエル・エン デの「モモ」、ピエール・ブルデューの「ディスタンクシオン」など、立て続けにすば らしい作品を取り上げていた。講師によってもクオリティーが左右される番組だと思うが、今回の守屋淳さんは丁寧な伝え方で、とても分かりやすかった。伊集院光さん も現代社会と本の内容が呼応しているといったコメントをしており、思わずうなって しまうほどだった。「100分de名著」のSNS公式アカウントが、番組と関連する オンライン講座を守屋さんが担当すると投稿していて、興味を持った。番組コンテン

ツを横方向に展開させたり、立体的な構造を持たせることは、うまく行わないと難しい。番組動画をSNSにも活用するといった横方向への展開はよくあるが、オンライン講座であれば立体的になり、さらに深掘りできる形式だと思うので、おもしろい展開だと感じた。福井放送局でも、福井県が取り上げられた全国放送の番組を深掘りするような地域向け番組を放送していて、おもしろいと思っている。一つの番組を違う観点からもう一度見ることで再生産が起きる手法であり、メディアコンテンツとしてはおもしろい展開がなされていると思う。単に情報発信という側面で複数メディアを使い分けるのではなく、いかにして付加価値のあるコンテンツとして深めるかを考えながら展開していくほうが、よりNHKらしいのではないかと感じた。残念だったのは、「100分 de 名著」のホームページにオンライン講座のページへのリンクが無かったことで、興味があるにも関わらず情報にリーチできない人が出てきてしまうのではないかと思った。

- 「グレートトラバース3 15 min.」では、田中陽希さんの前方や後方、頭上から走る姿を追従したり追い越したりしながら撮影しており、スタッフの体力や登山技術の高さが冒険をうまく演出していると思った。撮影スタッフの装備や技術も一度見てみたいと感じた。現在は最初のシリーズである「グレートトラバース」が放送されているので、番組初期から今に至るまでの推移や冒険の原点が見られてとてもよいと思う。山に登る体力や縁の無い人にも勇気を与えるような番組で、彼の冒険をみんなで応援するのはよいことだと思った。「グレートトラバース」では噴火前の御嶽山に登り、「グレートトラバース3」では噴火後に犠牲者を追悼していた姿には、非常に感慨深いものがあった。
- 「YOASOBIとつくる未来のうた」は「共に生きる」をテーマに若者から物語を募集し、グランプリ作品を基にYOASOBIが番組の歌を作る取り組み。注目の音楽ユニットが歌を作ることで若者の参加を促すことができ、非常によいと思った。また、「共に生きる」というテーマについて考える機会にもなり、番組と連動して若者が参加できる仕組みは非常にすばらしいと感じた。SDGs関連の番組を最近よく見かけるが、NHKのキャンペーンは番組の要素を作る段階から若者を巻き込んだ企画が多く、とても意義のあることだと思う。今後さらに自治体や教育機関などとの連携を強化することで、番組を作りはじめるところから放送後まで長期間にわたって地域への広がりも生まれ、公共放送としての意義や番組の価値がより高まるのではないか。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局

## 2021年4月NHK中部地方放送番組審議会

4月のNHK中部地方放送番組審議会は、15日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「"同居孤独死"親の死に気づかない」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

# (出席委員)

委員長 松田 裕子 (三重大学学長補佐)

副委員長 坂田 守史 ((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)

委 員 稲垣 貴彦 (若鶴酒造(株)取締役)

遠藤 英俊 (名城大学特任教授)

岡安 大助 (中日新聞社取締役)

榊原 陽子 ((株)マザーリーフ代表取締役)

玉井 博祜 (能楽師/玉井屋本舗社長)

成島 洋子 ((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)

平本督太郎 (金沢工業大学SDGs推進センター長)

廣田 憲吾 (愛知県農業協同組合中央会常務理事)

安井 香一 (東邦ガス(株)代表取締役会長)

#### (主な発言)

<ナビゲーション「"同居孤独死"親の死に気づかない」

(総合 4月2日(金)放送) について>

○ 番組ではある一つの事件について、親の遺体を放置した男性の子ども時代から、両親の離婚や父親との暮らしぶり、近隣住民の反応といったさまざまな角度から丁寧に伝え、問題を投げかけていたのでとてもよかった。家族を保護する責任はあるが、単に置かれた環境の問題だけではなく、助けを求める心や時間のゆとり、きっかけを失っている人が多くいるのが現実だと思う。番組では、助けを求めるべきというメッセージを発信しつつ、周囲の関わり方や家族の死とどう向き合うかのヒントとなる内容も伝えていてよかった。ただ、遺体を放置した男性自身の複雑な思いは伝えていたが、亡くなった父親の生前の思いまでは知る事ができず残念だった。日記でも残していれば、家族への思いが何か書かれていたかもしれないと思った。親を弔うということは、

悔やみ、悲しみながらも感謝し、いずれ訪れる自分の死を親の死に重ねて、そこから生きる力をもらうということだと思う。子どもが自立すれば親子の時間は短くなり親の死に目に会える人は少ないと思うので、誰にもみとられず死ぬことが不幸だとは決して言えないのではないかと思った。番組を見て、ふだんから周囲に感謝の気持ちを伝えておきたいと思った。疎遠だったとしても、死別して初めて、生前のことばや記憶がよみがえり、残された人の心の中で生き続けるのが家族だと思う。そう考えると、生前の父親の言動は息子の中で生き続け、事件を背負いながら親の死と改めて向き合っていくことが息子の人生だと思った。

- 取材を受けた男性は、幼少期に家族でキャンプや映画に出かけ、学生時代に1人暮らしを始めるなどごく普通の人物で、どこにでもありうる事例だと思った。父親の病気を機に同居を始めたことはすばらしく、体が弱らないように、身の回りの世話は自分でするよう取り決め、仕事を探すよう促したという話ももっともに感じた。ただ、彼は、誰でも年を取ることを想定していなかったのではないか。せめて一緒にご飯を食べる機会が少しでもあれば、父親の変化に気付いたり、もう少し優しくできたのではないか。親はいつまでも元気だと思いたいものなので致し方ない部分もあり、それを親子関係が希薄だと表現してよいものかと感じた。ドラッグストアの店長だった男性は、新型コロナウイルスの感染拡大によって仕事が多忙を極め、責任ある役職に就いていたこともあり、不幸が重なってしまったのだと思う。ただ、亡くなったことに気付いたとき、なぜ姉に相談できなかったのかと非常に悔やまれた。声をかけてくれる人の存在も必要だったのではないか。誰にでも起こりうることなので、社会全体で考えなければならない問題だと思った。
- どこにでもいる親子2人の普通の家庭で起きており、とても大きな衝撃を受けた。 あまりに気の毒な内容で、構成などを気にする余裕もなく心を痛めながら見た。 2か月もの間、父親が亡くなったことに本当に全く気付かなかったと話していたことや、「心をシャットダウンしていた」ということばが印象的だった。これまでつらいときに繰り返し心を閉ざして生きてきた人が、ここでもまたそうしてしまったのかと思った。ストレスの多い社会では、自分の心を守るためにシャットダウンも大切といった考え方があり、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、その傾向が強くなっているかもしれないと、この事件を通じて感じた。しかし、感情をシャットダウンし続けることは不可能で、いずれ心が壊れてしまうと思う。一方、つらい思いや感情を受け止めるのにも、ものすごく大きなエネルギーが必要で、そのエネルギーを失っている人や、自然や人との関りを通じて生み出せない人が増えているのではないか。一番身近な親との関わりでもエネルギーを貯めるどころか、かえって消耗させていたとすると、どう解決したらよいのか非常に考えさせられた。生前通っていた喫茶店の従業

員が異変に気付いていたのはすばらしい観察力だが、こういったことをどう支援につなげられるかも考える必要があると思った。同居していたにも関わらず親を孤独死させてしまった罪悪感を想像するのは難しいが、親子や家族など親しい人との関係性を考えるきっかけになるとてもよい番組だった。

- 非常にすぐれた内容で、社会に重い問いを投げかけるよい番組だった。去年、同居 孤独死で逮捕された事件はNHKが報じただけで27件あり、そこに着目して取材を 始めた感性はとてもすばらしいと思う。そのうち9件は仕事をしながらの同居とのこ とだったが、同居孤独死と聞くと、社会と接点のない人が起こしてしまうのではない かと想像していたので、残りの18件はどういうケースだったのか少しでも触れてほ しかった。実際の映像がほとんど無いというテレビにとって伝えづらい題材だったと 思うが、本人のインタビュー映像や再現イラスト、イメージ映像をうまく活用してい たと思う。また、スタッフが取材や議論をしている映像を使いながら、取材の過程や 見えてきた事実を伝えるなど、さまざまな工夫がされていたと思う。実際に住んでい た部屋の障子の染みや天井の剥げた跡など、かなりリアリティーを感じる映像があっ たので、重い内容でも最後まで見続けられる作りになっていた。父親が通っていた喫 茶店の従業員が、生前の様子を語っていたのも非常に印象的だった。番組の大半が遺 体を放置した男性のことばでつづられていたが、勤務していたドラッグストアの同僚 や客から、男性の評判や人柄について聞くことができれば、立体的に人物像が浮かび 上がり、さらによくなったのではないか。父親が亡くなっていることに気付いたあと、 捕まることを恐れて放置するに至った心の動きについて専門家に解説してほしかった。
- 周りに迷惑をかけたくないという意識から助けを求められず、仕事にも追われて余裕を失い、最終的にはすべてのことに無感覚になってしまうという現代の社会状況を明らかにしているように感じた。最終的に、親の死という非常に重要な出来事に関しても正常な反応ができないほど無感覚になっていく状況が克明に描写されていた。仕事をしている社会人がこのような状況に陥ったことに大きな衝撃を受けた。社会全体として支え合う意識が希薄になり、過度の自己責任論と他者への無関心が広がる中、高齢の親を息子1人に押しつけたことが悲劇につながったのではないか。職場や行政、地域のコミュニティや親族が関心やつながりを持ち、緩やかなセーフティネットのようなものができれば、安心して暮らせる社会になると思う。同居孤独死が起こった家庭では、家族関係にどのような傾向があったのかがデータで示されておらず、ややストーリー先行と取られかねないのではないかと感じた。視聴者に、特殊なケースであり、自分とは関係のないものと思われたくないという意図は分かるが、だからこそ傾向の分かるデータがあれば、より現実的な問題として感じられたのではないか。2か月間も気付かなかったということだが、生活費や光熱費などはどうしていたのか、金

銭面で全く接点なく生活することはできないのではないかと疑問が残った。実際に親子が暮らしていた家の様子が非常にリアルな映像で繰り返し映し出されたので、夕食時に見るにはつらく感じる部分があった。

○ 同居孤独死が27件あったということだが、国内の新型コロナウイルスによる死者が1万人に迫ろうという中で、その規模の違いを考えると、なぜ今この話題を取り上げたのかと思った。このテーマが社会全体の問題と言えるのか少々疑問に感じた。同居していてもみとられることなく亡くなり、朝になって発見されることはよくあると思う。今回の事例とは何が違うのかと考えたが、2か月も気付かなかったことや放置した理由などは想像の域を越えていて理解できなかった。番組からは、孤独死そのものが問題なのか、遺体を放置したことが問題なのか判然としなかった。今回は一例を示しただけだったが、視聴者に問題意識を持たせ何らかの方向性を見出してもらうのがねらいだとすれば、27件の当事者が置かれた社会的背景や個人的傾向など、もっと全体的な情報を伝える必要があったのではないか。最後のまとめとして、社会全体の問題であるとか、核家族社会の価値観の弊害であるといった結論に無理やりつなげなかったのはよかったと思う。金曜の夜は週末に向けてリラックスしたい時間帯なので、こういった重い社会派の番組を見続けるのは大変だと感じた。

#### (NHK側)

同居孤独死をどう捉えるべきかがこの番組の核であり、悩み続けながら制作した。同じ内容を取り上げた「クローズアップ現代+」では作家の重松清さんに読み解いてもらったが、1つ屋根の下に1人暮らしが2つあっただけだという表現をしていた。親子の生活リズムが異なることですれ違ってしまうのは誰にでも起こりうるとも言っていて、そのとおりだと思った。また、シャットダウンについては、追い込まれると考えることをやめてしまおうとする人もいて、その延長線上で、一番してはいけない場面でシャットダウンしてしまったのではないかと言っていた。本来は心を安定させるためのものかもしれないが、殺伐とした世の中で考えることや人間関係などをシャットダウンして、社会からどんどん孤立していったことが、事件につながったのかもしれない。番組には視聴者からさまざまな反応があり、自分にいつ起きてもおかしくないと思ったという声も多かったので継続して取材していきたい。

○ 残酷かつ悲しい事件で、なぜこのようなことが起きてしまったのか疑問に感じた。 保護責任を放棄して遺体を放置することは犯罪だが、助けを求めれば援助が受けられ たにも関わらず、それができずに援助の網の目からこぼれ落ちてしまった例だと思っ た。国は地域包括ケアシステムの実現に向けて、高齢者が施設ではなくなるべく自宅で最期まで暮らすことを推奨しているが、今回の例では、どこかの時点で支援を求め、施設で保護するなどの対応ができたのではないだろうか。支援を担う人々が、助けを求める声を拾いに行けないという課題があり、父親と息子の2人で住んでいたために支援の対象から外れてしまったという問題もあるように思えた。現在、親子で同居し食事などを共にしながら生活する家庭が少なくなりつつある。一方で、親の面倒は子どもが見なければいけないという法律や風習は残っていて、面倒を見られない人たちを悩ませている。今後このような問題を、法律や倫理の観点でどう解決するかが課題だと感じた。今回の事件は珍しいケースだと思うが、孤独死に至る根底には、親子関係の希薄さやコミュニケーション不足があり、今後どうしていくべきか問いかける番組だった。

- 遺体を放置した男性の映像表現が、殺人犯を扱う際の表現に近いように感じられて 不快だった。不安をあおるような暗い裁判のイラスト。「この人が長い間父親の遺体と 暮らしていたとは信じられなかった」という意図が伝わりにくいコメント。Aさんな どの仮名ではなく「父親の遺体を放置した男性」というテロップ。インタビューの際 のブルーで暗い照明。いずれも、男性の印象を過剰に悪くしてしまっていたように感 じた。また、家族の状況を伝えていたCGも、事件や事故を扱う際によく使われるも のだったように思う。親の転職や離婚が、何か悪いことのように伝わりかねないと感 じた。こうした表現には制作者の意図が入っているようにも見え、本当に放送してよ いのか、男性自身がこの番組を見たらかなりのショックを受けるのではないかと思っ た。同居孤独死という問題には社会的背景があると伝えながらも、客観的な視点や専 門家のコメントなどがなく、視聴者に不安だけを与える内容になっていた。男性個人 の心理的な状況や背景は分かったが、なぜそのような状況で人間は心を閉ざしてしま うのかという専門家のコメントなどがあれば、視聴者が受ける男性の印象を変えるこ とができたのではないだろうか。「クローズアップ現代+」でも同じ内容を取り上げて いたが、男性に対する表現のしかたが異なっており、「ナビゲーション」における表現 は適切だったのかと強く批判したい。
- 同居孤独死をよく知らなかったので学びがある内容だった。亡くなる時に居合わせなかったことや、仕事やストレスなどいくつもの要因が重なり合い事件につながってしまったことが分かった。また、それぞれの要因は誰にでも起こりうる事象であるということも納得できた。自分が壊れてしまう前に心を閉ざさざるを得ないという状況は社会に数多く存在しており、ひと事ではないと感じた。企業や学校では、周囲がカウンセリングを受けさせることで困難な状況の打破につながることもあるが、その仕組みが世の中全体に浸透しきっていないため、このような深刻な問題が起きるのだと

思った。実際に取材を行った記者が出演していたのは非常によかったが、専門家による打開策につながる解説を加えると、より洗練された内容になると思った。また、別の事例をスタジオで紹介する際にイメージ映像を使っていたが、説明を聞けばよいのか映像を見ればよいのか分かりにくく、かえって理解を妨げていたので、パネルによる解説のほうがよかったのではないか。番組の締めくくりに「1つの声かけ、1本の電話、1通のメールが心の距離を縮める」と伝えていたが、周囲とのコミュニケーションを断絶せざるを得ない状況にまで追い込まれてしまった人は自力で意識や行動を変えることが難しいと思う。追い込まれた人の立場を理解したうえで発言すべきであり残念だった。それに対し、「クローズアップ現代+」では、作家の重松清さんの「家族は大切だけど万能ではない、頼りにできる手すりになる存在があれば安心して暮らせる」というコメントを取り上げ「勇気を持って声をかける姿勢が大事だ」と伝えていた。まとめ方が難しいテーマだからこそ「ナビゲーション」でも、有識者からのコメントを紹介するなど、視聴者の理解につながるような番組の締め方が必要だったのではないか。

- 社会とのつながりを持ち、親と同居していても孤独死はありえるということで、遺体を放置した男性について幼少期にまでさかのぼり丁寧に取材し伝えていたと思う。ただ、親が亡くなって数日後に気付きすぐ通報した別の事例では罪に問われなかったとあり、2か月遺体を放置した男性の事例は、放置した期間の長さが罪になったのか、気付いたときにすぐ通報すれば罪にならなかったのか、何が罪にあたるのかよく分からなかった。思考停止に陥ってしまっていた時点で異常な状況であり、事件の発覚を恐れて自殺さえ考えるほど悲惨な心境にあったのだと感じた。親の耳が遠くて会話が無くなっていた別の事例からは、コミュニケーションが取れないときの対処法など具体的な方策を示すところまで踏み込んでほしかった。また、誰にも知らせずに弔われたいという考え方もあり、みんなに囲まれて弔われることこそが幸せだという考えに、とらわれすぎないようにしたいと思った。
- 非常に暗くて重いテーマだと感じた。2つの事例のうちほぼ1つの事例だけを取り上げた理由を明確にしてほしかった。また、27件の事例のうち逮捕者が仕事をしていたのは9件で、その多くが50代の働き盛りだったと伝えていたが、映像で紹介していたリストには「無職」という文字が並んでいたため誤解を招きかねないと感じた。社会的な背景をきちんと示した上であの事件を取り上げる意味を明確にすれば、もっと番組の内容を理解しやすかったのではないか。親が亡くなっていることに本当に気付いていなかったのか真相は分からないが、映像表現によって印象を操作しているようにも感じられ、危険ではないかと思った。「同居孤独死」というタイトルだったが、どちらかと言えば家庭内別居に近く、死に目に立ち会えなかったことよりも遺体を放

置したことに問題があると思うので、違和感があった。亡くなったことに気付かなかった期間の長さとその原因、さらに気付いたあとに放置してしまったことが一番の問題だったはずだが、様々な状況を見せられることで、かえって焦点がぼやけてしまったように思う。気付いた時点で通報せず、臭いを消すために芳香剤を置いてまで遺体を放置していた様子には、心の闇を感じた。人は自分の幸福を最大化するために選択をして生きていると思うが、男性が親の遺体を放置するのが最適だと考え、それを選択してしまう社会とは何なのだろうと思った。問題提起をするのであれば、相談できる相手がいない人や社会的に孤立している人、経済的に困窮している人に向け、まずどこへ連絡すべきかや、葬儀など費用負担が難しい場合の支援など、役に立つ情報も合わせて伝えてほしかった。「子から親へ声かけや電話をしてください」と言っていたが、そもそも家族関係がうまくいっていない人はどうすればよいのか、誰に相談すればよいのかといったことを伝えるべきだった。

## (NHK側)

家族が亡くなっていても気付かなかった事例の約4割で家族関係が希薄化していたという調査結果もある。そのような家族に何を支援するべきかや、すべてを支援しきれない社会になったときにどうすべきか、今後も考えていきたい。「クローズアップ現代+」では、家族が自宅で亡くなっていたときの連絡先や葬儀代が経済的に負担できない場合の支援などについて、番組と連動してSNSを活用し伝えた。「ナビゲーション」でも具体的に役立つ情報を紹介していきたいと思う。映像表現については大変厳しい指摘だと思っている。今回はCGや照明が番組の印象に大きく影響してしまったのかもしれない。指摘は制作担当者の間で共有し、今後十分に気を付けたい。同居孤独死にはさまざまな背景や要因があるので、どのような形で伝えていくべきか考えながら、今後も継続して取材を進めていきたい。

#### <放送番組一般について>

○ 3月19日(金)の「NHK静岡開局90年 静岡にきゅんです スペシャル」(総合 後7:30~8:42 静岡県域)を見た。開局90年ということで「静岡にきゅんです」をキャッチフレーズに1年間継続して取り組んでいくキャンペーンのうち、最初の特集番組だった。静岡放送局の制作スタッフの顔が見える作り方になっていてよかったと思う。静岡県出身のタレントの出演もよかったが、スタッフみずから自転車に乗って出かけたり、SNSに集まったメッセージを紹介したりと頑張る姿が見え、とてもよかった。きゅんなスポットの紹介というのでマイクロツーリズムの番組かと思った

- ら、個人の記憶や思い出にまつわる場所を発表するような内容だった。部外者が入れない場所や小さな喫茶店も紹介されていて、地元の人のための地元紹介という感じだった。SNSでは「知ってる」など共感するメッセージが届いていて、視聴者も、自分に関わりがあると強く感じられる番組だったと思う。長時間だったが最後まで飽きずに見られた。今後の関連番組も引き続き見ていきたい。
- 3月19日(金)の「ド真ん中ジャーナル!」(総合後7:57~8:40 東海3県ブロック)を見た。新型コロナウイルスのワクチン接種の具体的な流れを接種会場から生中継で伝えており、大変分かりやすいリポートだった。司会の井戸田潤さんのコメントにはむだがなく、進行もよかった。リモートでの出演者も含め、全員の表情がうまく伝わるモニターの配置や画面構成になっていてよかった。専門医の中山久仁子さんからの妊婦や基礎疾患のある人へのアドバイスは分かりやすく、視聴者の疑問にも的確に答えていて、とてもよかった。番組スタッフが映り込んでしまうハプニングがあったが、生放送ならではの活気が伝わったので好意的に捉えた。また、外来生物の被害を取り上げていたが、愛知県は「生物多様性戦略2030」を策定しており、外来種の一覧をホームページで公開している。非常に種類が多く、意外な生物も含まれる驚くような内容なので、今後、番組でも紹介してほしい。
- 3月24日(水)の必修!マウンティング会話講座「J世代の巻」(総合 後 10:45~11:15)を見た。マウンティングは無いほうがよいのに、その会話講座とはどういう内容なのだろうかと思いながら見た。J世代という25歳前後の若者たちが、マウンティングにならないよう気をつけながらもいかに自分のことを伝えるか、とても工夫しながら会話していることを紹介していた。出演者がかわいいお化けのイラストになっていたので、本音を話しやすそうに見え、また、生々しい発言でも視聴者が受け止めやすくなっているように感じた。若者に人気がある、仮想のCGキャラクターを使った投稿動画のよさをうまく組み込んだ演出になっていたと思う。会話のネタを探すために相手のSNSを確認し、ぎすぎすした雰囲気を修復するためにその情報を使うなど、若者どうしの会話の実態を知ることができたのもよかった。今後もさまざまなテーマを取り上げてほしい。
- 4月9日(金)のナビゲーション「ワクチン接種の"ギモン"に答えます」(総合後7:33~7:58 中部プロック)を見た。「ド真ん中ジャーナル!」と重なる部分もあったが、大事な内容なので、情報を随時更新して伝えることが重要だと思う。ワクチン接種が進んだ際には、改めて最新の情報を伝えてほしい。中山医師の落ち着いた説明も非常によかった。ただ、真面目な内容なのに、冒頭のナレーションやアナウンサーの話し方が軽々しく感じられ、ふさわしくないと思った。そのあとは内容に合った雰囲気に

なっていったので、放送前に番組全体のトーンを確認したほうがよいのではないかと思った。「ナビゲーション」は明るい話題から深刻な話題までさまざまなテーマを取り扱っているので、テーマごとにカテゴライズしてそれぞれに合ったトーンや編集のあり方を整理し、制作関係者で共有すれば、もっとよい番組になると思う。今後に期待したい。

- ナビゲーション「ワクチン接種の"ギモン"に答えます」は、高齢者を対象にした ワクチン接種が始まる時期なので放送のタイミングもよく、とても分かりやすい内容 だった。接種の模擬訓練に参加した人が、地域の人にその内容を説明している様子は 大変参考になった。ワクチン接種に対する不安や、予約を自分でできるかといったことなどは人によって大きな差があるが、この番組では高齢者にも分かりやすく、具体 的に使える情報を映像で伝えていた。今回は軽快な雰囲気で、山田アナウンサーの持ち味である明るさが生かされていたと思う。キャスターが番組の印象を作っている部分が大きいと思うので、適材適所でその人の持ち味が生きるような番組づくりができればよいと感じた。中山医師はやわらかい表情で滑らかに話していたので、非常に信頼でき安心して見ることができた。とてもよい人選だったと思う。ワクチンを接種した数日後、人によっては仕事に支障をきたすほどの副反応も出ているので、これからも最新の情報を繰り返し放送してほしい。番組の最後に「ワクチンを打っても油断や安心をせず、マスクや手洗いといった基本的な対策もしっかりするように」とまとめていたが、番組の内容やテーマに合っていないと感じた。
- 4月10日(土)のNHKスペシャル「池江璃花子 新たな挑戦」を見た。2年前から白血病と闘って寛解に至ったが、現在も服薬を続けているとのことだった。過呼吸になってしまうほどのストレスを抱えながらも、こつこつと練習を積み重ねてきたことが分かる内容だった。飛び込みもできないほど筋力が低下した状態からの復帰で、その頑張りにとても胸を打たれた。2024年のパリオリンピックを目指していたが、東京オリンピックが1年延期になり彼女にもチャンスが巡ってきて、運も味方にしたのだと思った。「努力は必ず報われる」ということばに胸を打たれ、どん底からいかにしてはい上がれるのか、学ぶところが多かった。しかし、生放送のインタビューからは、なぜ復帰できたのかまではよく分からず不満に感じた。人生との向き合い方がどう変わったのか、どのようにして前向きになれたのかなど、復活の背景にあるものをもっと深掘りしてほしかった。
- 4月11日(日)の目撃!にっぽん「苦手なことは、可能性だ~ "教えない授業" 半年間の記録~」を見た。先生はちょっとしたヒントを与えるだけで、子どもたちが自分でどんどん考えていくという授業を紹介していた。この学校の先生が東日本大震災

のあとに福島を訪れた際、子どもたちが10年後、20年後の福島の将来を語り合っているのを見て、東京にいる自分の教え子たちはどうなのか、10年後の東京や日本を語れるのだろうかと感じてこの授業を発案したという。番組では、誰かが手を挙げて意見を発表するのではなく、いくつかの小さなグループに分かれてしゃべり合っていたら、どんどんアイデアが出てくるといった様子を紹介していて、子どもたちの成長する姿をよく伝えていた。この授業は、社会で起きるさまざまな問題の答えは1つではなく、対話の中からいろいろなことが生まれてくる、今の授業は一方的に教師が指導するだけで子どもたちの対話を促進できていないのではないかという問題意識から始まった。学校では多数決がよくあるそうだが、本来は対話をし、少数意見を尊重するからこその多数決だったはずだが、そういった大切なことが抜け落ちてしまっているのではないかということを問いかけていて、とてもおもしろかった。教育関係者にぜひ見てもらいたいと思った。

- 4月11日(日)の小さな旅「春ひらく~静岡県 富士宮市~」を見た。プロパラグライダーの女性と父の遺志を継いでワサビを作り続ける男性が取り上げられていて、彼らが地域の中で支えられていることが分かる爽やかなよい番組だった。富士山に向かって飛び立つ映像は圧巻で、このような景色の中で飛んだときの爽快な気分が想像でき、とてもよかった。音楽やナレーションが日曜朝の時間帯に合っていて、落ち着く番組だった。新型コロナウイルスの影響で出かけることが難しい状況の中、とても爽やかな気分になれる番組だった。
- 4月12日(月)の逆転人生「電光石火!コロナ禍で売上ゼロからの逆転」では、各地のアクティビティーを仲介する企業が、新型コロナウイルスによって大打撃を受けたものの、約100人いる従業員の雇用を維持するという目標を掲げてまい進する様子が情熱的に描かれていた。出演者が「自分だったら社員を見捨てて自分だけ助かる」と言っており、会社経営を全く理解していない少し的外れな発言で内容にそぐわないと感じた。新型コロナウイルスの影響で失業した人が非常に多くいる中で、ビジネスに無理解な芸能人を起用してバラエティー色を強くする必要があるのか、非常に強い違和感を覚えた。また、売り上げの推移を示すグラフの単位がなぜかパーセントになっていて、しかも起点が 200%でどの時点を 100%としているのかも分からなかった。インパクトを出したくてそうしたのかもしれないが、数値を正確に伝えることを重視すべきではないかと感じた。売り上げ低迷期における試行錯誤や、ビジネスモデルの革新につながるシステムを短期間で開発するなど、復活を果たすまでの流れが、関係者のコメントによってリアルに描写されていた。一方、ユーザー側の視点が欠けていて、これからの観光のあり方がどのように変わっていくのかを感じとることはできなかった。従来のレジャーは売り手の論理が強く、客を長時間並ばせ、過剰な人数を押

し込んできた面があり、観光客自身もそれを当たり前だと思っていたが、ポストコロナではもっと利用する側に寄り添ったものに変わるのではないかと感じた。開発されたシステムによって、今までと違ってゆったり楽しめたという観光客の反応を取り上げれば、時代の変化も感じられたのではないか。

- 4月13日(火)のクローズアップ現代+「"同居孤独死"親の死に子どもが気づかず…各地で」を見た。「ナビゲーション」では、なぜ事件が発覚したのか疑問だったが、姉による警察への通報があったからだと分かった。遺体を放置した男性が自殺を決意し、姉に謝罪のメールを送ったことで通報され、自殺しようと移動する途中で逮捕されたと知った。最終的に男性は、家族によって救われたのだと思うと、つらい事件の中にも救いがあったような気がした。「ナビゲーション」からブラッシュアップされていて、作家の重松清さんのコメントにより深みが出ており、さらに考えさせられた。
- クローズアップ現代+「"同居孤独死"親の死に子どもが気づかず…各地で」では、男性が自殺しようとしたとき姉に「ごめんなさい」とメールを打っていたり、男性は責任感が強く自分にしかできない仕事を終えてから死のうとしていたことを伝えていたが、なぜ同じ題材を扱っていた「ナビゲーション」では取り上げなかったのか。2つの番組で情報の切り取り方にずいぶん違いがあり、伝え方でこんなにも印象が変わってしまうのかと思った。また「クローズアップ現代+」では、データによってある種の客観性が示されていたし、作家の重松清さんのコメントは視聴者に自分だったらどうしたかを考えるきっかけになっていたと思う。「ナビゲーション」と「クローズアップ現代+」との違いは、視聴者の目線、見る人がどのように感じるかという視点の違いだったのではないか。「クローズアップ現代+」からは、人にどのように寄り添うか、尊厳をいかに大切にするかといった姿勢を感じることができた。社会問題は提起すればよいというものではなく、それを受け取る人間がいるということを強く意識して番組を作るべきではないかと感じた。
- 4月14日(水)のグレートトラバース 15min. 百名山一筆書き踏破への道「天城山」を見た。田中陽希さんが日本全国、百名山の人力踏破に挑んでいる姿を放送していた。津軽海峡をカヤックで渡るなどすごい内容で、自分も一緒にアドベンチャーをしている気分になれる、とても楽しい番組だと思った。
- 4月11日(日)の日曜美術館「生中継! "鳥獣戯画展"スペシャル内覧会」を見た。 教科書に出てくる有名な絵巻物だが、思っていたより実物はとても小さく見えた。「甲」 の巻物にある猿とかえるが擬人化された部分が有名だが、ほかにも多くの絵を見るこ とができた。「乙」にはさまざまな動物がリアルに描かれており、馬や牛といった当時

の日本でも目にしていた動物だけではなく、仏教と共に大陸から伝わったものか、竜 やばくといった空想上の動物も描かれていた。今見ても違和感のない、狩野派などに 通じる図案が墨の濃淡で表現されていた。「丙」には囲碁やすごろくのほか、今では見られなくなった耳引きや犬合わせなどを楽しむ人たちが描かれていた。みんな痩せて いて、当時は裕福な社会ではなかったことも伝わってきた。最後は動物の風刺絵に戻り、祭りなどを楽しむ姿に続いて、かえるとその天敵である蛇で終わっていて、「楽しいことばかりではないよ」と伝えているように感じた。東京国立博物館では初の試みとして、一定のスピードで見てもらうために動く歩道を導入していた。少し速いとも 感じたが、混雑を避けつつ大勢の人を満足させられるのですばらしいと思った。また、 鳥獣戯画を音楽で表現したり、アニメと捉えて解説を加えるなど、会場では味わえない独自の見せ方をしていて見応えがあった。

○ 4月11日(日)のサイエンスZERO「宇宙新時代 H3ロケットはここまで来た!」を見た。日本では約30年ぶりとなるロケットの新規開発を伝えていた。H3ロケットは従来型よりも大きく、シンプルで量産できることをコンセプトに開発しており、新型エンジンのパワーは1.4倍もありながら部品数は3分の1に抑えられており、打ち上げコストもこれまでの半分程度にすることを目指していると分かった。エンジンに採用されている日本独自のシステム、エキスパンダー・ブリードサイクルの説明が非常に分かりやすかった。事前のシミュレーションの精度が上がっているとはいえ、実際にはさまざまな問題が発生していた。30年も途絶えていた、現場の技術者の育成も意識しながら、それらの問題を解決していくプロセスには大変感心した。組み立て工程でトラブルが発生した場面では、重量物に直接触れたり素手で作業したりしており、緊迫感は伝わるものの、安全面という観点からこのような映像を流すのはいかがなものかと感じた。全体的にしっかり取材されており、構成も理路整然としていたと思う。将来の安全保障のためにも、自立した宇宙への輸送手段が日本にも必要であり、宇宙開発を進める意義が大変分かりやすく伝えられていた。

NHK名古屋拠点放送局 番組審議会事務局